
君と過ごす日常的な非日常

御紋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君と過ごす日常的な非日常

【Nコード】

N6885N

【作者名】

御紋

【あらすじ】

彼女は、23歳OL。独り暮らし。オタク傾向あり。

彼は、184歳職業8代目魔王。うっかりオタクに目覚めかけている、一応歴代最強のヒト。

勇者？ そんなものは話の外で密かに消えていますよ、だって一応彼は歴代最強ですもの。

世界の境を跨いだオタクの友情。 そんな感じのお話です。（更新遅め、文字数少なめ、軽快に読める作品が目標です）

擬音語 擬態語を愛している！（笑）

作品への基本姿勢：自分の気分転換のために書かせていただいています。

01 彼女と彼の、ぱーん！

「あーあ、とうとう終わってしまったのか」
神（作者）よ、萌えと感動をありがとう。

ぼろぼろと涙を流しつつ、最終回を迎えた某作品を見終わったところだった。

絵の書き込みの凄さもさることながら、戦闘シーンの素晴らしさに、うっかり右手と左手を合わせて、「ぱーん！」としたいと何度思ったことが。

ぱーん！

沈黙。

「おまえは、何をしとるんだ？」

独り暮らしのフリーダムさについて遠慮せずに「ぱーん！」をしてしまったわけだが。

どうやら、その瞬間を見られてしまったらしいです。

「いや、何かがいたんだ、今ここに」
「夢とかあこがれとか萌えとかがね。」

両手で叩きつぶしたいものだったのか、それは。

呆れた目で、そう答えてきた奴の返事に悶えてみた。

いやだ、それだけは壊さないで、私の青春。私の生きがい!!

ノリに合わせて答えただけの自分の解答を、前言撤回したい心境です。ええ、マジです。

「　　っというか、なんでいるんだ、ここに！」

先に連絡してから、転移させろって言ったよね、あたし!!

奴の持つてる指輪と同じ石を組み込んだピアスは、サインを送ってきてなかったはずだ。

じゃっじゃっじゃ、じゃーん。じゃっじゃっじゃ、じゃーん。

遅ればせながらの、サイン代わりの音楽が脳内に顕れた。

「　　……　　ほれ、連絡　　」

いま鳴っただろ？

悪びれることなく、某魔王はそう告げた。

「　　ふざっけんな、20代女性のプライバシーにくらい
配慮しやがれ、この馬鹿魔王がああ!!」

ばーん!!

某月某日。

異世界における魔王城にて、異界渡りの成人女性がはなった張り手は、いままでのどの勇者よりも素晴らしい攻撃力だったとのこと

です。

一応、俺これでも魔王だぞ。歴代最強の。

乙女の主張は、何よりも勝るのよ！

世界を跨ぐ友人二人（片方、人外）は、今日も仲よしです。

01 彼女と彼の、ぱーん！（後書き）

ぱーん！の元ネタは、有名すぎるあれです。筆者は、血が苦手です。最後まで読み切れなかった。（汗）

普段は二次創作書いてます。オリジナルは初挑戦かな？（あいまい）

どござ、よろしくおねがいします！

02 彼女と彼の、忠実さ（おもに娯楽への）

今日も一日おつかれさーん！なお仕事が進んだ。

明日は休日、遅い時刻までやってる某100円均一ストアへ寄ってから帰った。

買ったモノは、自家用栽培セット！

美味しいフレッシュな果物が食べたい。

食への欲求には忠実でありたい私です。

ぺしぺしぺしぺし！

水色のミニスコップが唸るよ！！

用意したスコップと肥料と苗をバケツに入れて、今日も微妙に薄暗い魔王城の曇天のもとへと繰り出した私なのです。

「なにをなさってるんですか？ ご友人さま」

おっと、声がかかった。

振り返ってみると、獣耳いっちばーん！

魔王城における警備員（正式にはいろいろと長い名前があるらしいが、知るかそんなもん）である、虎人族のマッシュくんが居た。

「今日はエコ活動に励みに来たのですよ」

合言葉は、緑の惑星！（私の）お腹いっばい！

笑顔でこちらは応対したというのに、相手は眉間にしわを寄せて
応対しおった。

ねえ、失礼じゃない？ マツシユくん。（おもに私のか弱い心臓
に対して）

「どこが弱い……」

ぼそりと漏らしたマツシユくんの小声は聞こえませんでした。

ははは、言いたいことは真正面からいいなさいね、マツシユくん。
（超笑顔）

でなくば意見とはみなされなないよ！！（笑！）

「ところでさあ、マツシユくん」

「……なんでしょうか、ご友人さま」

出会った当初はその鋭い牙をむき出しにして威嚇してきたマツシ
ユくんだが、最近はなにかを悟ってくれたらしい。

おかげで話がスムーズに進む。

（ここで出会った当初からひとを無視して話進めてたのは誰ですか
とかいう突っ込みは入らない。 マツシユくんは彼奴等と違
って、読心術は持っていないのだ）

「なんで植えた端から枯れたのかな、私のストロベリーさん」

なんとなく女の子なイメージがするので、勝手にストロベリーさ
んと名付けてみた。

ちなみにバナナだとバナナくんになる。（もちろん、イメージが

男の子だからだ！)

「 魔王城の周りにはいろいろとありますから。…猛毒を含んだ種類のものとか、肉食の種類のものとか、呪的作用のあるものとかが」

おそらくは土が持つてる毒素とか魔気だかに負けたんでしょう。

禍々しいな、おい。

魔王城ですから。

声には出さずに表情で会話してしまった。
いやん、以心伝心。

「 いや、誰かが単純なだけだろう 」

やはりぼそりと小声が聴こえた気がしたが、気にしない。

「 マツシユくんのことか 」
なんだ、そうか。

そこは空気を読んで理解した私でした。

「 ちげえよ！！ 」
どう考えても、おまえのことだ！

一瞬泣きそうな顔に見えたよ、どうしたのマツシユくん。
だがしかし。

否定は許しませんよ、マツシユくん。

だって、この前レイちゃんがあること言ってたもん。

『 マツシユは単純すぎて呪いがかかりにくくて困る 』って。

呪いを趣味とするレイちゃんは、とても悔しそうでした。

「いつのまに俺に呪いかけたんだ！？ あの魔女！！」

叫んだマツシユくんは、ダツシユでレイちゃんを捜しに行きました。

あーあ、S属性が喜びそうな行動するんだからマツシユくんてば。

「あれだからレイちゃんに遊ばれるのにねえ」

かきかきかきかき、さくつ。 合掌。

“ ストロベリーちゃん、ここに眠る ”

やや丸字の日本語でプラ製の名札にそう書いた後、枯れてしまったストロベリーちゃんのお傍に突き立てた。

まあ、あれだ。

魔気とやらに変質してしまって、食べられない猛毒のストロベリーちゃん爆誕とかにならなかつただけ良しとしよう。

下手なB級映画のような展開は欲しくはないのですよ、ええ。

「…あ、しまった。頼まれてたDVD持ってくるの忘れてた」
やばい。

オタクの路を進む私だが、友人である魔王にポータブルDVDプレイヤーセット（懸賞で当てました）でお勧めのDVDを貸すのは嫌なことではない。

たまに、気になりつつもまだ見てないDVDとか借りてきて一緒に見る。

面白いぞー。隣で突っ込む魔王の姿は。

あれだけでレンタル料金の元は取れると信じてる。

「さーせん、魔王さま！ 約束してたDVD持ってくるの忘れまして！！！」

魔王の居室へ戻った後、素直に頭を下げましたら。

「 とってこい、今すぐ 」

即行で自室へと転移させられてしまいました。

ふざっけんな、転移酔いしたらどうしてくれるー！！

最近の魔王様は、B級映画のありえなさが大変お気に召しているらしいです。

02 彼女と彼の、忠実さ（おもに娯楽への）（後書き）

主人公は意外に感情が表情に出ます。

無防備なんです、こっち（異世界）だと。

そして、マッシュくん（実は本名じゃない）。

ところどころでボロが出ています。敬語苦手なの？

03 彼女と彼の、自己分析(前)

癒しが足りない。

そう、癒しが足りないのです、我がMPとHPにぜんぜん足りてない!!

と、いつごとで。

「レイちゃんに遊んで貰っちゃえー！」

ひょっこりと今日も異世界へと旅立つ私であります。

ぽこぽこぽこ。

どろんと澱んだ沼色の液体から、ごぼつとたまに空気が湧き上がっていくのが見えます。

「うわあ、あいかわらず、すごい『らしい』部屋だねえ、レイちゃん」

「可愛いことを言ってくれるわねえ、ご友人さまってば」
うふふふふふ。

さらりと白い頂から落ちる紫がかった銀髪はまさに妖艶と言って間違いない。

ああ、眼福眼福。

「ああんもう、レイちゃんってば本当に美人。これで、1000歳超えてるなんてマジ信じられん、美しいって素敵!!」
「がばり、とついついハグってしまう。
グッジョブ自分。
うっかり媚薬もどきのレイちゃんの身体から香る匂いにやられかけてしまいそうです。」

「懲りませんわねえ、ご友人さまは
学習能力をつけてくださいませ。」

めしやり、と。

麗しき魔女さまの身体から引きはがされてしまった。
いやじゃいやじゃ、電柱でござる。あ、ちがった殿中。
いろいろと間違った時代劇ネタが脳内を駆け回った。
祖父の趣味だったんです、年末の赤穂浪士ドラマ。
録画されてた件の階段落ちを見つつ、痛い痛い痛いとか思っていた私の少女時代。

最近は無くなりましたねー、あの手のアクション。
喜ばばいいのか、悲しめばいいのか。

「ご友人さまって、すごい話の展開しますわよね」
「いかに心の中とはいえど。」

「……………心読まないでください、レイちゃんサマ」

このお城には、読心術を駆使する輩がいるのが、たまにキズです。

あたしが無防備すぎるんだという奴もいたけど、無茶

言うな。読心術とか魔術とかいうものを扱える奴こそ見たことはないぜ。(故郷である地球の場合のお話)

「で、今日はどこを治してほしいのかしら？」

美人にお尋ねされました。

それだけで、テンションは馬鹿に上がりまくります。

「全部で！！ おねがいます！！！！」

うっかり叫んでしまいました。

「いくら私でも、ご友人様の頭の中身までは治してあげられませんわあ」

おバカさんは、流石にちょっと魔改造が必要になっちゃいますからねえ……。

ぐっさり。

「すみませんすみません、おバカな頭ですいません、おネイさまあああああ。」

でも、そんな毒舌な貴女も好きっ！

『何度死んでもあの馬鹿さだけは変わるまい』とたびたび評される私の頭の中身は、やはり今日も変わらなかった模様です。

03 彼女と彼の、自己分析(前) (後書き)

MPを、萌えポイントと超訳した友人がいます。

それでは、HPはハグポイントとでもすればいいのでしょうか。

精神エネルギーばかりが補充されるね。(幸せだが)

最後になりましたが、評価ポイントとお気に入り登録ありがとうございます。
ございます。嬉しかったです！

04 彼女と彼の、自己分析(後)

「レイクシエル。京香が来てないか」

鳶の絡まる扉は開かず、ただ声と同時に顕れたその存在の名を、

魔王 8代目魔王イスラン「アル」ジエイクという。

「……あら、これは魔王さま。お久しぶりでございます」

頼まれるままに、魔王の《ご友人さま》という特殊な立場にいる異界の少女 23などという年齢は、彼女にとってはそう言うってよい年齢だ の施術をすませた魔女は、慌てることなく返事した。

そんな彼女の目の前には、長椅子に横たわった少女の姿。

篠原 京香。 異界からやってくる人間の少女。

『これでも成人したんです！』と彼女はそういうけれど、本当のところをいえば 誰もが彼女を少女と受け止めているだろう。

出会った頃のイメージのままに。

「邪魔した」

眠る少女は実に幸せそうである。

さぞや、良い夢を見ているに違いない。

眠っている京香を喚び出した絹布にくるみながら、イスランが抱

えあげた。

あいもかわらず、どこでもかしくでも寝る少女である。だから、皆は『馬鹿だ』と少女に告げるのだが。

「 本当に。自由に異界渡りをするわね、この子は」

レイクシエルが呟いた。

本来、異界を渡る能力は、人にはない。魔族にも、ない。

それが出来るものは、歴代最強の名をもつ魔王そのひとか、神話にある神族たちくらいであろう。

なのに、京香は異界を渡ることが出来る。それはもう、軽々と。

魔王その人が知らぬ間に遊びに来ては、魔王のおやつをつまみ食いした揚句、返せ戻せの口喧嘩が発生する程度には自由に 京香は世界を渡る。

そんな存在は、初めて見た。

1000年を生きる『最古の魔女』『氷佳の魔女』 叡知の魔女』であるレイクシエル「オッドでさえも。

「 起きたら、今度お勧めのアロマ薬調合してあげるわねって伝えておいてくださいな」

大分、すれすれとやらが溜まってたみたいですから。

毒も薬もみな同じ。

都市の一つもたやすく滅ぼせるだろうこの魔女に懐く京香は最強だろう、まさしく。

なにしろ彼女は、初代魔王の時代から生き続けている最高位の魔女なのだから。

「……あんまり、甘やかすな」
こいつは、すぐに調子に乗るからな。

女は苦手だ、と明言する魔王は、さっさと自室へと戻った。友人である少女を抱えたまま。

ちなみに、魔王が最も苦手とする女性というのが、魔女その人であることを知らぬ者はいない。

「こぼり、こぼこぼ。」

魔女の居室では、魔王城の周りに生える靈草毒土から抽出した魔薬が今日も音を立てて生まれている。

「ん、んんんんんっ？ 自覚があるのかないのか」
微妙ねえ。

魔女は、先ほどの魔王の言葉を振りかえる。

「一番、彼女に甘いのは誰かって話じゃないのかしらねえ」

彼女は、今後の魔王とそのご友人の仲について、すごくすごくワクワクしている。

長生きのコツは、身近な場所でのゴシップを本気で楽しみに出来ることにあるのかもしれない。

04 彼女と彼の、自己分析(後)(後書き)

魔女のお姉さんが恋愛脳です。

こんなお姐さんは好きですか？

05 彼女と彼の、食事嗜好(前)

ぼちっとな。

美味しそうな写真である。

携帯で某レシピ料理のサイト巡りをしていたところ、実に美味そうな料理を発見しました。

材料は、「卵、ミルク、芋、鮭、バター、調味料各種」。

「……………うむ、いけるな」

ピ。。

握りしめるは、印刷終了したレシピ！

世界の違いもなんのその、我が嗜好に染まるがいい！ ジェムっち。

決して、キミの絶望に浸る顔が見たいなんてそんなさっぽいことは、別に…………。

「ごめん、ちょっとだけあるかもしれない。(素直)

「 待ってて、ジェムっち。いま、イの友が行くわ!!! 」

ということ、本日も異世界へのご出発である。

ちなみに、イの友とは「胃の友」のことである。

ネーミングセンスがないことはよく理解しているのでご容赦いただきたい。

魔王城には、ちゃんと厨房というものが存在している。

どうやら、この世界における人間たちは、そう聞くとグロテスクなものを想像するらしい。

人間のアレとかソレとかドチラとか。

だが、そんなものはない。

ジェムっち曰く、「美味くもない人間なんぞ食材に成るわけねーじゃん。美食派ばかりなんだぞ、ここの連中は」とのこと。

うんうん、信じてるよ。マイ胃フレンド!

そんな食事は想像もしたくないです。

「ということ、異世界で美食しようぜ、マイフレンド! メモの用意はいいかい!!! 」

今日の出現場所は、厨房です。

目の前には、赤髪蒼眼の青年が一人。

「ご友人さま、いきなり現れて食事の要求ですかい、…いい根性だ」

むにむにむにむに。

ぎゃー、やめて。頬がつぶれる。

細くて長い指で、「ほっぺたむにむにの刑」を実行された。

ジエムつち、一瞬で真横に立つてるんだもん、防御なんて出来るわけがない。

ちくしょう、龍人族なんか基本ステータス高すぎて羨ましいじゃんか、うええええん。

「……泣きまねする子は俺、嫌いですよ」

ち、効かなかった。

「材料?! 卵!」

気分は、点呼を取る隊長である。

班長でも可。

「うーん、今日は卵どれにするかといいわけー? クツ卵? ダフ

卵? まさかのサイウエルの卵!!!?」

ジエムつち、卵たくさんあるねえ。

ちなみに、クツ卵はこの世界における一般的な卵。三原色のとさかがついた鶏の卵らしい。…うん、卵は白色だったよ。

ダフ 卵は雌雄同体の砂蜥蜴の卵。小さめサイズ。味は濃厚です。

サイウエルの卵はあれだ。巨大魚サイウエルの卵。浅瀬の砂地に産みつけられる卵のサイズは、すいかの大きさ程はあるのだ。黄（赤）身は濃いけど、白身はうす味。…そんな卵。

「材料?! ミルク! 牛の乳!」

点呼は続くよ、どこまでも。

まだ始まったばかりだもん。

「ご希望は、メツシ マ種? ライハン種? それとも、虹の泉の水牛モツスモスがお好み?」

どれでもいいよ、何処産だろうが。

あ、でもモツスモツス牛乳はあたしが飲みたいので避けといてね。後で冷やしていただきます。

「 なかなか手に入らないのに、これ」

不平は華麗にスル させていただきます。

呑んで食われてこそその食材じゃないか、ジエムっち。

「材料?! 芋! …もうこれは、ミイ芋では非!」

点呼ではない、それは宣言だ。

仕方ないだろう、だってあのとろとろ感のでるポテトサラダにするなら、これしかないんだもん!!

「……………」

無言で、ジエムっちはミイ芋をテーブルの上に置いた。

流石だ、友よ。ぬかりがない。

「材料?! ……鮭!」

さて、問題はここである。

どっつ出る、ジエムっち。

「 白酒でいい? 」

でんと置いたのは、甘みの少ないドワーフ産の酒。 アルコ
ールである。

「……………」

「 ご友人様、息してる? 」

ああああ、ジェムっち、ジェムっち、さすがだジェムっち。お
約束の男。

笑いが止まらない。

察するところ、これまでの経験から「さけ」という発音から、以
前使用した料理酒用のそれを出してきたのだろうが。

ああ、まさしく友よ。マイ胃の友よ。

いま私はキミに捧げたい。

「天然大ボケ無自覚男（初代）」の称号を!!

「 ……鮭、とは! 脂のよく乗った赤身の魚な。ちなみに、字で書く
ところなる! 」

「 鮭 」

うむ、達筆。

若干の丸字は勘弁しておくれ。

どうせ地球の文字を読めるのは一人しかいないんだし、この世界
では。

「 ……読めないけど、酒のときとは違う文字なことだけはわかった 」

ジエムっち、以前の漢字を覚えているのか。素晴らしい。……どんな記憶力だ龍人族、ちよつと羨ましい。

ちなみに、「酒」と書いた時は発酵に失敗した梅干を挿んだときの母の表情によく似た顔をしていたジエムっち。

やっちゃった感ただよう表情だったよ、うん。

異世界の文字は、そんなに嫌われるものなのでしょうか。

その他に必要な塩コショウ、バター、パン粉、パセリ、オリーブオイルの代用品を魔法のように用意してくれるジエムっちに感動の眼を向けつつ、レシピを音読する京香だった。

05 彼女と彼の、食事嗜好(前)(後書き)

そつと密かに注意事項であります)

鮭について、主人公がどや顔で「赤身の魚」と作品内で説明しております。

……鮭は本来「白身の魚」です。摂取する餌の色素に由来してサ
ーモンピンクと呼ばれる特有の色に変化されるということですよ。

(卵の黄身が黄色いのと似た理由。どや……)

……ですが、料理などのレシピで白身の魚と書かれてるときに鮭
を使用する方もいないと思いますので、本文変更せずこちらにて補
足説明とさせていただきます。

正直、本文変えたら半分は文いじることになりそうになっちゃっ
たので。(汗)

ご了承くださいます。(ぺこり)

……赤身でも白身でも鮭は美味しいよね?—w・)()()

お邪魔しました。

06 彼女と彼の、食事嗜好（後）

「まずは、オ ブンを170〜180度で余熱しておく」

京香が読むレシピにはオーブン使用と書いてあるが、電子機器の類のものはここにはない。

ので、石窯にて挑戦である。

使用方法は、窯の中に火縁石を入れて、しっかりと火をつける。

ジエムつちの場合は、ふっと一息ふきかけるだけで、火は熾る。

これが人間の、いわゆる「魔法使い」の場合だと、呪文とか魔方阵とか必要になるらしい。

あたしとしては、「へー、そうなんだ」で終わる話だが。

どうせ、自分にはどちらも使えない。

あたしに同じことをしると言われた場合、あたしは静かに着火マスを点火する。

当然であろう。

魔法だとか呪文だとか精霊との契約だとか、そんなものとは無縁なんだもの。

ジエムつちが石窯に点火した火縁石をセットした。

「皮をむいたミイ芋をボイルして熱いうちに潰しまーす」

じゃぼんじゃぼん、と湯に飛び込んだミイ芋。

ミイ芋は北部地域のお芋です。とても、私好みの味。

小さな火縁石を輪に並べ変えたコンロもどきの上には、ドワーフのおっちゃんが作ってくれた鍋。∴ドラゴンが踏んでも壊れないと

断言されました。

台所用具にそこまでの耐久性はいるんですか？ ロドのおっちゃん。

流石に突っ込んだあの瞬間。

無料のお約束でしたので、喜んで頂きましたが。

こつてりまるやかな味わいが特徴のライオン種牛乳と、バターにスパイシな草の実を砕いた胡椒もどきを投入。

ゆであがったミイ芋はほかほかの湯気を立てて美味しそうです。だが、熱そうです。

そんなボイルしたてのミイ芋を素手で潰していくジェムっちの手の厚さにびっくり。

火傷するよ？ …人間じゃないから大丈夫だって知ってるけど。

『食材ゲットのために、火山の中にも行くのが龍人族の心意気！』

誇らしげに告げたジェムっちの様子を見て、『うわあMだMがいる』とか思ったあたしは悪くない。

鍋の中には美味しそうにとろけるポテトサラダが完成。

このままでも食べたい、本音。

「…次は、塩コショウした魚を耐熱皿に並べます。そのうえに、とろりとしたポテトを平坦に並べてください。トッピングにパン粉をぱらぱら、オリーブオイルをたらっと一匙」

結局、あの魚の名前はなんていうのかな。

新巻鮭なみに豪快な魚が登場していた。

切り身にせずに丸ごと焼こうとしたジェムっちをしっかり留めた、自分グツジヨブ。

いろいろと食材が増えていくに増して、食欲をそそられる匂いが漂ってきた。

「200のオーブンで約40分間焼いてください、焼けたら仕上

げにはらりとパセリを散らします」

レシピ文は、これにて終了。

簡単そうだが、自分で作る気はない。

一人分の食卓って面倒なのよね。

ジエムっちは火縁石とは若干離れた場所へ耐熱皿をセットした。

後は待つだけ、ああ暖かい場所って眠いなあ。

でも、お腹減ったよう。

「…ポテト余ったの、食うか？」

「食う！！！」

腹が減ったと顔に出ていた京香を憐れんだジエールム「コークが
そう言ってくれたとき、京香の表情はとても輝いていたらしい。

おまえは欠食児童か。

「イスラン！ ご飯だよ！！」

のんびんだらりと一息ついてた魔王陛下のもとに、ジエムっち作
成、京香提案の【異界編サーモンのとろとろポテト焼き】を持って
いったところ。

「…ワシは芋は苦手じゃ」

「ルクルかよっ！！」

という、お約束な会話があったことは否定しない。

06 彼女と彼の、食事嗜好（後）（後書き）

おたくは引用が大好きです。（あたしだけじゃないよね^^;）
おかげで、京香の一人称は定まりません。
たぶん京香自身判ってないんじゃないかな。

レシピ内容は某大手料理サイトさまから。
文面は流石にいじらせていただきました。
芋好きなので、惹かれてしまったのです。

07 彼女と彼の、傷み 其の一（前書き）

07 彼女と彼の、傷み 其の一

帰り支度の前にお手洗い。
とれかけていた紅を指し直して、眩いた。

「明日は、お休みとらなきゃねえ」

彼女の両耳のピアスの色が、その日だけは赤く変わる。
紅玉のような、完熟した林檎のような、赤い赤い色へと。

ため息が漏れるそんな日が、今日という日。

今日の天気は、雨。

しとしとと雨は続く。

しとしとしとしと、けふる雨。

こんな日は、とても静かだ。

魔王城の一室に出現した京香の前には、誰もいない。

もそもそと持ってきた毛布を身体にまいてくるませて、ぺたりと
入口に座った。

石壁と石床は冷たいので、防寒用具は必需品なのだ。

もそもそもそもそも。

用意してきた水筒の中身は温かな紅茶。
奪われることが確定している私の身体の温度と体液を補充するに
は不可欠なのだよ。

「……ただ、まだ彼はこない。」

「……ぺたんと座ったまま首を膝に埋まらせた。」

「……石の壁は音を食う。」

「……雨音は微かすぎて聞こえはしないけれど、寒さだけはしっかりと
伝えてくる。」

「カビが生えないのが不思議だね、このお城」

「……以前からの疑問を一人で呟く。」

「……その音さえも石の壁に吸収されて、京香はつまらないと思う。」

「……」

「……心と体のどこかで違和感が生まれた。」

「……痛みではない、苦しみではない、何か。」

「……嗚咽を無理やり呑み込んだような、無視はできないソレだ。」

「……ああ、終わったのか」

「……自分では見えない両耳のピアスが赤色から紫に変わり、ゆっくり
と深い紺色に変化しつつあることを彼女は知識で理解する。
違和感だけは、この身に降りかかっている。」

「はやく、かえっておいでよ。 イスラン」

「……京香の大事な友人は、もうすぐ帰ってくる。」

この世界に課せられた己の役割を終えて。
魔王という役割を果たして。

「やあ、イスラン」

重い身体を引きずるようにして現れた友人に、京香は声をかける。

こんなところで、何をしている。

昔はそんな言葉を聞いた気もするが、今ではその言葉も聞かれなくなつた。

重い扉を京香は開けた。

魔王の私室への扉を、しっかりと。

「どうぞ、お入りくださいな」

浮かべた笑みがひきつってなかったかだけが心配だ。

早く、早く。

早く、通つて。

「……………」

開かれた扉を無言で通過するイスラン。

彼は、この世界の8代目魔王イスランⅡアルⅡジェイク。

そして。

あたし

篠原 京香の友人。

07 彼女と彼の、傷み 其の一（後書き）

魔王の彼のお話。

08 彼女と彼の、傷み 其の二

物語りにおける魔王というものが、どんな定義を課せられているのかなど、京香は知らない。

魔族の王様？

魔界の王者？

邪悪な世界の敵？

勇者に倒される定めの悪役？

そのような全てを京香は否定する。

だって、京香は知っているのだ。

魔王であることが世界のための役割だと理解して、身を犠牲にする友人のことを。

ずるずるずる。

引きずるように、己の私室の長椅子に腰かけたイスラン「アル」
ジェイク。

黒髪に金目の、たった一人の魔王さま。

人も住めない魔の漂う場所で生きることを義務付けられた存在。

誰よりも、魔力を吸収するキミ。
誰よりも、魔力を保持し続けるキミ。

「今日のお勧めは、オレンジティーですよー」

ことんと、京香が置いたのは持ってきた水筒から注いだ紅茶。
温かな湯気が出ている。

まあ、聖域の水で沸かしたそれには程遠いものの、無用な魔力と
いう名の毒素が混じってないので善しとして頂こう。

向こうの世界から持ち込むには、もっとも難しい液体のものを持
ってくるにはちよつとした注意が必要だ。

どんな作用か、世界の壁を超えるときにはいろいろと揺れとい
うか衝動がもたらされるらしいのだ。

知らず持ち込んだコーラのボトルを開けた時の光景は衝撃だった。
自転車に乗って買い物に行った学生時代、あのころはよく経験し
た。ガタゴト振動を与えてくれる歩道のアップダウンには今でも一
言を語れる。

自転車籠の中の荷物が飛ぶんだよ、ばかやろ、と。

当時イスランのお気に入りだった椅子にはいまだにそのと
き零したコーラの染みが残っている。

「はいはい、ゆっくりとお飲みなさいねー。水分と糖分と体温の補
給は大事ですよー」

笑顔で勧める、この心意気。

くどすぎず、うざすぎず、さねど、よわすぎず。

この一芸は大事な社会人のスキルだと思っ。

京香自身は、まだまだ先輩がたに比べると未熟であると理解しているが。

最初の一声で相手の注意をひきつける技は京香の憧れである。

「美味しいかい？」

「… 悪くない」

席の傍らで声をかけた。

疲れた顔のイスランは軽く目を眇めさせながらコップを空っぽにした。

ずるずるずるずる。

半眠りの魔王さまは半目状態。

そこを無理やり叩き起こして、寢室まで押しだす作業。

「はい、足踏み足踏み。」

方向転換は、任せてくれ給え。

時折突つかかる足元にてこずりながら、背中と腰を後ろから支えて移動移動。

「はいはい、それではしっかりと倒れ込んでくださいな」

ダイウ！

しっかりと掛け布団はめくっておいた寝台に飛び込むがいい、我が朋よ。

「…」

素直に倒れ込んだ友人のブーツをはぎとります。

…サンダルにしたら？ こんな日は。

ちよつと思つたりするこのごろ。

「ぐるぐるぐる。」

もはや限界に近い友人に大きな布団の真ん中まで転がらせて、掛け布団を掛けてやった。

それから、レイちゃん特製の結界道具のスイッチを押して。

「おやすみ、イスラン」

夢の海へと沈没真近のイスランに声をかけた。

あとは、眠りが癒してくれるはずだから。

おやすみ。

布団の海にもぐりこんだ友人がそう呟いてただろうことは、とうとうに理解している。

09 彼女と彼の、傷み 其の三

魔と呼ばれるものがある。

それは毒だ。

世界にとっての毒だ。

醜悪なる素。

それらは穢れである。

魔王は、世界の穢れを吸収し、保持し、そして変換して返還する。
世界へと。

そう。

魔王とは、この世界の浄化作用の一つであるのだ。

おそらくは、もっとも優秀な。

「だからってさあ、どうしてイスラムだけが貧乏くじをひく破目になるのかなあ」

京香は、何度呟いたかわからない愚痴を呟く。

愚痴だ愚痴。ただの愚痴。

だから、なんの役にも立たない知ってるそんなこと。

だって、何も変わらない、変えられない。

京香には、なんの力もありはしないのだ。

「 自分の肉体に穢れを集めて拘束して、綺麗な元素に変質させて、世界に還元するだけの存在なんて、
最悪の貧乏くじじゃないか 」

たった一人しか存在しない、魔王陛下と呼ばれる友人だけが持つ特性。

魔が収束する特質を持つ、この不毛の地で生きている。

その巨大な魔力の保持量を持ってしても、ときに扱いきれぬほどの魔を集めたこの場所です。

魔を操る存在、魔を生む存在と、この世の人間が間違えて認識しているために、憎まれている友人を。

「 いいかげんに、あたしの前で泣くことくらいしやがれってんだ、ばあか 」

肉体の限界まで集めていたその力を儀式によって彼は世界へと変換する。

それなりの苦痛を代償に。

だから、明日は京香はお休みだ。

泣きもしない、可愛げのない友人の苦痛を想って。

落とした涙の代償に、浮腫む眼もとは明日までには治らないから。

「 だから、イスランは馬鹿だ 」

いつでも、京香を「馬鹿だ」と言ってくるあの友人に。

今日だけは、あたしがおまえに「馬鹿だ」と罵る日。

静かな夢を見た。

海の夢だ。空の夢だ。陸の夢だ。
そこは美しかった。

眠りが完遂する。

夢が終わって、現実が始まる。

イスランは、大きな伸びをしたあとで少しふらつく身体を動かして、部屋の外へと移動した。

さすがに、今のこの魔力も鈍い状態で魔法なんぞ使う気はない。音もなく開いた寝室のドアの向こうで、長椅子に転がって寝ている少女の姿を見た。

「…また、寝てる」

イスランが近寄っても、京香は起きない。
不用心なことだ。

「泣かせてばかりだな、俺は」

泣いて腫れたと思しき京香の顔に苦笑する。
自覚はあるのだ。
だが、変わる気はない。

「俺は魔王なんだよ、京香」

呟きながら、返還儀式の前には必ず用意しておく絹布を京香の身体にかけた。

「おやすみ、京香」
お疲れさん。

今朝の食事は、ジェルムが大量に作っているはずだ。
失われたイスランの血と魔力と体力と、一人で泣いていた京香の涙を補填するために。

「…湯でも浴びるか」

返還儀式で流した己の血の匂いを感じて、8代目魔王イスラン「アル」ジェイクは部屋を離れた。

09 彼女と彼の、傷み 其の三(後書き)

こんな感じの二人です。

10 彼女と彼の、落書き事情 其の一

久しぶりに、実家から電話が来た。

近況を話すこと、主に2時間。

おかあたま、近所のお庭に咲いた花の名前は別に知りたくはないよ。

あたしが夏に帰省する頃には、確実に別の花が咲いてることだろうから。

「京香ちゃんも、たまには運動がてら散歩するといいわよー」

職場の友人とダイエットがてら周囲を散歩することにしたと告げた母は、そう勧めたあと電話を切った。

「……………」

じつと見つめた通話時間の表示。

「おかあたま。 いくらなんでも、3時間52分は長くないか

？」

語りだすと止まらない母からの愛のお知らせはたまに京香の趣味時間と睡眠時間を削ってくださいさる。

こちらからは電話を切らない一人暮らしの娘は、親孝行と称してもいいと思う。

「散歩か。 誰と行こうかな」

先日、体重計に乗って悲鳴を上げた京香は異世界へ出発した。

今日の遭遇者はだれであろうか。

「あつるっこ あつるっこー、わったっしっはー、元っ気いいいいいい」

鬱蒼とした林の中、明るい歌声が響いております。

365歩のマーチとどちらにしようかと悩んだ結果、おたくとしての属性を優先した次第です。

でも思っただけどさ、ジリととサマ オーズは普通に名作だと思っただ。

語る内容そのものが一般人の考えじゃないというのか？

…否定しづらいな。

「ご友人さま、楽しいの？」

「楽しくないから、せめて歌ってる」

「そうですか」

ちなみに、声をかけてきたのはMっちこと、ジェムっちである。

厨の主人である彼は己をMだと呼ばれると頑なに否定する。

だが、知る人はみな彼はMだろうと言います。

「そろそろ、ジエムっちは自分を理解するといいと思います！」
「なんの話!!!? いま前ふりない発言してきましたよね、ご友人さま!!!」

せめて、前後の会話から推測できる発言してくださいよ!

人生フリーダム推奨!

そんな京香は、ジエムっちの突っ込みは華麗にスル した。

「ラくんも思わないかい? ジエムっちはMだってことを自己理解するべきじゃないかと」

「…ラくんはよせ。まあ、下僕がMなことは当たり前だろう。だからこそ下僕だ」

「…マスター、今日もSですね」

ふふふ、ふふふ、下僕じゃないですただのサーバントです俺。

壊れた笑みを浮かべるジエムっち。

京香はそれを確認したのち、頭上のドラゴンに言い放った。

「グツジョブ! さすがはドのつくS属性ドラゴン!!!」

「何を言う、京香。これしきのがSであるものか」

下僕いじめはこれからだ。

にやりと笑うチビっこ竜（本人に言うつと殺されますので禁句）は、間違いなく光り輝いていた。

「しかし、鬱だわー」

なんともいえないこの陰鬱さ。

さすが、魔王城近辺。

「…近辺散歩するから話相手に成れとか言ってきたのは、おまえじやなかったか？」

頭上のラ　くんが突っ込んできた。

「ええそうですよー。だって一人だと迷子になるの確実だったしね

ー」

京香は、ぐるぐると回る磁石を差し出してみせた。

ちなみに、これは地球産ではない。

手先が器用なドワーフのおっちゃん、研究者肌の蛇牙族のミニーくんが共同作成したものだ。

もつとも、この磁石がまともに機能してるところを見たことは京香にはない。

おもに、京香が訪れる場所が磁力に満ちた極界に準じた場所ばかりだからだというのがその理由だが。

「…律儀に、役にも立たんものを持ちあるいとるのか」

ただのゴミでしかないだろうに。

「……行く先々の子守のときには役立つんだよー？」

すっげー、めちゃくちゃ意味なくねーか、これ？

このまえ遊びに行ったホビット族のちびたちにすごい不思議そうな眼で見られた。

連中は、ぐるぐると回り続ける磁石を見、そしてそれを常備している京香を見て、凄い変なモノを見たという驚きの表情を浮かべてみせたものだ。

…え？　見下されてただけ？

… 気にしたら負けだ！！

「… あいかわらずだな」

ラ くんが凄い生温かい声音で、言ってきた。

頭上から見下ろされた、だと…？

位置と心情の両方で、ヴィラ ドゥオークス（敬称・竜王）の方が全てにおいて上だった。

ちなみに、チビっこ竜のくせして相手は127歳だ。
年齢までもが奴のほうが上だった。

「若さだけは、負けてないんだからなあああ！」

ぼい！

頭上に乗ってたラ くんを頭上に放り投げて、京香は走り出した。
穢土と呼ばれる土の上は走りにくいです。

そして、京香はしっかりと滑って転んだ。

ぶよん。

という効果音のような音とともに。

ちなみに。

蛇足までにいうのならば。

頭上に放り投げられたラくんことドS竜王は空中を一回転した後、あわてて己の主を受けとめようとした自分のサーバントの後頭部にしっかりと着地した。

げし！ という音もした。

「…避けることもできないのか、このMな役立たずは」

「ひどいですマスター！ そして俺はMじゃありませんええええええん！」

ジェムつちことジェルム＝コーク（竜王の調理人）が、たまに京香からMつちと呼ばれる理由を、この会話からご理解いただけただけならとても有難い。

10 彼女と彼の、落書き事情 其の一（後書き）

11 彼女と彼の、落書き事情 其の二

ゼリーはプルンとしておりますね。

最近、そんな彼等は食材としてのみでなく、世界に大いに貢献しております。

クイツクリー。

早く世界がぷるるん充しますように。

ベタに転びかけたその時、ぶよんと感触がいたしました。
体中がぷるるん充足。

「これは、まさか」

急いで見つめ直すこと、数瞬間。

「ぷるんちゃああああんん！」

目の前には大きなスライム女王さまがいらっしやいました。

さてさて。

スライムさんというと、おまえらただのレベル上げ要員か、むしろ、核はどこだ見えねえよ、というゲームにおける底辺にして主要

な魔物（？）なわけですが。

この世界では、びっぴみょうごです。ハイ。

「なんて優しいの、ぷるんちゃん。どろどろの真っ黒な土にまみれてしまいそうになっていたひ弱な少女を護ろうとするなんて」
なんて優しいモンスターさんなの…。

きらりとイタイ発言を漏らした京香（成人済）。

「世間では、23歳に美少女という言葉を使用することは許されておらんだろう」

「痛いな、ご友人さま」

確信犯で、自分を少女と呼ぶところがイタイですよ。

じゃかましい、このSM主従ども！

くわつと白い歯並びを見せつける、今日のお仕事。

咬むぞ、貴様ら。

歯科にかかったことがないのが自慢の歯並びを見せつけました。

「……………」
ぷるん。

そんな姿を眺めたぷるんちゃんは、そつと後ろに跳びました。

ひかないで、おねがい。

人格というものもない彼らにまでひかれそうになった場合、流石の京香も泣きたくなります。

「うづうづ、ぷるんちゃんがツンだ。ひどいよー」

人として泣いていいと感じた事実でした。

「うーむ、思考回路さえないスライムにまで避けられるとは
「なんだ、ただのゴミか」

ちくしょう、ラくん。貴様Sだな。

心のなかで突っ込んだあとで、これは奴にとっての褒め言葉だと
気づいたので、魂の底に封印しました。

「にしても、よくスライムの個体の判別つきますねー、ご友人さま
こいつら、基本的にそう変わらないのに。」

ジエムっちが、不思議そうな顔で告げてきた。

「勘だろう、野生の勘」

なにしろ、こいつは考える前に手と足が動く奴だからな。

ラくんが断言しくさりました。

否定する要素があるのか？

ついでのように京香に視線で語りかけた相手は可愛かった。

ミニマム万歳。

視線の冷たさも乗り越えられます、可愛さ正義。

赤銅色のウロコが麗しいですね、ラくん。

「どうせ、あたしは胎で考える動物さ！ …だが、今回ばかりは否

定しよう！」

あたしだって、頭は使うときがあるんだ！

えへんと一言、根拠があるスライムの個体選別の方法を教えてください。

「スライムさんの核になる種に「ぷるんちゃん」って、マツキで書いてあるんだよー」

ちなみに、ピンク色のマツキ 使用しました。

「「 阿呆か！！！」

ジエムっちとラ くんは怒られました。
なんでー？

12 彼女と彼の、落書き事情 其の三

核がございます。

いわゆる、中心。

素体となります、その正体。

実はあなた、スライムたんの種が存在するのでございますよ。

ご承知いただけましたか？

「いつ、審寿の間に入った！」

「ご友人さま、それはやばいです！」

ラ くんの赤銅色は、怒りでほどよく真っ赤になっていました。
ジェムつちの場合は、真っ青。髪の毛よりも眼の色に似通った顔
色でした。

「いつって…。だいぶ前からだけどー？」

なにかおかしい？

怒りと恐怖でセットで売り出すべきかと思えます、この二人の今の表情。

何をいまさら怒られることがあるのかと本気で疑問な京香であった。

「あそこは、魔王城における聖域だ！ 仮にも世界の浄化作用の一つであるスライムたちの母体樹を管理する場所だぞ！！」

管理者たちは、何をしているんだ！！

ラ くんお怒り警報発令。

そのうち、火を吐き出しそうで怖いですね。

まあ、彼は常にその口から毒を吐き出しますので、今さらですけども。（暴言とか暴言とか蔑みとかツンツンとか）

「そうですよ、ご友人さま！ あそこは管理者の葉陰の一族以外は、出入りは禁じられてます！」

本気でいつのまに入っただんですか、このトラベルメイカー娘は！！

真っ青に成りながらの説明乙！ ジェムっち。

つつか、さりげなく人のことをトラベルメイカー呼ぶな、いじめるぞMっちめ。

「出入りの許可ならちゃんと貰ったよー？ ミサルガ婆ちゃんにほら、証拠の婆ちゃんの鱗印。」

虹色の鱗を一枚見せました。

ミサルガ婆ちゃんは、葉陰の一族の統括者。

といつても、婆ちゃん自身は人魚族ですけども。

虹色の泉を拠点とする人魚族ですが、世界の幾つかの場所にある審寿の間を管理する一族の役目を担い、このような魔王城などという辺境くんだりまで単身赴任してきているのがミサルガ婆ちゃんその人である。

婆ちゃん、すげえ根性つす。

「…む、これは確かに人魚族の鱗印」

「……なにがありましたか、ミサルガさま」
「どんなトラブルがあったんですか。」

遠い目で彼方に答えを聞くなよ、ジエムっち。
なんだか友情の在り処について問い詰めたくなるから。

そこに出現したのは、ただの偶然だった。

たまたま、魔方陣と封印と、唯一聖水を還流させるその場所へ、
京香は現れてしまっただけだったのだ。

水と緑と、土の生きている匂いのある場所。
それから。

「侵入者だ！」

「伏せる、呪爆をぶつける！」

小さな小さな親指ほどの人たちがいた。

「……わーお、妖精？」

いかにも京香を敵とみなして反応している彼等に対して、どう対応するべきか悩んでいた時だった。

「やめなさい、子らよ。彼女には、魔王の守護が見える。」

噂の《ご友人さま》だね？」

少ししわがれた声。

振り向いたその場所には、長く伸びた緑の髪を水流に浸した人魚がいた。

虹色に輝く鱗。

黒目がちのその眼。

水かきのついた指と、その耳。

「……噂なんですか？ あたしって」

第一声がそれだった京香に対して品よく笑って見せたのは、ミサルガ^ル琉^ラド。

虹の泉出身の、聖なる一族の一人。

12 彼女と彼の、落書き事情 其の三（後書き）

覚書

ミサンガ㉿琉㉿ラド。

人魚族。琉は人魚局限性発音語。

他の一族には発音不可。

浸音。

名前を聞いた京香が当て字しました。

13 彼女と彼の、落書き事情 其の四

聖と魔のちがいつて、なんですか？

京香がそう尋ねたとき、返事は沈黙だった。

拒絶のそれではなく、思案のそれ。

だから、そのときもらった返事を京香は間違いだとは思わないのだ。

世界にとって、好ましいか否かじゃないかしら？

美しい紫がかった銀髪をくるくると指に巻きつけながら、魔女は言ったのだ。

絶対的に存在し、無限に影響を与えるものということでは同一なのでしょうけれどね。

……頭のいい人の言葉って、よくわかんない。

そのときの京香は、困った顔でただ小首を傾げたのだった。

「久しぶりだわ、人に出会うのは……」

出逢った人魚族の老婆、ミサルガ「琉」ラドは穏やかに告げたのだ。

ちなみに、彼女は美人です。

老婆と言つてばかにしちゃいけません。

彼女は美老婆です。

皺の一つ一つが美しい。

これぞ、美しき老いの姿なり！

水に浸ったままのミサルガ婆ちゃんは、近寄った京香にそつと木の実を恵んでくれた。

え、これはあれですか。

おばあちゃんが孫にお菓子をくるんで渡してくれる的なそんな情景？

「…あの、ミサルガ婆ちゃん。あたし一応成人済…」

「私、久しぶりに出逢った方がとても素直で可愛らしくても嬉しいのよ？」

ここにここに。

婆ちゃんは、笑顔を変えませんでした。

鉄壁の笑顔。

「……………いただきます」

そんな純朴そうな婆ちゃんの笑顔を裏切れるはずがあるうか！

否ああああああああああ！

お婆ちゃんっ子だった京香は、素直にその好意を受け入れた。

でも、あの笑顔の裏にはきつと何かある。絶対なんかある！

確信しつつも、踊らされる馬鹿がここに一人います、お婆さま。

大好きだ、こんちくしょー。

「ミサルガさま！ いいんですよ、そんな怪しい奴相手しなくても！」

「結界を乱しませずに現れるなんて、十分不審者ですよ」

「たたきだしましょーよ！」

ちゃわちゃわと、親指サイズの小人たちが京香の周りであつるさかつた。

こいつら、どうしてくれよう。

『ミサルガ婆ちゃん親衛隊』とのちに京香が命名した葉陰の一族の連中だった。

身丈は何度も言うが、親指サイズ。

ミニマム通り越して、あれだア エッティだ。

ちよつと興奮したら鼻息で飛んでいきそうなサイズ。

……まだ、飛ばしてないよ？

うっかり動いたら潰しそうなので、動けません。

ガリバー先生のように礫になつても、動けなさそうな自分がそこにいました。

（関係ないけど、あの状態で一番ひどいのは髪の毛を引っ張りつけられてる状態にあるとあたしは思う。 禿げるし頭皮痛いじゃんか）

「京香には、魔王の守護があると私は言ったはずだよ、おまえたちその意味がわからないわけではあるまい？」

ミサルガ婆ちゃんは、もう一度そうおっしゃいました。

ぐつと言葉を止めたアリアリ（造語）たちが可愛かったです。

しかし、はて？

「……魔王の守護ってなに？」

思い当たる節があるような、ないような。

とりあえず、「（馬鹿は）わからないことは聞いておけ」という、兄の心優しい躰に乗っ取って尋ねた京香だった。

「……」

そしたら。

もう慣れたけど、またかよこの視線。

『馬鹿じゃね？』

視線は正直に思いを告げてくれちゃうんだぞ、おまえら。

そう突っ込んだ、篠原 京香（異界渡り・性別女性）の心の内。

「……そうそう、今日の仕事は今からだろう。準備はできているかい？」

ミサルガ婆ちゃん、いきなり会話変えないで。

「……翼布は準備してありますー」

「……種も用意しましたー」

「……お弁当も用意しましたー」

葉陰の一族たちも、素直に話題変換に応じていました。

兄ちゃん、異世界の人たちは冷たいよ？

素直に聞いたのに、教えてもらえないことにしくしく異界の兄に泣きついた京香だった。

14 彼女と彼の、落書き事情 其の五

「種って、なんですかー？」

泣く泣く自らの出した質問を黙殺した京香は、新しい質問をひねり出した。

目線の先には、某巨大樹。

なにここ、ト　口が棲んでる杜の一部？

「いつてきまーす」「いつてらっしやーい」

ちびまむアリアリが可愛く挨拶し合っていました。
なんだおまえら、可愛いじゃないか。

かさ、かさこそ、ぴよい。

……　なにかしら、その身体の俊敏さ。ありえないですか。
凡そ15mはある大樹にするすると上っていく連中を見て、口を
ばかりと空けるお仕事。

阿呆というな、啞然といえ。

「スゴイデスネ」

カタコトでしか語れません。

「……ご友人さまは、世界の浄化作用というものを知っていらっしや

るかしら？」

ミサルガ婆ちゃんは、今度はちゃんと答えてくれるようだった。なので、しっかりと頷いて見せた。

「この世界に遣された、聖魔のバランス保持作用を調整するモノだって言われたよ」

すごく、嫌な表情をしていた自覚はあったけども。

「ええ、そうです。この場所は、世界の浄化のための存在。わずかであっても魔を浄化することのできるスライムたちの母体樹を守る場所なのですよ」

ぱしゃんと、水が跳ねた音がした。

目の前にあるその木々から、流れる浅瀬に実がこぼれおちたのが見えた。

いちじくのように開いたその実の大きさは、掌に転がる大きさ。ビー玉サイズ。

その中には、スライムの核になる小果が数百から数千個詰まっているのだとミサルガ婆ちゃんはいった。

「葉陰の一族は、この《寿樹》の管理者。母体樹より種を拾い、その葉脈から翼布を編み、そして種をまく者たちなのです」

足元を見ると、男たちを送りだした女たち（わーお、ハイジミた

いな格好。カワユすゝが腰をゆっくり伸ばしていた。
今からお洗濯してお掃除して、みたいな主婦な会話が聴こえま
した。

あ、仮想敵扱いされなくなった？ あたし？

と、思ったのだが。

むしろ、警戒する値もないと判断されただけのような気がする。
る。

こんなときだけ無意味に鋭い京香の野生の勘が、いやなことを告
げた。

…… 喜ぶといいのか、悲しむといいのか。

濡れたその美しい手で、ミサルガ婆ちゃんは種をつまんだ。
手に伝い纏っていた雫は、種へと吸い寄せられて…。

ぼよん…。

小さな小さなスライムが、そこに生まれた。

「 《解体屋》と、聖魔の族が呼ぶ小さな救い手を、作り
出すためのシステム」

ぼよんぼよんぼよんぼよん……。

スライムくんは、婆ちゃんが再び雫を与えると、徐々に大きくなっていく。

なぜか、そのたびに光り輝いていつてはいないか、スライムくん。これが、噂の黄金スライムか！！（ゲーム 脳乙）

ぼよんぼよんぼよん……。

「 聖魔の属性を破壊する、神の寿。 そう、伝えられし古代の遺産」

ぼよん、ぼよん、ぼによんん……。

あ、スライムくん逃げた。

おーい、重たそうだなその身体。

無理すんな、無理すんなあ、転ぶぞー！

メタボリックなスライムくんが逃げ出した。

気のせいかな、頭頂部付近が光り出していたんだが、なんだあれ。

……まさかの、スライム（禿げ）か！！？

……ひじきを食べて強く生きる。よおく噛んで食べるんだぞ。

静かに、遠くなったスライムくんを見守る態勢。

「 それが、この《 審寿の間 》なのです」

ミサルガ婆ちゃんが告げた時、少し離れた草むらのなか、逃走中のスライムくんに金色の冠が成った。

禿げって、育つと王冠になんのおおお???:?

15 彼女と彼の、落書き事情 其の六

この世界には、神様がいたのだと言う。
神様たちは、この世を作り、この生をつくり、この死を倦んだ。
そして、最後に。

魔を、厭った。

世界はとても美しくて、とても複雑で、とても活発でした。
けれど、それゆえに魔は生まれたのです。

幼い子供に寝物語を語るように、叡知の魔女は語り紡ぐ。
異界の神話を。

悲しみと苦しさと倦厭が、魔を生んだのです。

…ねえ、レイちゃん。

物語りは、もういらないよ？

冷たくて、哀しくて、苦しいだけの物語りなんていらない。

耐えるだけの強さを、皆が持っているだなんて誰がいったの、誰
が決めたの。

優しい物語りがいいよ。

明るい物語りがあるといいよ。
笑いあって生きていける夢物語がいいよ。

泣いてもいいから、勇気をくれる物語りがいい。

だって、そうじゃなかったら。

私は、
を、
てしまう。

「ご友人さま？」

声をかけられたので、目覚めた。
ぱちくり。

上のまつ毛と下のまつ毛がお別れする瞬間。

「……………」

右を見れば、赤髪蒼眼のイの友その一。

前を見れば、人の胸の上にのし上がってやがる、赤銅色の鱗を持つ、小さな竜王。

左を見れば。

ぷよん、ぷよん、ぷよん。

ントが拾って見せた。

その反射神経に、京香は感謝するべきだ。だが惜しいかな。

京香は、そのとき既に失神していたのである。

バンジージャンプは苦手なんです、命綱くらいつけておいて。

そのような発言がこのあとにあったかどうかは知らないが。軽く20ミヌの間、京香は気を失っていたのだ。

「ねえ、ラくん。ジェムっち」

京香は、今日も晴れ間のない魔王城の天気を見ながら呟いた。

「この世界の神様は、何処へ行ったのかなあ」
誰もが知らない問いを發した。

ぶよんぶよんぶよんぶよん。

ぶによんぶによん。

ぴこん、ぴこぴこ。

スライムたちは何が楽しかったのか、宙を飛んで遊んでいる。

「…この世界以外のどこかだろうよ」

ラくんは、そう答えたし。

ジェムっちは笑っていた。

仮面のような笑みで。

黒のマジックを1本貸して。

太いマジックで、2本の線を引いてくるから。
そして、その上に新しい名前を書くの。

神様でもない、魔女でもない、竜王でもない、人魚でもない、

魔王でも、ない。

たった一人のあなたに。

私がつけた名前をあげる。

「
ひどい神様もいたもんだ
」

ぼそりと京香が呟いた言葉なんて、そのまま壊れてしまえばいい。

16 彼女と彼の、お伽噺 其の一

「この世界は、もう終わっているらしい。」

そう京香が聞いたのは、魔王その人からだった。

ぱちり、と暖炉に火縁石が火花を灯した寒い冬の季節のこと。

京香が持ってきた漫画本（全12巻）続刊あり）を、毛布にくるんで読んでいたときのことだった。

「そういえば、このまえ虹の泉に行っただよな」

「ん？」

虹の泉？

傍らのテーブルであたしの読んでる本の続きを飲んでるイスランが返事した。

「ちよーつと待て。」

その進み具合だとあたしのが先に終わるじゃんか早く読めよイスラン。

相手が本を読み終わるまで、焦えらしー确实フラグかよ、と密かに憂いた京香、23歳。

「そう、虹の泉」

思い出したのは、魔の域である魔王城とは真逆の場所。

聖の域である虹の樂らくの中心地。 虹の泉。

世界を渡る異界渡りの能力を持つ京香は、たまにあちらへと出現する。

…迷子じゃないもん、ちよつとベクトル間違えただけだもん。

まあ、理由はそれだけではないようなのだが、何回か間違えて出現したことがあるのは事実である。

幸い見知った知人も出来、それはそれで楽しいのだがちよつと苦手なことがある。

視線が重いのだ。

いやんなるくらい。

「人魚族の妊婦さんがいてさ、えらいピリピリしてるのね」
で、どうしたのか聞いたらさあ。

京香の視線は遠い。

マタニティーブルーですか？

と聞こうと思ったんだ最初は。

でも、そんな言葉この世界で通用しそうにないしねえ。

仕方ないので、言葉を変えた。

あのう、御主人さがしてきましようか？

という風に。

いや、嫁の機嫌取りは旦那の仕事かなとそう思ったので、言ってみただけなんですけども。

返ってきた答えは奮っていた。

巢作りもまだ出来てないなら、呼ばなくてもいいわよ！

…… 怖いよ嫁さん……美人なのに。

ガクぶるした京香だった。

見かねた知人が手招きをしてくれたのを幸いと逃げたのだが。

「人魚の巣って、たしか旦那が一人でつくるんだよね？ だったら、多少時間がかかっても仕方ないと思うんだけどさあ」

なにも、あそこまでピリピリしなくてもいいじゃないかと思うんですけど。

思い出せば思い出すほど、理不尽な気がする京香だった。だが、イスランは別の感想を持ったらしい。

「ああ。 巣が心配なのは仕方ない」

それは、興味で近づいたお前が悪いな。

ほえ？ なんでさー？

喋りながら視線はお互いに、手元の漫画本に言っていたわけなのだが。

そこで、お互いが顔を上げた。

「あたしが悪いの？」

「そっだ」

きっぱり訊いたら、きっぱり肯定してくださいました君に天誅！

と言つて蹴りを入れようとしたのだが、毛布が邪魔して出来ませんでした。

うつつ、あたしの毛布くんが裏切った。

でも決して毛布を手放す気はない京香だった。 女の子は身体を冷やしちゃダメってお母さんがいつてたんだよう。

「しっかりとした巣がなければ、人魚は自己崩壊をおこして、母子

ともに滅するのだから」

イスランはそう答えた。

あたしは言葉をなくしたけど、イスランにとってはもはやそれが当然のことのようで。

ぱらり、とめくられたページの音がどこか別の世界の音のように感じた。

めくられたページのなかで、少女が叫んでいる。

私の居る場所なんてないの、と。

その少女の言葉は悲鳴であったのだろうか。

私たちには。

生きる赦しは、与えられていないの。

聖域たる中心の泉で。

京香に聞こえないように呟いたのは、美しく若い人魚姫。

17 彼女と彼の、お伽噺 其の二

この世界には、神様がいました。

たった一人の神様は、世界を作りました。

何を想ったのでしょうか。

何を感じたのでしょうか。

神様は、この世の型を作りました。

神様は、この世の律を作りました。

神様は、この世の極を作りました。

神様はそこで少し満足しました。

そして、今度は命を作ったのです。

神様は、命を作りました。

神様は、生を作りました。

神様は、心を作りました。

神様は、体を作りました。

神様は、魂を作りました。

神様はそこで少し考えました。

この世は無限ではないことを神様は理解していたのです。

なので、神様は最後に少しだけ厭だなと思いつつながら最後のそれを生んだのです。

そう、それが最後の神の祝福。

神様は、死を作りました。

「俺にもこの世界の神という存在がどんな姿すがたなりであつたのかはわからん」

さすがに、城の宝玉オプにも伝承しか遺されてはいないからな。イスランは教えてくれた。

城の奥深くに潜められた宝玉は触れたものに知識を与える。もちろん、与えられるものには資格がいるのだが。

とにかく、その宝玉に納められていた神代のころからの情報を魔王であるイスランは持っているらしい。

えーい、この世界にはチートな能力者しかおらんのかい。

自分の頭の悪さを自覚している京香としては、なにかを責めたい気持ちでいっぱいになった。

「ただ彼は飽いたのだろう。この世界の在り様に」
イスランは語る。

この世界の創世神の来し方を。

ある日、神は気付いた。

生きている命たちのなかに何かが生まれていることを。

それは、澄んだ色をした美しい世界のなかで濁って見えた。

命が傷ついたとき、それは小さく生まれて溶けた。世界に。

命が死んだとき、それは増殖して生まれて溶けた。神の創った世に。

彼は戸惑った。そして、怒りを感じた。

神はそれに汚染されてゆく自分の創造物をそのままにするのを許

さなかつた。

神は再び創造する。

神は再び創り出す。

魔を消し去るための何かを。

それは魔を浄化させる樹の種の創造であり、魔を呪に転化できる女の創造であり、魔に関与されぬ独立した輪廻をもつ竜の創造であった。

神は努力した。

この世界を保つために努力した。

けれど、命は生まれ、心は傷つき、魂は穢れた。

そしてその

たびに、魔は生まれるのだ。

神は諦めることにした。

この世界を自らの手で管理することに。

彼は、別の世界に移動することを選んだ。

『この世は、私のものであって私のものではなくなってしまった』

彼は、最後にそう告げて消えた。

この世ではない、どこかへ。

遺されたのは、世を保つための理を知らぬ人間と、神がなくては聖らかなには在れぬ聖の族と、
その血肉をもって世界を浄化せし魔王に属する、魔の族。

生きたい。

死にたくない。

命がもつ自然の思い。

それが生んだ倦厭の想いを、
彼等は 魔 とも 瘴気 とも呼んだ。

「…なあに？ それ」

京香は、震える声で友にすがりついた。

「なによ、それ！！」

その声は怒りに満ちていた。

「それが 魔 ですって？ それが 瘴気 ！？
よ ふざけないで！！」

怒るべき相手は、イスランではない。

そんなことは分かっている。

解っているのだけれども、判りはしない。

だって、そうでしょう？

感情が許さない。

誰かにぶちまけたくてたまらない。

この怒りを。

この悲しみを。

「生きたいと願うことも、死にたくないと叫ぶことも、みんなみんな！！！！」

そう、知っていた。

その思いの在るべき形を。昇華されるべきその思いの呼び名を。

「それは、すべて 祈り と呼ばれるべき感情じゃないの
!」

それは、神様に願う人々の純朴な願い。

大切な誰かと在れますように。

大切な人が無事で帰ってきますように。

この幸せが、続きますように。

それは人が抱く、永遠の願い事。

…ワ イ、神様サイト イ。
(棒読み)

18 彼女と彼の、お伽噺 其の三

確かな願い事を知っているよ。

身体が熱いの。

頭がぼつっとするの。

苦しくて苦しくて仕方がないのよ、助けてお母さん。

遠いあの日、彼女は確かに願ったのだ。

痛いよ痛いよ 誰か助けて。

ま、たすけて

かみさ

「それを祈りと呼ぶか、おまえは」
なるほど、そう呼べるのかもしれないな。

友である異世界の魔王イスラン「アル」ジェイクは、叫び啼いた
異界渡りの少女の言葉に感情を崩すことなくそう呟いた。

溢れた感情をおさめようとしてもしない彼女に、イスランは続きを告

げる。

「だが、それはいつか欲望へと変わるだろう。初めの感謝は当然の要求へと変化し、末期の諦めは不満のこもった未練へと変わる」

生存本能はそれを脅かす他者を排除し、奪われた衝撃はやがて復讐への序曲へと変異するだろう。

そこにあるものは魔と呼ぶにふさわしいとは思いはしな
いか？

冷たい言葉だった。

哀しい言葉だった。

彼女でさえも否定できない真実だった。

「でもねイスラン。でもね、イスラン」

京香は知ってる。

彼が本当は誰よりもそのことを知っていること。

この世の痛みも苦しみも、全て識るが故に魔王の座に居る友人が。

「 やつぱり、願うことは止められないよ。イスラン」
たとえ神様がいなくても。

ねえ、お友達。

自らの無力を嘆いているのでしょ。

哀しい有様をただあるがままに受け止めて。

諦める意味も手段も喪つていても。
君はその矜持を失わない。

世界を維持することを止めない。

零れる涙は清らかでしょうか、穢れでしょうか。
答えは、私にはわかりません。
けれども。

「
」
泣きだした私の涙をぬぐうために触れた君の指が、とても優しく
ったことだけは知っています。

「私は。 私でいることを願わずにはいられないよ。
イスラン」

呟いた言葉に、君が返事したのを知っている。

「……そうか」

今日の異世界の天気はとても寒い。

風が吹いて、雲が荒れて、冷え込む空気が大地を枯らすよ。

それでも暖炉の火縁石は赤々と燃えて、隣で抱きしめて慰めてくれる人はとても優しい。

そんな温かさのなかでなら、哀しいお伽噺を聞くのも悪くない。いつか知らされたのだろうこの世界のお伽噺は、思ったよりも京香に苦しみを与えたけれど。

君と過ごすこの宇宙のなかでなら、その苦しみにも耐えられるだろう、きっと。

「イスラン、あとで温かいモツスモス牛乳……」
飲みたいです。

ぐすんと鼻声混じりで呟いた一言は、小さな違和感への小さな攻撃。
優しい友達は、少しだけ眉を上げて。

「もう少ししたら、ジェルムに頼んでやるよ」
甘いのがいいんだろう？

京香の髪を撫でた。

甘えさせてくれる君だから、今はもう少しだけ泣かせてください。
この曖昧な境界のなかで。

本日の覚書(?)

「宇宙」は一文字ごとに意味があることをご存知ですか？
詳しくは漢和辞典またはウィキさんでお調べください。
天地四方上下、往古来今。
初めてそのことを知ったときに、なんと判りやすい現在の示し方
かと思っただ記憶があります。

18 彼女と彼の、お伽噺 其の三（後書き）

これでも友情なんだぜと主張すると怒られるような気がしてなりません。（汗）

お気に入り登録が100件を超えました。とてもありがたいです。ゆっくり更新が基本の作品ですが、これからもよろしくおねがいします！>><

19 彼女と彼の、装身具（アクセサリ） 其の一

「彼女と彼の、^{アクセサリ}装身具 其の一」

きらん。

輝いたのは、煩惱か本能か。 歩く街の中で、店頭飾られた宝石に目が捕われた。

く、く、くそおおおお。金がないのに可愛い可愛いめっちゃ欲しいよおお。

じっと立ち止まったのは、23歳の篠原京香。

脳裏にあるのは、素晴らしい早さで回転する走馬灯。

もちろん、廻るメリーゴーランドの中身は、通帳の数字やお財布の中身や今期の給金、生活費、来月の給料日までの日数計算。

付けていく場所があるかと？

なかったら作るのが女子の本望だと、心得ております！！（敬礼）

「だが。 お金がない」

レシートとポイントカードで一杯の我がお気に入りのお財布の中身を思い出すととても切ない。

うとう、ローンにはまだ手は出したくないんだお姉さん。

ぱちん、としたのはお財布のガマ口。

かさつくレシート類が邪魔だった。

「 最終手段へと参りましょうか」
ぎらつく視線は、狩り人のそれです。

あきらめたら終わりですよ、何事も。

「ネバーギブアップ！」

諦めません、私の可愛いペンダントさん！

そして、今日も彼女は世界を渡る。

夢のような異世界へ。

物欲にまみれた大人に、皆さんはなっではいけませんよ？

「おっちゃんおっちゃんロドのおっちゃん、助けて」

某青猫に泣きついた某少年のように京香は叫んだ。

居場所は、ドワーフの住む【土の珀^{はく}】。

もっとも、それは他種族が呼ぶ名前だ。

そこに住む小さな人々は別の名前でその場所を呼んだ。

「おお？ 京香じゃねえか、久しぶりだなあ。窘^{あなぐ}に用事かあ？」

「うわああん、ロドのおっちゃん今日も顎髭が痛いよおおお」

お髭の痕がじりじりするからやめてくださああああい。

ドワーフであるロドのおっちゃんは、160ぎりの京香の身長よりも小さな140前後。

正しい名前は、ロドム＝ヴォイズ。

だけど、彼はおっちゃんだ。どんだけカッコつけても中身はおっちゃんだ。

豊富な顎髭はドワーフ族の種族的特徴であるというのに「てやんでえ、邪魔だ！」の一言で毎朝毎晩伸びる髭を剃るロドム氏の姿は、生ぬるい同族からの視線を今日も浴びている。

彼は気付いているのかいないのか。

伸びるスピードが顕著なドワーフの髭は、ぶっちゃけ伸ばしておいた方が手間はかからないのである。

「…無精ひげだったのか、それ」

「実はそうなんだぶん」

真顔で会話したのは、初めの頃の京香とドワーフ族の長老である。うん、奥が深い。

今日もロドムのおっちゃんの顎には青い髭の剃り残しがある。おかげで、挨拶と同時にハグされた京香の腕におっちゃんの顎が触れて痛いことこのうえない。

「ほんで、何の用だったんじゃ？」

「え、と。すいません、こんなの作って欲しいんです！」

差し出したのは、携帯の写メをプリントアウトした件のペンダント。

反射するガラスに一番苦労しました！（撮影禁止じゃなかったはず……自信がない）

「あ？ またか京香」

嫌そうな声で咳かれました。

「お前この前もそんなこと言って、腕輪つくらせたとこじゃねえか」

「…全くもって、そのとおりです。」

ちなみに、その腕輪はわがアパートの一室で眠りについております。

出来が良すぎて、使いこなせなかつたんだよう。

京香が持つてる中で一番高価なスーツよりも気品のある小物にどうやっても見あう仕草を手に入れられなかった、京香の悔しい出来事でした。きつともっと大人の女性になれば、そうすれば

きつと身につけられるはず！

涙ながらに封印した過去のお話でした。

「うう、 焼酎 一本頑張つて持つてきたの「どれ作ればいいんだ？」

…間がなかった。

ちなみに、ロドのおっちゃんの手には既に焼酎が握りしめられている。いや、あれは抱きしめられていると行って過言ではあるまい。この世界にはSAKKEはないらしい。

米つてそこまで主流じゃないからなのかしら。この世界では。

「おーっしゃ、なんでも作つてやろうじゃねえか！」

ぷっはー！

アルコール臭の漂う台詞だった。

「いよ、ロドのおっちゃん男前！」

黄色い歓声を上げながら、京香は思った。

これだから、まだ26歳なのにおっちゃん呼びされちゃうのよ？

ロドムのお兄さん？

本日の覚書

ロドムⅡヴロイズ。

ドワーフ族の26歳。属性おっちゃん。

種族特性のとおり、身長は140程度と低い。よって京香よりも

ちび。(禁句)

ロドのおっちゃんと呼ばれる。(主に京香に)

お洒落のつもりというよりも、単純でせっかちな性格のために毎朝毎晩彼は髭を剃る。ドワーフなのに。

「石の仔」「岩窟の良夫」。

彼の愛用の品は、ダチのミニ くとレスたんの三人で共同作成した大槌である。

ロドムが酒を飲んだあとその大槌が添い寝する確率は96%。嫁と呼べ。

土の珀。別名「窖」^{おなへくひ}の住人。

20 彼女と彼の、装身具（アクセサリ） 其の二

「彼女と彼の、装身具 其の二」

ガンゴンかんこん。

鎚が降るよ。

ガンゴンかんこん。

土が降るよ。

ガンゴンかんこん。

壊こちが降くだるよ。

世界が震えて、基盤たりし世界は揺れる。

それでも彼等ほもはや揺れずに。

ただただ生きる道こそを定めとっている。

その意志はなんと強固たりえようか。

「おっちゃんおっちゃん！ ちよっ、どこまで進むつもり？」

京香の叫んだ声がわあんと反響したのは、【土の珀はく】こと『音おん』
に張り巡らされた坑道のなかでの話。

「！ ……」

離れた場所で、叫んだらしきロードのおっちゃんの声の気配が感じ

られた。

「わかんないよ、バカあああ！」

暗闇の中、夜光茸やうこうたけがほのかに光る洞窟をてくてくと歩く京香の顔は泣きそうだ。

足が痛い、暗い、道がわかんない、さっきつまりた足の指がじんじんするよ。

心細さに泣きだしそうだ。

「どうしてこんなことになったんだっけ？」

思考の転換を図るために、京香は思いだした。いまここで立ち止まってしまった自分のために。

「石の在庫がねえ」

「……………は？」

ウィンドーで一目ぼれしたペンダント（性格には写メったものをプリントアウトしたもの）を見たロドム「ヴロイズの第一声はそれだった。」

「…ないの？」

そんな馬鹿な。

後に続かなかったのが不思議なくらいの驚きだった。

だって、ここはドワーフの住処だ。三度の飯より石の掘削と

加工が好きだと自他ともに認める彼等の。

「このピンクがかった色の石はこしはらく見つかってねえんだ。少しはあった在庫の方も偉い売れ行きで消耗されてくわ、希少になるにつれて需要は高まるわけで一切合財のこっちゃんねえんだ」

生憎なげだったな。

ぶかあと煙管きんぱんを蒸かしながらロドのおっちゃんが言った。

副流煙で肺がんにもなるうものなら賠償金請求してやる。

四六時中くつついてるわけでもないのにそんな請求通るわけねえ

だろつと突っ込みがきそうな感想を、京香の頭脳が呟いた。

「うっう、私のペンダントちゃんが」

遠のいたマイペンダント獲得の日に泣いた。

「手はねえわけじゃねえが」

ばかり。

ロドのおっちゃんの口元から大きな輪っかの煙が上がった。

技か。

技だ。

子供時代にどの男の子もがあこがれたソレを見つめた。

近所のお爺さんのそれを見てすげえと騒いだ幼少時代。

あの

純真さはもうないなあ。

我が身の在り様を振り向いた23歳独身（彼氏なし）の京香だった。

「きりきり吐きなさい！」

ロドムーのおっちゃん！

俺の名を勝手に変えるな、と言いたいのに目の色が変わった異界渡りの少女に言えなかったドワーフ族期待のホープな26歳の石工の職人がいたそうなの。

「ほえ？
んぎゃ あああ、また着地点の設定間違えたあああ
ああああ！」

んぎゃ。ラくんにはれたら、またいじめられるよおおやばし
やばしやばしうっかりM認定もらえちゃうかもしれないそれはやばし
ジエムっちのお仲間扱いされてしまういやーん覚醒するMな私？そ
んな私に出会うのはあと10年後でもいいじゃないかああああ。
（ちなみに20年後や30年後以降のM覚醒は絶対にご辞退する。
年取ってからの人生観の変動は、ストレス負担が著しすぎて本気で
寿命が縮みそうな気がするので）

いきなり目の前に現れて自己中心的な保身混じりの感想を叫び出
したのは、茶髪黒目の人間族の少女。

白のインナーにお気に入りのピンクのサマ カーディガン。ダー
クグリーンショーパーン姿は、この世界には存在し得ない衣装だっ
た。

「……………」
「……………」

「何だ、このいろいろとダメダメっぽい異邦人は」

素直に突っ込んだ蛇牙族のミニースーフアンスローは、京香を
質問攻めにしたあげく科学の発展のための検体同意書を（むりやり

に)書かせようとしたことで、『懲りない学ばない頭を使いこなせないの3N異界人』と称される篠原京香に悪夢を見せたというその偉業より某所からの強い尊敬を受けることになった。

「入るぜ」

何処をどうやって辿り着いたのかわからないのだが、ようやく目的地についたらしきロドのおっちゃんか声をかけて入っていったのは窖のなかに設置された邸でした。

「岩の中に見事に埋まりこんでるんですけども、このお屋敷」
どんな建築家による所業ですかこれ。

昔むかしの石炭が主流だった時代。最低の所属階級であり、最多の労働者であった炭鉱の作業夫たちはその命の危険から信仰を大切にすることも多かったのだという。

そうでなくてもお守りを身につけて作業するのは通常のことであり、器用なものは祈りをこめて岩で神像を彫りだす者もいたというのは嘘かまことか。
とにかく。

「これは信仰ではないだろう、これは」
乾いた呟きで京香は地味に突っ込んだ。

どどんと埋まった邸の前には、蛇の絡まったシンボルマークが存在していた。

……… 医者か科学者か哲学者。 どっちだ。
その屋敷の所有者に対して、いやあな汗をかきつつ考察した京香だった。

もちろん。

「なにしてんだ京香。 はやくいい」

戻ってきたロドのおっちゃんがそのすばらしい筋肉質な腕でもって京香をその屋敷へ引っぱり込んだことで、その考察はしてもしなくても同じ結果に繋がることになったのだが。

「待って待っておっちゃん。なんだかすごい嫌な予感が！　すごい嫌な予感がするんですけどもおおおおおお」

「ほいほい、悩むな感じるとりあえずおまえさんの感覚は間違っかねえと思っぜ」

「いやああそこは否定してええロドのおっちゃん！！」

髭のないドワーフに連れ去られた少女の声は、涙の色をにじませていたということだ。

「おお、俺の実験体。素敵に今日も科学のために生きてるか？」

「いやああああああああああ、もう実験いやああああああああああああああああ」

半狂乱で叫ぶ京香の目の前には。

ふしゃしゃしゃしゃしゃと笑う蛇牙族の青年。

長く伸びたその茶色の髪を無造作にクリップで留めた30歳。

だらんと裾が伸びた白衣は、医者 of 制服でもなく哲学者の証でもなく、ただのマッドサイエンティスト。

「おお？　そんなに喜ばれると俺様の研究魂に火がつくぜ？　おっ嬢ちゃん」

ふしゃしゃしゃしゃ、と笑う口元には蛇の牙と、赤くて長い舌。
「狂蛇」「世界を周る冒険者」「隻眼の蛇」。
京香が出逢った二人目のS属性であった。

21 彼女と彼の、装身具（アクセサリ） 其の三（後書き）

じゃっがー。

ちなみに、一人目のSはもちろんラ くんですとも。
間違っていない。

次は、来年までお待ちくださいませ。（ペこり）

22 彼女と彼の、装身具（アクセサリ） 其の四（前書き）

本年もどうぞよろしくお願いいたします。（ペーじ）

22 彼女と彼の、装身具（アクセサリ） 其の四

「彼女と彼の、^{アクセサリ}装身具 其の四」

蛇の目玉はただのガラス玉。

何も見えない、何も感じない。

それはただの装身具。

「俺の目玉？ 欲しいのなら持って行け。ただし、俺の実験体になるって根性があるならな」

隻眼の蛇牙族はいつもそう言って、高らかに笑う。

「よお。ミニー、いいもの持って来たぞ」

すごぶる良い笑みで京香を担いで声を発したのは、ロドのおつちやん。

「ちょ、ま、もの？ もの扱い？ というか何あたし捧げもの？

ていうか飛んで火にいる夏の虫？ 鍋付き出汁付きコンロ付きの力

モとねぎ？ 注文の多いレストランのお客さんもうあそこの煮えたぎった油につかるだけですよってそれなんて自殺の勧め？ みたいなの？ そんな扱い決定なの？」

なにその扱いひどすぎる。

担がれたままで嘆いたのは、異界渡りの篠原京香本人である。

「お？ ロドム。いいもの持ってんな、分け前くれんだろ？ もちろん」

じゅるりと舌が濡れる音がしました。

「いやあああ、獲物ロツクオン済みか！ 食われるのはいやじゃあああ」

半狂乱の自分の声が耳につきました。

「少しだけだけどな」

「ちびちび飲むにや上等だろ」

そんな京香もガチ無視して豪快に笑う二人は、仲の良いお仲間です。

「……話を聞いてくれるお友達が欲しいです」
宴もたけなわとなったころ。

ロドのおっちゃんが懐に入れて持参した地球産の焼酎片手に駄弁るマイペースな連中に放置されたまま、少女は悔しげに呟いた。

べ、別に、酒に負けた気がしてなんか悔しいとかなんて思ってたんか、ないんだからねっっっ！

「……なにか寒気がするんだが」

「……流しておけ」

どうせ、アレだ。

アレと云われたあたりに、彼等の中での京香の位置付けが露にさられている気がします。

「…ピンキーがかった石だあああ？」
ひっく。

「…ピンキーじゃないピンク…」

「ピンキーなんざねえよそんなもん」

訂正したのに流してしまっ酔っ払いなんか大嫌いだ。

うわばみではなかったミニ くん発言に「の」の字を書きだした京香だった。

「ロドのおっちゃん…」

「ははは、ミニ 相変わらず酒に弱いよなあ、おもしれえからいいけど」

ぎゃはははは。

「……………」

お願い、誰かお話聞いて。 京香寂しいの。

アルコールに弱い蛇牙族が一匹、アルコールに目がないドワーフが一匹。

「…うふふふ、これでアルコールに揺るがない奴がいたら、あたしどうなったのかしらね」

遠い目で宙を見つめた少女だった。

とりあえず、その場合。

「 うん、E フィールドによって確実に排除されるね、
浸食はまず無理。どんな神様の使徒でも無理だわ、そんな展開」

なんだろう、空気読めなさっぷり最強の状態を想像するだけでト
ラウマが生まれそうな予感さえした。

ぐすぴー、ぐす。ぐすぴー、愚す。

酒に酔わされて眠る蛇が一名。

「…………… すいませんが、おっちゃん。この困った蛇牙族のこんにやるめは今日中に復活しますでしょうか？」

「ああ、ミニ は酒に弱くてもその分排出もはええからな、問題ねえよ」

2ホア程すれば起きんじゃねーの？

「…………… ああ、そう」
2ホアあったら、現在やってるゲームのレベル上げとアイテム集めがどれだけ進むんだろうか。

今日は行き先が行き先なのでゲーム機は持参しなかったことを、心から悔いた。

それより2ホア後。

蛇牙族のミニース「ファン」スローが眠りから目覚めるまで、どれだけ呑んでも潰れないドワーフ族とアクセサリーのここぞというときの使い方についてを延々と語る異界の少女がいたそう。

（ですから、全てはさりげなさ。　アクマでもメインはコーディネートですよ！　造形だけではなく心躍らせる色、随所の歪みも許さぬ形、光も闇も弾きとばすような艶、瞬きの回数イコールグレイトフルな煌めき！　そう、それこそが私の求める愛です愛！　これぞ愛！）

（ほう、だがまだまだだな。　愛を語るなら原石のちら覗く岩盤に出会ったときのあの朦朧とするほどの幸福感にまで辿りつくまでは赦さねえぜ！　あれぞ採掘職人の夢！幸福！運命の瞬間！　落雷のごとき奇蹟！　まさに至福の愛だ！）

（……………需要先と供
……………給先の微妙にずれた愛（欲望）の形があそこにみえるな）

ホア：時間を表す単位。1ホアは1時間。

：ノリはチラ見せに萌える心境かと。

ズレは、魅せる側になりたいか、魅せられる側になりたいかのちがいか？

発掘する歓びと、愛でる歓び。(ともいっ)

酔っ払いのテンションに素で追いつけるのが京香の真骨頂である。

23 彼女と彼の、装身具（アクセサリ） 其の五

だっぴーだっぴーぴーぴー。

京香の母親の青春時代あたりに流行ったらしいこの語尾。

「りぴ 語」と呼ばれて普及したらしい。

今では死語となったものではあるのだが。

「廻り巡ってこんなことになるとは思いもしなかったわねあのころは」などと呟いたのは、某時期のニユース番組を見ながらの母親の独白である。

ここは、ミニ くんことミニ ス＝ファン＝スローの自室。

DERONZ。

「…でろーん

うっわー。

心で叫び、仕草で素直な今の感情を表わしてみた。

ちなみに両手の掌は指先までぴんと伸ばして反り返らせ、京香の身体の前に押し出すような形に保たれている。

のー、のー。NONOONOONOON!

心の距離は叶うことなら100mは保ちたい。嗅覚が死ぬる。

「お前のご希望だろうが」

「失礼な女だな、あいかかわらず」

二名の男どもは平気そうだが、匂いに敏感な女性としてのもの申す。「でも臭いよ！ この脱ぎ散らかされた皮！」

眼元がうるんでいる自覚は大いにある篠原京香23歳の青年の主張。(20文字以内vr)

「えー。臭いか？」

「うんにゃ」

俺はそうは思わねえけど。

「……………この親父ども！」

匂いへの耐性は女性よりも男性の方が強いらしいです。しかし、だからといってこの熟れ鮭なみの強蛋白質の匂いに平然としてられるその神経にはどうやっても納得が出来ません。

のー。のー。のおおおおおおお…えっp。

文字数を二桁に略した分だけ京香の主張は敗北を喫した模様。せめて300文字の青年の主張でなくては駄目だったんだろうか。

「……………」

口呼吸って結構きついつてことを初めて知った京香だった。(涙)

蛇牙族は年に数回繰り返される脱皮とその立派な牙が種族的特徴です。

「蛇牙族の牙は高く売れるって本当ですかー？」

魔族や聖なる一族の話ではない。

主に人間族の王族だとか貴族だとかの間で高額取引されるんだってさ。

「…売る気は誰にもねえんだが」

まあ、ハイエナどもが墓場さらって盗ってったりしたやつが売れるらしいぜ。

ミニ くんが若干の怒りを込めて説明してくれました。

盗掘品泥棒に対しての怒りみたいなもんか？

「ところで、わたしのピンクীちゃんな石のお話なんですけど、どうにもフリーダムな連中のおかげで話が進まないなので強引に進めてみた。早く、早く我が手の内にしたいんです。」

「…ピンクীな石ってなんだ？」

ピンクダイヤモンドの話か？

首をかしげたのはミニ くん。

「……そうです」

酔っぱらってたミニ くんがピンクいピンクい言ってたのでどうやら言い間違えたらしい。

京香ってば恥ずかしい！

「京香。俺にはおまえの恥じらいの基準がよくわかんねえよ」

というか、おまえには恥じらうだけの自制心なんかねえんだと思っただぜ。

ロドのおっちゃんが恥じらう京香に対して突っ込んできた。

見ると隻眼の蛇牙族も頷いて同意を表わしている。

「自制心がなくて社会生活が送れるとおもつか！」

率直きわまりない親父どもにも申す。

私はこれでもしっかりと自立した社会人なんです！

本日の反省および気づき

話を蒸し返す連中ばかりで本題に進まない。
共同理解は大事だよってことですね。
すごく理解した。

24 彼女と彼の、装身具（アクセサリ） 其の六

濡れた革のベルトで木材を縛ります。

それを熱帯の砂漠地帯のど真ん中に曝しましょう。

さてさて、あとは時間の問題。

一週間ほどのちにそれを見ましたならば。

……ばつきりとその木材は絞め折られていたとお話です。

こわっっっ！

「ん〜。これあたりか？」

「こつちあたりのがいいんじゃないかねえの？」

がさごそがさごそ。

ただいま、我々は家探し中である。

「…犯人はいるのに下手人の証拠品が必要とはめんどくさい…」

などどこかの2時間サスペンスドラマの刑事風に呟いてみたら、その犯人から拳骨を贈られました。

「誰が犯人だっつーの！！」

「ぎゃははは。ある意味、このかたずけられてない部屋の犯人っつ

「のはあってるんじゃないの？」

だって、ミニの自室なんだしここさあ。

笑顔でいうロドのおっちゃんは輝いていました。

おおお、ここに正義の探偵役を我発見せり！

希望を見出した京香だった。

なにせ、主役の探偵さえ見つければあとは自然と話が進みますからねえ、物語りのセオリーセオリー。

ぶっちゃけた感想を述べすぎる23歳であった 世間ずれしすぎている。

「じゃあねえだろお。いいかげんにそろそろ焼却処分でもスツかなあとか思ってたところだったんだからよ」

「ああ、そっぴやおまえ焼いたときの煙の臭いが瞳孔かっぴらくほどいやだって言ってたんだっけか」

「おう」

「 蛇の燻製…」

仲のいい二人の後ろで想像してみたがあまり気持ちのいいもんじゃないなと思いました。

魔女なレイちゃんのお部屋でヤモリもどきの黒焼きだったら見たことはあつたんですがねえ。

「……京香。おまえのピンクダイヤモンドのあてが消えてもしたらんぞ」

あんまり調子に乗んな？

「……」

目の前でじゃがーなさまが怒っておられました。

「さ せん！！ 私が全て悪うございます！ ミニさま……」
がばりと謝罪を試みた。

「 よし」

判ればいい。

かくぶるしつつも目当てのものを選別してのけてその部屋を出るまで、京香は生きた心地がしなかった。

(……蛇、こわい)

「しかし…」

「ん？」

一服ついたあとでのお茶会。

目の前のテーブルに置いた一粒の宝玉を見つめます。

「これが、ミニ くんの脱皮した皮から出来たものだなんて全然思えない」

だって、これ完璧に宝玉の原石じゃん？

珍しく素直に感心した京香が言った。

目の前で湯気を立てているのはグル 茶。

少し甘みのあるのが特徴のあなぐり窖のにおけるドワーフたちの嗜好飲料である。

若干猫舌のけがある京香は熱いグル 茶の入ったマグカップを片手で持てず、手にしたばかりだった念願のピンクダイヤモンドの代用品をテーブルにことりと置いた。

「ん。 まあ、知る人ぞ知る的な最後の手段だしなあ」

脱皮した蛇牙族の皮は日経つに連れて固形化していく。圧縮される過程によって、その皮は石となり、宝飾となりえる鉱石なみの強度をもつのであるという。部位によってその形態や強度こそは異なるものの、熟練した石掘りであるドワーフでさえも時には見分けがつかなくなるレベルのものが見つかることもあるのだという。

正直、人間どもは知らんわな、こんなことは。

ドワーフの一人であるロドムのおっちゃんが教えてくれた。

「まあ、そうだろうねえ」

お茶の効果か蛇の一喝に鎮静されたのかは不明だが、わりと平然と京香はそう返事した。

「いっちゃなんだが、京香はこれでもこの異世界の人間たちについてはあんまりいい抱いてはいない。」

「だって仕方ないじゃないか。」

「イスランのこと狙ってばっかいやがるんだぜ、あの連中。」

別に何も悪さらしいことしてるわけじゃないんだからほっとけって言うんだよ。

「いい迷惑だ！」

大切なオタク仲間への友情の証として、そう云い放ってやりたい京香だった。

「貴重な宝石がこんなに簡単に手に入ると思ったら、身の程も知らずに狩りくらいやらかしそうなものね」

「こっちの人間の貴族とやらさんは。」

「ずずずずずず。」

音を立てて飲む。

「うーん、体の中から温まるのう。いいことですだ。」

「…と、前を向くとお二人さんがまた微妙な表情をなさっておられる。どっしたのやら。」

「正直びっくりじゃのう」

「ああ。ちょっとどごろじゃなくびっくりした」

お互いに納得しているようだが、またか。

また、ヒトを無視するつもりか！！（涙）

「ああ、もう！ 何の話かおしえてくれちゃってもいいじゃんよ！」

「だって、もうとっくに蛇牙族は狩られちゃってんだぜ」

異口同音の台詞。

「……………なにそれ。 あたし知らなかったんですけど」

呆然とした京香の手の中のカップから垂れたグル　茶がテーブル
クロスに落ちていた。

まるで、心に落ちた黒い滲みのように。

「京香にやあ別に教えなくてもいいんじゃないかねえかって、俺らで話してたんだよな」

「ああ、だってお嬢ちゃんにはまだ早いだろうと思ったしなあ」

こくりこくりと目の前で頷いたのが、飄々とした風合いの強い蛇牙族のミニ スィファン スローとドワーフ族のロドム ヴロイズ。「……お嬢ちゃんいうなよ」

この二人ともう一人、ホビット族のポン ボルンと初めて出会ったときの京香は19歳だった。

あれからもう4年がたつのにこの3人組は京香のことを「お嬢ちゃん」呼びすることをやめようとしなない。

…悔しいことこの上ない。

「なんで？ お嬢ちゃん呼びのが可愛くていいんじゃないのか？」

おまえさん、いつもなら喜ぶだろう？ 可愛い呼ばわりされんの。

ロドムのおっちゃんが言った。

「あたしはもう、子供じゃないよ」

京香が呟けば、二人は顔を見合わせて笑った。

「おまえがそう言う間は」

「俺たちには子供に見えるんだよ」

二人は笑う。

いつまでも、いつまでも。

哀しいはずの大人たちは笑う。

痛みは摩耗して。

願いは形骸化して。

進む先に待つものだけを信じて。

壊れるものさえも、愛して。

「蛇牙族はもう俺だけだ」

だから、種としての俺たちはもう終わってるんだよ。

ミニくんは平然とそう告げる。

人族の貴族たちはその蛇牙族の立派な牙を欲して蛇牙族を狩った。
欲望を満たすために。

彼等は言うだろう。

「欲したものを得て何が悪い」と。

蛇牙族のなんたるかを定義するのは難しい。
なぜなら彼等は魔族ではなく、聖なる一族でもないからだ。
その牙は固く艶やかな鉱石のごとく、その生態は蛇のごとく、そ
の生き様は　　。

「苦しくないの?」

ミニくん。

京香はそう尋ねた。

そして、自分がバカなことを聞いたと再度理解した。

苦しくない筈がどこにあるというのか。

己を責めずにいられなかった。

ミニ ⅡファンⅡスローの自室に飾られた数多の鉱石が蠟燭の火
を映して揺らめいた。

それは光の幻影。

「　　」
「苦しいぞ」

笑顔で告げられた言葉の裏に、どれほどの過去があったのかを
京香^{あたし}は知らない。

装いましたか、その身につける道具を一つ。
装いましたか、逝く身につける道具を一つ。

偽りを纏うことなく、胸を張り。

装いましたか、この世を生きる生身につける

道具を一つ。

「 ミニ は、もう狂っているんだろうね」

そう言ったのは、ホビット族のダチ ポン＝ボルンだった。

「……俺のことか？」

「そう」

真顔で人のことを狂った認定をかました奴だった。 変な奴
だろう。

「……どこが？」

俺のどこが狂ってるってんだ？

怒るでもなく、流すでもなく、俺は訊いた。

「決まっているよ。 一族が全て狩られたと聞いても取り乱

しもしなかったこと全てが狂気だろう」

一族大事なホビット族のダチはそう言った。

「かもな」

狂っていると言われても怒りもしなかった俺自身が、その言葉に
納得していたということは重々承知の上だ。

「おまえへの贈り物だ。 大事に持っておけ」

ミニ くんがそう言って手ずからにつけてくれたのは、綺麗に研磨されてペンダントへと形作られた念願のピンクダイヤモンド。彼らの、証。

「なにがあるわけでもないが、おまえに蛇牙族のことを覚えておいてもらうのも悪くない」

たまには思いだせ。異界渡りの少女^{むすめ}。

初めてであったときに京香をそう呼んだのはミニ くんだった。

訊けば、この世界にない空気を京香が纏っていたからすぐに分かったと彼は言った。

だから、どんだけこの世界の連中は!!!

出会う奴らみんなチートかと突っ込んだ京香だった。

「この滅びを待つだけの世界で初めに死にゆく種族のことを知っていてくれるだけでいい それだけで、いい」

俺はもう壊れているから。

声ではなく、気配がそう言っていた気がした。

「おまえが魔王の友人だろうが、異世界の者だろうが、なんでもいい」

ミニ くんは最後に告げた。

ただ。

「世界を異なる第三者として、この世界をみてくれるだけでいいんだ」

滅びがやがてこの世に充ちても。
我らは生きる。

それが、既に選択した一族の意思。

地に埋もれた過去の意思を捨てるドワーフ族も。
滅びようとしている、神の道具たりし蛇牙族も。
森とともに生きるホビット族も。

すべては、
それでも己であることを選んだのだ。

「ああ、
美しいね」

手に取ったその装身具を見て、京香は伝える。
心のままに。

「
とても美しい、石だ」と。

装いましたか、その身につける道具を一つ。
装いましたか、逝く身につける道具を一つ。
装いましたか、この世を生きる生身につける道具を一つ。

その道具を見つけて、選び、研磨を施し、形となすのは。

生きると決めたアナタの為すべき仕事です。

本日の覚書

ポン＝ポルン

ホビット族の青年。

ミニ とロドムのダチ。嫁あり。

酒を飲んでもまったく変わらないワケである。

思ったことはすっぱり言ってあげる方が友情だと信じている。

…これからの出番、あんのか？

27 彼女と彼の、装身具（アクセサリ） 其の九

小さな端切れを買ったんです。

色はピンクで、肌触りのいいフェルト地のものでした。

同僚に頼みこんで、ミシンを借りるついでに縫い方の指導もしてもらいました。

あまりの不器用さに「あたしがやる！」などと切れた相手をまあまああと宥めすかして。

出来た小さなミニ巾着に入れたのは、大切な大切な預かりもの。

約束の、証。

「ミニくんはズるい」

ぼつりと呟いた。

「あ？」

「ん？」

聞いた二人は、何を言い出したのかと怪訝そうな表情だった。

きつと視線を上げて、宣戦布告した京香の顔には、もう己を責める少女の表情は残ってはいなかった。

「ミニくんはズるいよ！ あたしにはっかかりお願い事して！ ミ

ニくんはズるい！」

あたしにもお願いさせろ！！

己を常々、実験体扱いしてくれる蛇牙族のミニ ス「ファン」ス
ローに対して、京香はそう宣言した。

「はああああ?????」

またこいつは何を言い出した。

そんな表情で、ミニ スとその友人であるドワーフ族のロドム
ヴロイズは京香を見つめた。

「おまえのいま手に持つてるソレは誰が提供したもんだ？」

確か俺だろう、おい。

せつかく切ない心情を吐露したというのに、この反応。

あいもかわらず空気を読まない娘ツ子だよ。

などとミニ スが呟こうとした時。

「ん！」

ほら、指！！

「…あ？」

精一杯の背伸びをしてミニ スに詰め寄った京香が右手の小指を
つきつけた。

「指きりするの！ 指出して！！」

ん！！

勢いだけは素晴らしかった京香に負けて、ミニ スは己の右手の
小指を出した。

京香はその指に、自分の指をからめて懐かしい誓いの文句を謳い
だす。

「ミニ くんはあたしがこの世界をすべて見るまで生きなきゃ駄目
です！ 指きりゲンマン、嘘ついたら針万本のーます！ 指切った
！！！！」

決定事項の如く宣言した京香は、さりげなく針の数を0を一つ分
増やして指切りをした。

万本か。 100均での購入でもそれなりの値段がしそうな

量である。

『実際指切りで針呑んだ奴はきいたことはないが、京香だったら真顔で呑めと強制してきそうな気がするよな』と後日、本人に述べたのは、某所で今頃爆睡しているマのつく職業の彼女の友人であった。

「なんだ？ そりゃ」

絶句しているミニ スの後ろから京香に聞いたのは、ロドムのおっちゃんだった。

彼自身もいきなりの京香の行動に驚いていたが、それよりも目の前のミニ スの表情のほうが面白いなと思いつつ、その元凶となつた少女の発言内容についての質問をかましたのである。

「ミニ くんがあたしにこの世界を見るって言ったんだからね！

ってことは、あたしがこの世界を見て思った感想は、ミニ くんが報告を受けるってことですよ！」

契約成立！ つーか、人の話を聞く訓練と思って報告受ける！！

「「それがよ！」」

さりげなく、酒盛り中に京香を放置していたことを根に持たれていたらしいとようやく気付いた二人だった。

「くくく…」
「……………」

笑いだしたのはおっちゃんことロドム「ヴロイズのほうで、沈黙したままなのはいつも飄々としていてと定評のあるミニ ス「ファ
ン」スロー」。

「 何よ」

もう約束したんだからね、破ったら針万本なんだからね！

ふてくされて告げた京香を指差して、ロドムのおっちゃんが笑っている。

「 お嬢ちゃんの勝ちだな！」
「 ぎゃははははは。」

爆笑としか言いようのない音量でおっちゃんは笑いやがった。

「うるさい、お嬢ちゃんいうな！」
「 ぎゃががぎゃはは」

衝動が収まらないと言うかのように笑い続けるひげなしドワーフにはいつか笑い死ぬといいのになどという怒りの思いが生まれそうになった京香だった。

聞いた瞬間にガッツポーズをしたのは、大人げない篠原京香23歳である。

「いつでも報告に來い。邪魔じゃなきゃあ聞いてやる。あ、SAKEもついでにもってきやがれ」

酒には弱いのにしっかりと要求するあたりがあいかわらずの俺様だった。

「毎度は無理だからね、言っておくけど!!」
財布の中身が減る!!

叫んだ京香だった。

「にしても……はあああああ」

最後までため息を吐き続けるミニ スィファン スロー。

「くくく。さすがにもうお嬢ちゃん扱いはできねえかもな

あ

苦笑するのはロドムのおっちゃん。

だから、なんでそこまで嘆かれるようにため息つかれてるんだあたしは。

ため息がとまらないミニ スについて、突っ込むべきか否かで悩んだ京香だった。

「じゃあまたね、ロドのおっちゃん、ミニくん」

転移のための座標を修正する。

頂いたばかりのピンクダイヤモンドはこれで京香のものになったのでワクワクする。

問題は付けていく場所とこの石ににあう服があるかだが、それはクローゼットを見ないことにはわからないので今は置いておくのだ。京香特有のその能力を発動させて、地球へ戻るその瞬間に、目の前の二人が手を振った。

「またなあ、京香」

ロドムのおっちゃんの声と。

「またこいよ、京香」

微笑んだミニくんの声。

ロドム＝ヴロイズとミニ ス＝ファン＝スローが、あたしのこと
を「お嬢ちゃん」呼ばわりしなくなったのがこの日からだったと気づくのは、それから何度目の酒盛りするときだったかはわからない。
なにしろ、気づいたらもう耳に馴染んでいたのだから。

京香という呼び名に。

約束の石は、今日もバッグの中に潜んでいる。

……あれ？ (冷や汗)

………うわああ、初体験だ。この展開は。 (冷や汗)
いえ、あの。

た。
なんぞこれwwwwww
思いもかけないところで、おもいもかけないやつが落ち

29 彼女と彼の、出会い 其の一

気配は突如生まれた。

敵意はない。

けれど見知らぬ気配をもつ存在。

不透明な存在。

「何者か」

誰何する己の声は強いものだった。

「
ここ、…何処？」

零れた声は幼い少女のもの。

あの瞬間に我らは出会った。

かけがえのない友よ。

おまえの願いを俺は知っている。

「はぴばで、イスラン」

「……………略すな」

目の前にはどんと置いたケーキ。

いつもどおりにレシピをネットでゲットしたあとに、竜王の料理人ことジェルムⅡコークにケーキを作成させたのはあたしです。

うん、我ながらいい仕事をした。

「我らが魔王さまに置かれましては大事な御身。ご安心ください、この篠原京香がしっかりと毒見をしておきましたぞ」

「……………味見したかっただけだな、おまえ」
なぜばれた。

「いや、むしろそれ以外には考えつかないだろう、ご友人さまの性格知ってたらさ」

ぼそりとケーキを切り分けていたジェムっちが呟くのが聴こえた。同じく京香と一緒に味見し隊の副隊長だった最後の竜王ヴィライドⅡオークスが、己の下僕の発言に頷いていた。

…このSM主従どもが。

「あら、美味しそう。うふふ、ご友人さまがいらつしやるとなかなか食べれないデザートが食べられて幸せですわねえ」

にっこりと笑って言うてくれたのは、至高の魔女たるレイクシエルⅡオッドさまさまだ。

ああ、今日も美しいレイちゃん最高、ビバデバビデブ　！！

某映画の魔女（妖精だったか？）の呪文を心の中で叫んだ京香は、今日もすがすがしくなにかを間違えていた。（なにしろ引用した呪文そのものからして間違っている）

「ところで」

全員が席に着き、ジェムっち特製異界風フルーツショートケーキを食そうとしたときに、我が友人にして異世界の魔王陛下イスラン「アル」ジェイクが誰ともなく尋ねた。

「誰の誕生日ケーキなんだこれは」

「……は？」

皆の皿に綺麗に盛られていたフルーツケーキがぱたんと倒れた。

綺麗に切り分けられてたのにね、もったいない。

「まさか、イスランが自分の誕生日忘れてるなんて思わなかった」
「ほほほ。全くですわ、人が調教して差し上げる前から冷静沈着が売りだったあのイスランさまが自分の誕生日を間違えるなんておほほほほほほほ」

「…調教、なんだね。レイちゃん流石」

女三人集まれば、姦しいとは異界の言葉だそうだが。
少なくとも、二人いるだけでも十分に煩しいことがよくわかった
と思ったのは、ともにその魔王陛下の誕生日ケーキを喰らった男た
ち三人だった。

その存在への不信がなかったのかといえば、それは嘘になる。

「
ねえ、ここ何処？」

壊れたように尋ねる少女の形をした不思議な存在は異様であり、異相であった。

石造りの魔王城には、不要と認識された魔術を退く永久的な結界陣が組み込まれている。

最強の魔王と称されるイスラン「アル」ジエイクでさえ、魔王城の地下にある宝玉の試練を乗り越えて城の主として認められるまでの間は、この城での魔術の使用には制限が生じていたというのに。突然、位相転移などという世界を飛び越える術を行って現れた、この存在は。

「
ねえ、ここ……

… 何 処 ？ 」

彼は警戒しなくてはいけなかった。 本当は。

たとえ、それが混乱と不安を宿した異界の少女の姿をしていたのだとしても。

「美味し糧！！！！」

「美味し糧！！！！」

「うまし…かて？」

思う存分、神露しんろと呼ばれる蓮花に似た極上の香を醸す花の蜜を練り込んで焼き上げたスポンジケーキに、モツモツ生クリームを冷やして攪拌してホイップさせた異世界編生クリームを塗り、この世界独特のフルーツであるクライヴァナ（夜光火虫が集めた花粉の中からまれに咲くという花の実。とろとろの甘い果実）を満面に敷き詰めた極上スイーツを綺麗に平らげた。

合い言葉は『美味し糧！！』だ、もちろんだとも。

布教したのは残念ながらあたしじゃない。イスランだ。

イスランにオタク魔王への道をちやくちやくと進ませている自覚がある身としては、嬉しいやら切ないやら。

いつか、弟子は師である私を超えてくれるのだろうか。

「…超えて貰われたら困るわねえ」

その場合は再教育させていただくわ。
びしり。

と空気を震わせたのは、レイちゃんが何処からか取り出した銀の鞭だ。

「……………レイクシエル、鞭をしまえ」

イヤそうな顔で食後の運動とばかりに銀の鞭を取りだしたレイちゃんを見つめるイスランの顔は青かったです。

どんな調教されたんだ、イスラン。

謎を知る叡知の魔女でもあるレイちゃんに視線を送ってみた。

「うふふふ」

ふつくしい笑みでごまかされた。

「……………で、だ」

きりりと顔をひきしめて、ミニマムドラゴンことヴィラード＝オークスが話題を変えた。

「今日のお誕生会とやらは終わったのか？」

真顔で呟く赤銅色のドラゴンの口元には、真っ白なクリームが付着していた。

隣のおかんじゃなくて下僕じゃなくて自称竜王のサーバントが、自分の主の頬を白いハンカチーフで拭おうとしていたが、どげしどげしどげしどげしどげしどげしどげしと繰り返し返されるバイオレンスな主従遭いが発生していた。

なんだかなあ。

って、まさかあのほっぺの白いクリームはジェムつちを釣るための餌か、まさか!?!?

「ラくん、……………怖ろしい子っ!?!」

げし!?!

……………某少女漫画の大家の名台詞を呟いたら、サドが蹴ってきた。もちろん、対抗はするつもりだ。

「おかあさんっ!?!」

気持ちの上では、目抜きめぬきの白と顔面の縦線は必須であるとも。

「誰がおかあさんだ」

隣のおかんが突っ込んできた。

今日はぶち演芸会の気分な魔王城の異界っ娘京香だった。

3 1 彼女と彼の、出会い 其の三

ぷつりと切れた膚の感触。
滴り落ちたのは、鮮血。

「ふざけるな！ 誰があたしのなかへの浸食を許した！！」

ころころと舌の上を転がった感触。
穿ちて混じり、落ちて放たれた。

生じたのは約束の黒章石。「黒い石」

涙ながらに泣いた娘の名を知った。
娘の名は篠原京香。 19歳の人の娘。
家族は父と母と兄と弟。 もっとも近くに喪われたのは祖父。
生まれた国は日本。

異界の、少女。

口の中で真円に丸まった、血と血が混じって生じる黒章石を吐き出した。

「いいだろう、異界の娘。おまえを我の友と呼ぼう」

与えたのは、守護。
奪ったものは異界の記憶と少々の言語。

混乱と不安は去り、怒りと拒絶がそこにはあった。

「なあ、友よ。」

世界は愛おしいか？」

問いかけた言葉は、まるで呪いの言葉の様だったと思う。
その言葉は、今でも我ら二人の間に漂う力ある問いかけの言葉。

世界は愛おしいか？ 友よ。

それは4年前。

滅びゆく世界の魔王イスラン「アル」ジェイクが、異界渡りの少女篠原京香と出会ったころの話。

「一体、何がしたかったんだか」

ぱらりと落ちた髪を拭われた。

「にやははは。楽しかったじゃん？」
「楽しければ、それでいいのだ。」

イスランに濡れた髪を拭かせてにやにやしているのは私です。ふはははは、幼児にかえったようでとても楽しいのだ。

「俺の誕生日なんざただのいいわけだろうが。せいぜい宴会のこじつけだ」

「いやいや、なかなか皆がちゃんと揃うようないいこじつけでしたとも。なかなか集まらないよ、あのメンツは」
「うんうん。」

などと偉そうに頷いてみた。

「その結果が、執務室の大清掃だ。 だれだ、あんな場所で虫とり網ふりまわして、ウイルスを捕えようなんてバカな真似をし始めたのは」

おかげで、書類のほとんどがワインとチーズでぐちゃぐちゃになりやがった。

「……………ううう。 すいません、あたしです」
バカですいません。

思いだして不機嫌になったイスランの手元に余分な力が入ってあたしの頭が痛くなった。

…わざとじゃないよね？ イスラン。

32 彼女と彼の、出会い 其の四

「もうあれから、4年もたったんだねえ」

にやりと笑えば、イスランも何かを探るように宙を見つめた。

「ふむ。確かに、その程度の時間は経ったようだな。…お前の世界でも」

地球における公転周期は365日。

この世界における公転周期も365デリ 1イアである。

すなわち、地球の一日とこの世界では時間がほぼ等しいのだ。

やってくる朝と昼と夜と夢の時刻が一緒であるということ。

そーいうこと。

「ねえねえ、そこの初対面で若い娘のディープなキスを奪ってくださった魔王陛下？」

「なんだ？」

あ、堂々と返事しちゃうんだイスラム。
さすが魔王陛下。
ずつずつしさには定評があるね。

「世界は愛おしいかい？」

にやりと訊いたのは、キミへの挑戦。

忘れるものか。
忘れるものか。

キミが問いかけた言の葉の一。

「さて。世界はなかなか愛くるしいようだぞ
とくにこの辺がな。」

そついいながら、イスラムはあたしの頭をぐしゃぐしゃにかき混ぜた。

ラくん相手に奮闘してたら、一人と一匹、ワインとドレッシングとソースを頭から被る羽目になった。

目にもあてられないと嘆いたのは、Mな竜王の調理人。

お行儀が悪いですわよご友人さま。

大人の振りして叱りつけながら、自分の分のワインとチーズだけはしっかりと確保していたのは、氷佳の魔女。

き・さ・ま、滅す。

地獄の血の池地獄から噴き出した毒ガスのような怖ろしい声で震えていたのは、最後の竜王。(属性S)

ふう。

ため息をつきながら、冷え冷えとした冷水の張った浴室へと京香とヴィラードを転移させたのは目の前の魔王陛下。

【……………つめてええええええええええ】

頭を冷やせと言いたかったのか、友よ。

頭よりも全身が凍えるわ!!

両者仲良く、すいませんでしたと誠心誠意謝ったら、瞬時に適温の湯に代わってくれた浴室は幸せでした。

柔らかなタオルで髪の毛を拭いたら、ふわりと浮いた細い髪の毛は静電気のいいお仕事。

「キミが生まれた日におめでとう」

たった一人の異世界の親友に。

友達になってくれてありがとうって言いたかったの。

本日の覚書というか説明？

1セク〓1秒。

1ミヌ〓60セク〓1分。

1ホア〓60ミヌ〓1時間。

1デリ〓24ホア〓1日。

1マリ〓基本的には30デリ(曆によって変動あり)〓1月

1イア〓360デリ〓12マリ〓1年

表記が違っただけで、時間は一緒。

異世界らしく異なる時間軸にしようとしたら説明が難しくなりそ
うだったからあきらめたなんて言えないけどいっちゃった。

33 彼女と彼の、もっふもふ！ 其の一

大神っていう言葉があるわけ。

いやまあ、好きなゲームのタイトルなだけといえはそれだけなんだけども。

古代の日本大和の国では、狼は一応益獣のあたいに入ってたんだそうなの。

なにしろ牧畜社会中心の西洋とは違って農耕社会だったから。昔の日本って。

西洋とは違うその社会の中で『オオカミ』は神さまだったんだそうなの。

田畑を荒らす山の獣を狩ってくれる大いなる神さま　　そういうこと。

当時に生息していたというニホンオオカミは既に絶滅したらしいけどね。

でもでも、この篠原京香さんだっけいちおう日本人のはしくれ。

もっふもふは大好きなんだ。

道で出逢ったネコには「たま」、出逢ったイヌには「ぼち」、と呼んでしまう程度には。

……由緒正しい犬猫の名前だよな？　ポチとタマ。

違った？　うちのお父様がそう言って、もっふもふしに体でうごめいていたのを実家にいた時に確かに見たんですけど、あたし。

「まんまみーあ！ お久しぶりです、ポチお母様あああ
！……」

もっふもっふもっふもっふもっふ。

抱きついた感触は、最高のもっふも布団。
至福である！！

「……またきたのか、変人」

呆れた声が上空から降ってきた。

もっふも布団の上には、更なるもっふもふの顔があつたりする
んだぜ。

「変人じゃないやい、あたしはただたんにもっふもっふを愛してる
だけだ！！」

もっふもっふもっふもっふ。

綿帽子のような艶やかな絹のような毛並みの素晴らしさ。

ああああああ、好き！！

「で、変人。いいかげんに我より離れよ。育見に支障が
出る」

「はい」

しづしづと離れましたよ。

至福のもっふもっ布団は実は別のミニもっふもふ達の専用布団であつたりするのだ。

「ああ、気にするな子供たち。あの変人はあとで適当にすまきにしておくから、おまえたちはしっかりとミルクを飲んでよくお眠り」
強く賢く育つためにな。

愛情溢れる声で、我が子

狼族の幼児たちに告げたブラフイ

「ルビナは幸せそうだった。

まんまみーあ、あたしにもその愛をください。

以前されたお仕置きに対し「簾巻きかよ、まじかああああああ」などと叫んだせいで、定着してしまったお仕置き方法の存在に涙が出た京香だった。

ポチお母様の巢には、なぜか藁で編んだ簾が数枚常備されているらしい。

「どんだけ準備万端ですか、まんまみーあああああー！」

本日の覚書

ブラファイールビナ

狼族（聖狼族・魔狼族・妖狼族）の真祖。

銀白の絹のようなもふもふ毛（長毛）が目印。

母性に満ちあふれた男前な方。

過去に京香は「のけのおつかさまネ申そのまんま」と評したそうなの。

狼族自身が古い一族。

聖魔に属さぬというよりも、聖魔

に分化する一族といえる。

京香をつねに「変人」と呼ぶ。

真実を善しとし、虚言を厭う。野生の本能で嘘を見抜くよ。

呼び名は真狼、大神、真祖、母上、ルビナ、一部の変人からは「まんまみーあ」「ぼちお母様」と呼ばれる。

その鋭い爪と牙は、時折怖ろしいらしい。

稀に蹴りが出るので要注意。

34 彼女と彼の、もっふもふ！ 其の二

基となる種族の母たる狼の名を、真狼しんろうと呼ぶのだそうだ。たった一人の偉大なる狼から生まれた種族は、主に3つ。

聖なる一族が一つ、聖狼族。

魔族の一角たりし、魔狼族。

属を持たぬ、未分化したままの妖狼族。

ようは、生きるために必要な主成分の割合がちがうだけってことだよ？

身も蓋もない略し方ですこと。

説明してくださったレイちゃんは呆れておりましたが、否定はされませんでした。

聖狼族は聖気がなくては狂い死に。

魔狼族は魔気がなくては弱体化。

妖狼族はいえ、

繁殖をおこなえぬ一代限りの狼た

ちの総称であるということだけ。

母たる狼ヒトは、喪われゆく子らをそれでも愛している。

「変人、土産は持ってきたか」

「うい、ポチお母様。ご覧くださいませ!」

べらんと広げたのは、こぞって肉屋のおっちゃんからゆずり受けた骨の山である。

肉屋のおっちゃんには、毎回毎回何につかってんの、あんた。な
どと疑問の眼で見られてしまう。

髓が好きなんです、髓が。

真剣な目で語った後は、逆に褒められるようになったが。

がりごりがりごりと丸ごと頑丈な牛骨を噛みちぎって喰ってるポチお母様の姿は決しておっちゃんには想像も出来まいよ。

「変人。それで、今日は何をしにきた？」

食後のケアは大事です。

ということ、まんまみーあのとても大きな歯をこしこしとブラ
ッシング。

歯磨き粉はきらいだと言われるお母様なので、お茶でこしこし
ある。

お茶のカテキンだかには殺菌作用と消臭作用があるらしいのだ。
いやがるポチお母様にいやいやお口を開かせてこしこしするので
ある。

まれに蹴られそうになるのでそういつときは避難する。

おかあさまってばご機嫌ムラはげしいんだからなあ、もう。

「肉屋のおっちゃんから余った骨が溜まってるから貰いにこいやと言われたので、配達しにきました」

大量の骨はさすがに異臭を放つことになるので颯爽と届けに来たとも。

ゴミ袋3つは多いって。マジで。

「まあ、助かってはいるからいいか」

ぼつりと呟いたポチお母様。

なんだ、ついに待ち望んだデレ期か！！

やはりいつかはと信じていた至福のデレ期が今ここに来たのか！

！！

「土産の一つも持たずにこようものなら、簾巻きにした上に子供たちの遊び道具にでもするところなのだしな」

……まんまみーあ。ツンデレいらぬ。デレだけでいいよ（泣）

簾巻きにされた上に、元気な盛りのミニマムもっふもふたちの頭突き攻撃は胃に来る。

連中の遠慮のかけらもない全身タックルがちょうど京香の下腹部あたりにやってくるのだ。

マジで勘弁してください。

吐くわ。

ミニマムちびたちには悪気はないよ。でも、容赦もないよ。
まんまみーあ、騒してやってくださいませwwww

35 彼女と彼の、もっふもふ！ 其の三

「おまえは何ものだ」

威嚇するように、その偉大なる狼はむき出した歯もそのままにそう問うた。

後ろに眠っていた子らを守るように、その逆立った尻尾で覆いながら。

「あたし…？ あたしは、……あたしだよ？」

歪んだ表情で述べた京香の答えを、威嚇したままの猛母が険しい表情で述べた。

「貴様が、ただの異界渡りだと？ ……笑止！」
そのような筈がない！！

初めて出会った真の狼は、そう断言した。

「…おまえたちはいつまでそう在りつづけるつもりだ、変人」
ポチお母様の懐でお腹がくちた小さな妖狼族たちが眠りについて
いる。

つい先ほどまで、京香と『ボールひろってこーい！ 歯で破つたら貴様を投げール』ごっこで遊んでいたため疲れたのもあるのだから。
う。

正直、あたしの方が疲れてると思うんだけどな。（喜んで投げるっていつてくる連中の相手は疲れるよ）

「……ん？」

そうだねえ、出来ればずっと。

ポチお母様が、子供たちの耳目がないときに確認してくることに
なっていていつも一緒だ。

そして、それに答える京香の回答だっていつでも一緒だ。

変わる筈がない。

「 変人。よく覚えておけ、変化は必ずやってくる」

おまえが望む望まぬは関係なく、な。

ポチお母様は毎度毎度容赦がない。

いつでも人のことを【変人】呼ばわりしてくる時点で、お母様の
容赦のなさはわかるうってものだが。

「 生きるものが不変であろうとすることなど、決して叶いは
しないのだよ」

真摯な声で告げるお母様はいつでも真実だけを求めている。
嘘と虚無にまみれていた京香に対してさえも。

『あたしは、あたしだよ』

告げた少女に、直感で全ての密かごとを見抜いた大神は宣告した。

『では、そのあたしとやらは、どんな定義によって人のうちに入るつもりだ。』
変わりし人よ』

希望さえも許さない、そんな苛烈な母の視線は酷く痛い。

たとえ、それが子供たちへの愛から生じるものだと知っ
ていても。

「でも、今はまだこのままがいいよ。ポチお母様」

泣いた少女の涙は、柔らかな大神の毛並みへと吸収された。

「愚かだな、
世界のいとし子よ」

呆れながらも、母たるものは涙が乾くまでは静かにその胸を貸して
てくれていた。

イスラン、ごめんね。あたしはきつと君の友にふさわしくはない。
だけど、ごめんね。

今はもう、君の支えを失うことさえあたしは怖いんだ。

...しめな。

36 彼女と彼の、誰何 其の一

「彼女と彼の、誰何^{すいか} 其の一」

京香が初めてこの『オ・ルピス・リレガセツト結ばれない世界』に訪れたとき、目の前にいたのは黒髪金目の男の人だった。
綺麗な白い膚をもつ彼は、まるで美しい人形のようにも見えた。
驚きと警戒を視線と仕草で見せたその人は、混乱している京香に向かつていったものだ。

「何者か」と。

それはきつと正しい問いかけで。
でも、答えるのは難しい問いかけ。
だってそうでしょう？
自分が誰なのかなんて。
それを知りたいから生きてる人はたくさんいるんだから。
自分が何者なのか。
その答えが見つかっていない人なんてきつとたくさん存在してる。

今もし、あなたが誰で、あたしが何かって訊かれたら。
「イスランは魔王さまで、あたしはその友達！！」
そんな風に答えることは簡単なんだけどな。

京香の耳には小さなピアスが付いている。

元の世界では、黒ガラスの玩具だと思われるが本当はそんなものじゃない。

呪をかけた術者と被術者の血を合わせることで生じる、約束の石。

黒章石だ。

術をかけたのは、この壊れた世界の魔王陛下。 イスランニア

ルゥジエイク。

術をかけられたのはあたし。 異界より訪れた来訪者

篠原京香。

どんな内容の術かと訊かれても、あたしにはよく分からない。

その手のことは叡知の魔女と呼ばれてるレイちゃん詳しいんだけどね。

『……………知りたいんですの？』

うふふふふ。

……………銀の鞭を両手で握りながら笑うレイちゃんの顔が怖かったあたしには訊く勇氣はありませんでした。

あれだね、レイちゃん。

おバカに教えるからには根性出して最後まで聞きやがれよコラってことだよね、スパルタ教育の殿堂入り魔女さま？

そのまま素直に『知りたいです』などと言おうものなら、銀の鞭で調教されながら脳味噌を痛めつける作業が一昼夜展開されそうな気がして諦めたのは……………根性無しのあたしでした。

だって、レイちゃんってあれでイスランの教育もこなしたとかい

う名教師さまですよ。

魔王の先生ってどんだけって話ですよ、こわやこわや。

…一言でいうのであれば、『相對護法の呪』よ。……『共生の呪』ともいうわ。

レイちゃんはそう説明してくれた。

おバカなあたしにはよくわかつてはないんだけど、ただその後にあったいろんな過程から判ったこともある。

あたしは当然だけど、この異世界のことを何もしらなかった。それでも言葉に困ることだけは一度もなかった。

同じようにイスラムもあたしが持ち込んだ漫画や小説、DVDなんかを見てて、言葉に困ってる様子はなかった。

こちらの世界にはない概念や風習なんかを確認されることはあったけどね。

同じようにおススメの漫画本を見せようとしたら くんには無言でポイされたけど。(異世界の言葉なんぞ判るか！ と言われまして)

あの呪によってイスラムはあたしの脳内の言語野のある程度を把握できるようになったのだと考えることができる。

そして、あたしも。

これで記憶をつかさどるといわれてる海馬や前脳にある人格を形成するとされる連合野にもアクセスされてたとか言おうもんなら、あたしはマジで奴を絞めるよ。

女性のプライバシーを大切に扱えといつも言っているのは伊達じゃないんだぞ、こら。

ルビの候補は、翻訳サイトさま利用で。

ワールド・ア・ナツタイド (英語) 表記: World ar
e not tied

オルビス・リレガセット (ラテン語) 表記: Orbis re
ligasset

マイマエイ・オルシドット (フィンランド語) 表記: Maa
ilma ei ole sidottu

ヴァ デナ・イキ・ブンディット (ノルウェー語) 表記: Ve
rden er ikke bundet

結ばれない世界。 ∴ 途切れた世界。

37 彼女と彼の、誰何 其の二

「彼女と彼の、誰何^{すいか} 其の二」

守護をやるう。

おまえのために。
我らのために。

「この愛しくて哀しい世界のために。」

守護を贈ろう、京香。

この壊れた世界オ・ルピス・リレガセツトの魔王から。

訪れた、おまえに。

最大の祝福と、最高の呪縛を 贈ろう。

黒い黒い黒章石は、時折色を変える。

黒から紫紺へ、紫紺から赤紫へ、そして鮮血の緋へと。

科学の実験だったかで、ルミノール試験をみせてもらったことがある。

消毒した針で指を突いてメモ紙に自分の血をぺったんこ。その上から霧吹きでつしゅつしゅかきしゅかきと試験液を噴霧したのさ。先生の合図でカーテン閉めた教室の暗闇のなかで発光した血の色は、なんていうか地味に感動したもんだった。

終わった後に嗅いだ匂いが昔懐かしいアルコール消毒液の匂いにするよねとか思ったら、「そりゃこれ消毒液だもん」とか先生いつてくれたけど。

実際には、それ以外にもいろいろと入ってたんだけどね。

赤い赤い血の色は、活性化した絆の証。

君の心が浸透してくるよ。

名さえ付けられぬような感情が、あふれるように身体の中へと満ちあふれてくる。

ふわふわと軽い感情。

どろりと底を浚うような重い感情。

匆ねるような暗い感情。

もうすでに選択し終えたはずの過去の思い出さえもが蘇っている。
生き解っている。

いつもならキミの心と体の奥底に沈澱して混濁したまま鎮静されてる言葉にならぬ思いは、その時だけ色鮮やかに浮上して、綺麗に仕分けされた感情の棚を壊すんだ。

破壊と絶望がちらりとぞき。

希望と祈りがその裏に潜んでいる。

いつもはただぼんやりとやり過ごしている雑多な感情がちらぼらと浮上して、火花のようにくつついては散っていく。

心は満杯。

ようやくのように呑みこんだ感情は、世界に比べれば矮小なこの肉体のなかで昇華されてくれるのを待っている。

暴れておどける感情たちは、やがて再び沈むだろう。

ぼつと何も考えずに、肉体に訪れた感情の嵐を遣り過ごそうとしている。

考えることは無意味。

否定することは無理。

だって、感情なんて否定すれば否定するほど暴れる生き物だって。

イスラン。

キミも知っているからね。

蓄積された世界の知識は。

イスラーム。

君に、どんな祝福と呪縛を与えたんだろう？

38 彼女と彼の、誰何 其の三

「彼女と彼の、誰何^{すいか} 其の三」

「……なにが目的なの？」

手渡された黒章石は、この異世界に訪れるための支点となった。自分の血と、異世界の魔王の血。曖昧な境界を跨ぐための補助とするには、最高の導具だった。

「そつだな。 私が魔王^私であることがきつと全てだよ」

陽の光も当たらぬ魔王城の一室で、結ばれぬ世界^{オ・ルピス・リレガセット}の8代目魔王イスラン「アル」ジェイクはそう言った。

その言葉は、混沌と慟哭で渴いていたあたしの心にひたりと沁み入った。

イスラン。

キミはあたしの友で、あたしはキミの友。

言葉にしたらたったそれだけのこと。感情にしたらすぐく不透明なことを。

キミは 自然な形で与えてくれたね。

「じゃあ、一緒だね」

「…ん？」

差し出した手は無駄にはならなかった。

「あたしも、篠原京香あたしでいることが、きっと全てだから」

何もかもが違うあたしたちは、きっと。

一番大切なことが平等おんなじだったんだ。

問いは、一番初めに。

「おまえは何者か」

時は巡り、世界は重ねられて。

いつか、答えは照らし出される。

応えは、いつか符合する。

ねえ、イスラン。
私のお友達。

キミと過ごす、この場所が。

きっと、わたしは愛しいんだよ。

貴方が選んだその関係が、別のなにかに変わる日が来ないことだけを祈っている。

ねえ、イスラン。

貴方は、……私を「」とは、呼びませんよね？

もはや祈る神もない世界せかいで、願っているの。

貴方は魔王。

わたしはそのご友人さま。

そんな素敵な解答を、わたしはずっと抱えていたい。

優しく哀しいこの世界の片隅で。

39 彼女と彼の、マイナスイオン 其の一

「彼女と彼の、マイナスイオン 其の一」

「やっほー」。

……って叫びたいわけですよ、山に来たら。

「さあ、皆様。

「ご一緒に。」

「やっほー!!!」

【……………又シ。……………毎度毎度、同じことをして飽きんのかえ？】

ため息をつくような念話が脳裏に届いた。

「まったく以って、飽きんな!!!」

「しっかりきつぱり。」

本音で返事をしてあげたよ。

だってさ、日本にはなかなかないよー？ こんな原生林のある山なんてさ。

本日の拠点は、『みそ楔せの宿』。

極地の一つであり、日本の大屋久島よろしく大原生林の並ぶ場所
であります。

今日もストレス貯めた現代社会の戦士が癒しを求めて訪れました。

「イオン…… マイナスイオンが足りない……」

我が独り暮らしの玄関でどさりと置いた荷物の上に倒れ込み、叫んだ昨日。

マイナスイオンといえば、滝。

マイナスイオンといえば、森林浴。

マイナスイオンといえば……。

「コダマっちの森しかないよねー」

三段論法ですらない結論を見つけた京香が耳につけた黒章石のピアスを媒介に、転移座標を設定したのが今朝。

京香が怖ろしいのは転移座標とよんでいるものが数値的なものではないことにこそあるだろう。

そう、彼女は数値ではなく、あくまでも本能的な感覚によってのみで座標軸を認知しているのである。

……これを聞いた叡知の魔女であるレイクシエル「オッドは驚きを通り越してさじを投げた。

何に對しての放置かだと？

勿論、篠原京香という不思議生命体の理解についてである。

ぶっちゃけ、己の想像の範疇さえも超えた存在であると認識したということだ。

叡知の魔女の初敗北がこのような形で為されるとは、どこの誰にも思われてはいなかったはずだ、きっと。

かくして、今日も篠原京香は世界を渡る。

結ばれぬ世界を目指して。

木の葉が揺れる。

風にあおられて、髪が舞った。

「うわああ。今日はご機嫌斜めなのかね」

主どのは。

訪れたその場所ですい眩いてしまった京香だった。

【キョウカ】

【キョウカ…キタ】

【キョウカ…】

【ウカ…バカ？】

【オシエ…ル。…又シ、】

囁くようなコダマたちの声がした。

「よし、いい度胸だ。たと言いい間違いだろつがヒトをバカなんぞ
と言い放ったチビはどこだ。しっかりと世界の果てまで浚ってやる
うな」

大丈夫だ、怖くないように可愛がってやるうな。

きらりと京香の目が光る「楔の宿」での一瞬だっ
た。

40 彼女と彼の、マイナスイオン 其の二

「彼女と彼の、マイナスイオン 其の二」

ざわざわとゆれる緑の影。

大樹の枝葉は天に焦がれるように伸びあがり、されどその根は地にもまたしつかりと食い込んで根を巡らせている。

「主さまぬじは今日も美しいね」

京香の廻した腕ではとうてい廻りきらぬ幹の太さに、安堵さえ覚えながら彼女は呟いた。

【……………京香。……………久しいの……………】

その体長凡そ100M強。メートル

根まで含んだなら、本当にどんだけあんだらうかねえ、この主さまは。

ゆらゆらと風に揺れてる新しい若芽がなんだか可愛かった。

ふふふ、春だねええ。

マイナスイオン。

主に落雷や滝の傍で発見されるというのが通説だ。森林浴でも発見されるといっものはもっともよくわからん論理である。

水素が分解されてプラスイオンとマイナスイオンに分離して発生してるとかいうことだが。うむ、よくわからん。

実際問題、それが本当に健康にいいのかどういっもんなのかとかそんなことも判ってはいないらしいが。

なんですかね、鶏と卵どっちが先かみたいなものなんでしょうか。癒されるからマイナスイオンがあるのか。

マイナスイオンがあるから癒されるのか。

まあ、実際のところ。

「実際森にすれば癒されてる気がするんだから、それでいいんだい！」

えへんと胸を張るのが最近の京香の主張なのだ。

【キョカ……】

【キョカ……キョカキョカキョカカカカ】

【カンジャ……】

【ジャガゾク……】

【ク……クラクラクソウ……】

「…人の名前ですりとりすんな！ コダマども……！」

【【【キョカカカカカ怖い】】】

お黙り。

そしてこんな時だけカタコト止めんな。浚うぞ。

【………又シ。…若木どもをいじめるでないよ……】

苦笑にも似た念話が届いた。

だが一つ言っておく。

いじめてなんかないやいっ!!

すってーはいてー。はい、ポーズ。

マイナスイオンだかなんだかよくわからないが、森林浴ときたらやはり深呼吸だろう。

我が家のルールを実行した京香だった。

「やっぱり森の空気はうまいな!!」

普段、排ガスのなかで居住してるだけにそう思う京香だった。

【……褒められたのならは礼を言うべきか?】

疑問マークを念話で伝える主様には、愛すべき愛嬌がある。

愛してるぞ、マイツリ!! (私の樹)

【……ふむ。……その名称は光栄というべきかな】

熟考している主さまはとても可愛く面白く、そして優しい私の大切な樹ですとも。

【キヨカカ】

【キヨカカ】

【キヨカカ虚か主^{ぬし}】

【身さま又シヨブキヨカカ虚か】

【キヨカカ】

【キヨカカ】

【虚か居か許可きよか】

【【キョウカ、虚か】】

「……………主さま、コダマどもをめちゃくちゃ潰したい心境なんです
が、…許可頂けるかしら？」

韻を踏むように呟きながらくると遊んでいる連中を踏みたい
京香だった。

【もちろん。 駄目じゃ。】

全力100%の笑みを混ぜた念話が漂ってきた。

【【キョウカ！ 不許可！！】】

……………又シさまのイケズ。

そして思う。

嬉しそうに声をそろえて叫んだ若木のコダマどもにはさりげなく
新聞紙を頭上に広げて置いてやるつか。(根暗？ 知ってる)

まあ、そんなことしたら又シさまが怒って、突発的雪崩とか雷と
か招きそうだからしないけどさ！

こちとら、だてにチキン属性名乗ってないやい！！

4 1 彼女と彼の、マイナスイオン 其の三

「彼女と彼の、マイナスイオン 其の三」

昔、まだ学生のなかの学生。キングオブザ学生の義務教育時代の頃の話だ。

今でも心の隅に残っているお話がある。

感動したとか面白かったとか怖かったとか超絶笑わさせてもらったとか。

別に、そんなもんじゃなかったけどな。ただ。

物語りのなかで、そのお爺さんはきつとすごく平凡でも偉大な人生を歩んだ人で、その孫はきつと今からそんな平凡で何処にでもありそうでもどこにでもないそんな人生を迷いながらも焦がれながらそのお爺さんのような生き方をしたいこうと思っただろうなとか思っただ。

もう、その本の名前も、書いた本の作者も忘れたそんな一冊の物語り。

昔むかしに読んだ、裏山にあつたたつた一つの木を「俺の木」と呼んで生涯の半身と決めた少年の人生の終わりに触れあつた、そんな少年だつたお爺さんの孫が語り手の物語り。

家族でもなく、同種でもなく、けれど一緒だつた。

戦争を経験して、消失を経験して、家族を手に入れて。

苦も楽も量る意味さえ失うほどに生きた老人の生きざまの物語り。

「…うん。そうだね」って。

読んだ後に、ただ頷くことしかできなかつたそんな物語。

そんな物語りが、今でも心の隅に残っている。

「 主さまは人をどう思う? 」

【 …? 】

「 灯と熱を求めて木々を断ち、利と財を求めて山を掃^{はき}つ。
ヒトをどう思う? 」

京香が訊いた。

自身が主さまと呼ぶことに決めた、『^{みそね}楔の宿^{やど}』の最大最古の神なる木。

【^{オン}隠】とのみ呼称される、この地の木々のネットワーク化した意思の 統括株。

地に張り巡らされた木々の根によって、この大地の全てを見知っているとされるとされるその存在に尋ねた。

けれど、その答えは…。

【 ナニモ 】

なんともそっけないものだった。

「 何にも感じないの? 」

【 …… 我々は…我々で生きるだけ…だ。京香……。 ……人のこと…は…人がする…だろう… 】

時折種を運んでくれる生き物でもあるから、それで十分。

「 ふーん。そうか 」

そんなもんかー。

ことんともはや強固な鉄板のごとく硬化したその幹の外皮に頭を寄せた。

地の上にまで盛り上がった根っこの近くに頭をよせると、幹の中をながれる水の音が聞こえた。

「…でも、私は主さまたちがいてくれるとほっとするよ」

その静かな脈動を聴きながら、そう呟いた。

「春が来て、冬の間は渴いていた幹や枝から新しい瑞々しい枝が芽生えて、ときには枝までが色づくように春を携えているの」

【……………】

「色鮮やかな花の前の蕾だけじゃない。梅や桃、桜の枝枝が

ほのかに赤みを帯びだして、淡雪のような雪の中で春を待っている」

【……………】

「白い雪のなかで、春を待っている」

【……………京香……………】

「春を待って、いるの」

【……………京香は、……………ほんに……………愛しき……………よ……………】

主様の放つ念話は、まるで水のよう。

この身を流れる、愛しく憎い、水のよう。

プラスとマイナスに分かれたならば。

いつかは巡り会い和合するのが、その定めですか。

……………姉上さま。

42 彼女と彼の、マイナスイオン 其の四

「彼女と彼の、マイナスイオン 其の四」

ものいわぬ木にもまた微弱な意思のごとき波長があると言われ出したのは、近年のことだ。

もつとも、一〇年どころか一年ひと昔なんていわれるご時勢のことだから。

既に近年などと称することは間違っているのかもしれないが。

【……………来たか……………】

「わざわざ人を呼び出すほどのことか。楔の宿守やどもりよ」
「こちらしるもりも、それなりに城守の勤めがあるというのに。」

不満げに呟いたのは黒髪金目の男。

【……………現在、魔城に最も近い人族は……………まだあと3日デリばかりは……………到着出来ぬ場所におる……………】
ならば、そこまでも支障はあるまい。

地に根を張り、地上にある全てのものの情報を得ることのできる樹の姿をした別の存在を相手に、第8代魔王イスラン「アル」ジエイクは少しばかりの苛立ちを感じた。

「それはそれは。ご考慮頂き光栄だともいえばよいか？

《おんなぬし隠名主》どのよ

隠されたもう一つの存在の名をあげるほどには。

【……………これはまた8代どのは剛毅な。……………真名ではないとはいえども、彼の方の裏名を呼ぶなど……………】

薄皮一枚程度の自我しか持たされぬ我への当てこすりで見つめるには僭越というもの……………。

風が黒雲を呼びだした。

「まあよい。……………それを渡して貰おう。……………このような場所に女子を放置しておくのもあんまりだからな」

イスランは手を差し出した。

その手の先には、背丈の低い若木たちが集って藪となった緑の茂みがあった。

【……………キョカ】

【……………キョカ、寝てる……………】

【……………キョカ、ないた……………】

【……………キョカ、また泣きながら眠った……………】

【……………主さま、トリイドルさま。……………渡してよい？……………】

【……………キョカ、このごろよく泣く……………何にも言わずに、よく……………】

泣く……………】

【【【【【……………キョカ、護ってくれるひとじゃなきゃ渡したくない】】】】】

びくり、とイスランの差し出した手が震えた。

小さなコダマたちの母体である若木たちが隠しているのはおそろく眠っている少女だろう。

少女とイスランが出会ってから、4年の年月がもう少しで経とうとしている。

今度やってくる、「蓋おほいの幻日げんじつ」が訪れたなら。

少女がこの世界を訪れるようになって、丸々4年が経つことになる。

「いい賤トライドルだな。楔トライドルの宿守よ」

俺がアレを護らぬとでも言つつもりか、この若木どもは。

少女の友である魔王は笑みを浮かべながら、その双眸を若木に向けた。

魔王の力ある視線を向けられた若木たちが言葉にならぬ悲鳴をあげたことが、楔の宿守である樹王トライドル「隠」スフガンが感じ取った。

【やめよ、城守！！……子らは案じただけじゃ！……】
又シらのことに触れるつもりで囀ったわけではない！

その根を張る大いなる存在を共に分かっ子供たちを護るために、
トリイドルは魔王を制した。

「ふん。わかつてはいるがそれでも不快だ。……宿守、己
の仲間が大事なら相手を見定めるだけのことは躡っておけ」
次はないぞ。

【……そうしよう】

イスランの言葉に樹の王は頷いた。

若木たちが樹王の意志に従い、その枝葉を開いた。
眠りについている少女が現れた。

「……またお前は寝たのか。京香」
一体、何がおまえを夢に運んで行くのやら。
呆れながらも、魔王は跪くとその少女の身を抱えた。
宙から取り出した絹布で京香の身を包みながら。

【……8代よ。この娘に守護を与えたのはお主じゃな】
樹王が呟いた。
「そうだ」

意識を失った人の身体は、意識のあるときに比べて格段に重い。そんな少女を腕に抱いたというのにふらつくことなく立つ王は、問いに否定することなく頷いた。

【 それは、……娘のためか？ それとも、この世界のためか？ 】

今度の問いへの返事は、返されるまでに時間がかかった。

イスランに怯えたコダマたちは何も言わずに沈黙し。

問った樹王は、もはや紡ぐ言葉を全て言い終えていたから。

唯一、眠る少女の健やかな寝息だけが聞こえた。

「 決まっているだろう、宿守 」

そんな少女の寝顔を見つめた後で、魔王は答えた。

「 全ては、 俺のためだ 」

空を覆う黒雲が、この地に到来した。

雨が降る前に。

雷が落ちる前に。

電子のイオンが分かたれる前に。

お家へ帰りましょう、お嬢さん。

優しい、優しいお家へ帰りましょう。

誰も泣かない、あなたの安息の場所で。

優しい眠りにつきましょ。う。

森へは行かないで。

雷を待たないで。

滝の傍では、水がながれている。

誰かが泣いているから。

マイナスのイオンなんて、求めちゃいけないよ。

本日の覚書

トリイドル⇨隠⇨スフガン

樹の王。

極地の一つ《楔の宿》の守り。

呼び名は、樹王。樹木の王。宿守。トリイドルさま。感の守り。身さま。

京香は「主さま」と呼んでいる。

『楔の宿』の最大最古の神なる木。

【オン隠】とのみ呼称される、地の木々のネットワーク化した意思の統括株。

地に張り巡らされた木々の根によって、この大地の全てを見知っているとされる。

実はとある存在の表面意識にすぎないとされている。《おんなぬし隠名主》と隠語で称される存在は眠りについていとされるとされているし、たぶんずっと眠ってる。(起きられる方が困るので)

ただ、その存在のおかげでトリイドルの意識そのものもまた、いろんなことへの感が発達しており、情報や知識などを多く握っているとされる。

基本的には、世の中のことには無関心。

京香には興味を抱いている。

好奇心は身を滅ぼすにならないようにお気をつけくださいね、主さま。（苦笑）

実は魔族が生まれる前からの存在だから、御老体なんだぞ。

魔族でも聖なる一族でもない、古族コあるいは原族ゲンと分類される。

コダマ。

若木の意味体。

ミニマム人形。

カタコト喋りが基本だが、たまにそうではないときがあり、京香はひそかにこいつらわざとカタコトやってるだけじゃねえのかなどと勘繰られている。

真相は不明。（笑）

【彼女の

眠り】

（前書き）

閑話になります。

【彼女の 眠り】

【彼女の 眠り】

いつも、夢の中でその人は笑んでいる。
おかしな話だ。

あの女は笑みよりもむしろ怒りと無を表わすような表情でそこにいたのに。
その人は笑んでいる。

黒銀の錫杖が振り下ろされる。
翻るその服の裾は、黄色の色に染まっていた。

【 ああ、終わってしまった】
嘆く人は、振りおろした杖へすがりつくように座った。

見る夢はいつも暗闇から始まる。
暗闇の中、女とも男ともつかぬ格好をしたその人はそう呟く。
笑みを浮かべて。
ありえぬ話だ。

彼女がこのような事態になったときに笑みなど浮かべるなど、どう考えてもありえぬのに。

なのに、夢の中では事は器用にも不思議を見せる。
彼の人の安堵さえもにじませた頬笑みを。
美しいばかりの女性の笑みを、脳裏の奥へと沁み込ませるのだ。

【何ゆえだ。…なにゆえ、ことはこう相成った。天上の神々よ】

嘆く人は呟く。

その四肢を錫杖立てた縁へと立たせて、天を仰ぐ。

【私に、これ以上の何を成せといわれるのか。お教えください】

父よ。母よ。

その瞳からは涙がこぼれていた。

道を迷った子供のように。

父母を探す、子供のように。

彼の人は笑みながらも涙を零して呟いた。

【それとも、これが私の贖いの日々の終わりのときなのでしようか】

再び座りこんだその人はその背を黒く見えた幹へと預け、俯くように足元を見つめた。

その先にあるものは、錫杖さしたる箇所。

大いなる根が広がるその元たる場所に湧きいずるは、神々の宝。なのに。

【最後がこれだというのなら、私は終わり許される日など来なくてもよかったのに】

零した涙が落ちた場所には、もはや何も残ってはいなかった。

めて、お願い)

(や

振り仰いだその人は、錫杖を今一度振り上げる。
上がった錫杖は今一度、振りおろされて。

ねがい、やめて。もう見せないで)

(お

再び、持ち上げられることはなかった。

夢のなかで、あの人は笑んでいる。
行ったこともない幻の空間で。
その人は嘆いている。

夢だと知っている。
これが夢だと知っている。
それでも。

この夢は私にはつらい。

あの人が嫌いじゃなかったから。

だから、お願い。

(あの人を苦しめないで)

それは、彼女の夢の過去。

彼女が堕ちた影の未来。

暗い暗い闇色の夢の中にもう一人の出演者がいたことに、京香が
気づくことはなかった。

4 4 彼女と彼の、極光 其の一

「彼女と彼の、極光 其の一」

太陽暦についての話をしようか。

太陽暦とは暦と季節を一致させるために、4年に一度の閏日を挿入する暦だ。

太陽が黄道上の分点と至点から出て再びそこを通るまでの周期の事を回帰年といい、またの名を太陽年と称するのだという。

地球という惑星が自転していることは幼い幼児も知ってる常識だが、その自転する性質のために回帰年には歳差運動による各年の違いが生じる。

回帰年よりも20分ばかり長い恒星年は太陽暦には意味をなさない。

なぜならば、いくつもある太陽暦の全ては回帰年をもとに定められているからだ。

最も人類が信頼してきたとされているグレゴリオ暦は、400年に97回の閏日を設けることで暦と季節のずれを約3320年に一日の誤差とすることに成功しているとのことだ。

…すげくね？

当時の西暦2回分ませる精密さだぞ。

西暦1582年のローマ皇帝と当時の学者たちには本気ですげえと感動します。

おバカさんでも共通認識の塊である暦がないと今日のアニメの予約もできないってことは知ってるからねえ。

ありがとうですよ、ローマ皇帝グレゴリオ13世どの。

「覆いの幻日？」

「そうよ」

その日の居場所はレイちゃんの研究室。

こぼこぼと部屋の隅々で抽出されている霊薬・魔薬・呪薬どもが小さな産声を上げてる場所だった。

「……閨日のことかな？」

「……？ ご友人さまの世界にもそんな日があるのかしら？」

少し興味深いわね。

紫がかった銀髪の魔女は、笑顔でそう聞いた。

「……うんまあ、同じかどうかはよく分からないけどね」

なにしろ、風習も儀式も世界観も違いますから。ええ。

……むしろ、同じな方が変だと思う。

頬がひくつく京香だった。

ちなみに、閨日のある年はオリンピックが開催される年です。

深夜遅くまで大人も子供もTVに張り付くその開催期間。

まあかせて、萌えも燃えたり趣味のおかげで徹夜ばっちこいだ。

録画しながらも垣間見るスポーツの祭典観賞、ばっちこいだ。

「……萌えってなにかしら？」

「……流しておいてください、お姉様」

今さらレイちゃんがあたしの心のモノローグを読みとれちゃうびつくり魔女さんだということに驚く気はないが。

一般人にその単語を覚えさせるにはまだ抵抗があるんだ。

萌えは萌えだ。忘れるな、これは一般用語じゃないんだ！
だから頼む。

一般人の見える場所に羅列してくれるな某新聞ニュース掲載者たちよ。(涙)

一応、基本的には隠れて仲間とにまにまにましていただけの私はチキンなおたくです。

「……おたくってなあに？」

「レイちゃんサマ、頼むから流して。ながしてくらっさああああああい！！！」

頼む。

一般人にその単語はつぶやいてほしくはないんだあああああ。

血涙垂れ流して叫ぶ私の行為は訓練されたオタクとして間違っていないったら間違っていない！！！！

45 彼女と彼の、極光 其の二

「彼女と彼の、極光 其の二」

極地にありしは極光たり。

その光、世界の存在の放出なり。

極地と呼ばれる場所に共通される現象がある。

すなわち、極光^{オーロラ}だ。

空を覆うように溢れるその光は、この世界の不思議を語るようだ。

地球におけるオーロラの原理はいろいろと複雑なので省くが。

蛍光灯だと思つてほしい。

短い電磁波の照射によりエネルギーを得た電子が元の状態に鎮静される際に余分に得ていたそのエネルギーを電磁波として放出するという原理。

そう、極光はエネルギーの拡散される姿であるのだ。

「イスラン。 極日はいつから始まつた？」

ある程度の規則性をもって極地に生じる極光。

その極光の現れる日を、この異世界のものたちは【極日】と呼ぶ。

そして、いくつも存在する極地の極日が重なる日。 余剰

なエネルギーを拡散する周期が完全に重なる日の事を、 「覆

いの幻日」と彼等は呼ぶのだ。

世界を覆う幻の日。

4年に一度生じる

世界のエネルギーが拡散される

日。

「…………… この世界の神が去り、世界が滅びに進んだ頃からこの世界の極光は強まったのではないの？」

尋ねた答に返事は帰らなかった。

ねえ、神様。

キミがいてくれたなら、この世界はもっと優

しい世界になってくれたのかしら。

私にではなく、彼等にとっての楽園に。

北欧における神話のなかに戦乙女の物語りがある。^{フルキューレ}

彼女たちは、戦場の戦人の士気を鼓舞し、勝利を願う。^{ラグナロク}

死したる戦士は黄昏の日が来たるまで、その戦士の館で魂を休ま

せる。

勇敢な戦士は、いつかくる世界の終焉にて戦う日を待ちて眠る。

最後の刻を待つて。

「イスラン。 戦乙女の鎧が見えるよ」

「……なんのことだ？」

「見上げるのは魔王城の上空に広がった極光。そう。」

オーロラは、北欧にて戦乙女の鎧だと信じられていたのだ。

戦え。

戦え、戦士たちよ。

生きるために、誇りを持って。

おまえたちの牙を磨け。

おまえたちの知恵を見せよ。

最後の日まで、生きるための術を磨けよ。

神々の墜ちるそのときまで。

「……… 生きることがすでに戦いだと、知っていた地域の伝承………」
「………」

空を見上げれば、光はゆるやかに囁いていた。

在れよ、と。

46 彼女と彼の、極光 其の三

「彼女と彼の、極光 其の三」

「美しいわね」

そう言ったのは氷佳の魔女《レイクシエルⅡオツド》。

「ふん。ただの現象だ。……いつかは終わるものにすぎん」

そう言い切ったのは最後の竜王《ヴィラードⅡオクス》。

珍しいことに両性体である彼は人の姿をとっていた。

極日のなかの極日。

【覆いの幻日】の日になると、なぜか竜体を保ちにくくなるのだと彼（彼女？）は言った。

「マスター。もう少しこつち向いてください。こつち！」

そんなレアな主の姿を形に留めたいと感じたらしい、その下僕……いや従僕……いやサーバ……いや、やっぱりMな下僕《ジェルムⅡコーク》が人が持ち込んだデジカメ片手ににやにやしていた。

『なんで正解あつたのに言い直すんですか！！ ご友人さま！』

いつもだつたらそんなツツコミをしてくる筈のmっちは今日は全てをスル するつもりのようなのだ。

エロテロリストと呼びたいレアな人型の姿を撮影することに集中しているからである。

しかも光属性の魔法を使つてのフラッシュもどきも多用中だ。レフ板もつてるのはどこの使い魔だ、おい。

……. どれだけ好きよ、龍人族という名の竜王親衛隊の長め。

愚問か。

S なご主人様に蹴られて弾かれて無茶な命令を下されて、尚嬉々としてその命令をこなしていく奴のことだ。

実はここまで愛されてしまったら くんこそが可哀想なのかもしれないなどと、友人たちの関係についての新しい考察を得かけた京香だった。

「ちい、メモリが！ ご友人さま、今度は是非最大MGの用意を是非！！！」

…もう、使い切ったんか。デジカメメモリ。

一応、1万枚は撮れる容量だったはずんだけど、おかしいな、あれ？

そして『散れ、どMめ』などというラ くん（エロテロリスト）によって足蹴にされて尚、満面の笑みを浮かべながらデジカメを宝のように抱きしめているジエムっちを見て思う。

変態。

冷たい視線を見せつつ、両手の指を交差させたが奴には無意味だった。

「あああ、これで俺の人生終わってもいい」
満足げに呟くのを見て思う。

お前（の人生）は既に終わっている。

七つの星は異世界にはないものの、心から指さして述べてやりたい京香だった。

……おいちゃんのライフポイントはもう0よ。（カフッ

「…ねえ、イスラン。じえむっちのあれはどうなの。男としてありなの、あれ」

まだ求愛行動中の雄とか言われた方があたし納得できるんですけども。

真横で暇そうに本を眼元にかぶせてうたた寝していたイスランに聞いてみた。

「ん……。ああ、放っとけ」

アレが奴らのデフォだ。

ねぼけまなこのイスランが返事した。

「いやまあ、らーくんは一応彼女でもある彼ですから、一応彼であるじえむっちをあっしーもといめっしーもといらっしー……。好きやっとなあ」

名犬らっしー。

「何をわけのわから混乱と現実逃避に勤しんでおるのだ貴様は」
ただでさえ阿呆なのに、更なる阿呆にしか見えんぞ。

「ほえ？」

視界の枠の中に真っ赤色が。

「あいかわらずの阿呆娘だな、貴様は」

赤眼と赤髪、それから小麦色に焼けた肌のエロテロリストがそこにいた。

「……ぎゃあああああああああ！　くんなエロリー、顔面犯罪者、くんなあああああああ」

即行で引いたあたしは、間違っていないと信じているとも。

あれ。

……進まないぞ。

お話が進まないぞv

エロリー含むSM主従のせいだというのはもうお分かり

ですねvvv

…タイトルが泣いていますな。

47 彼女と彼の、極光 其の四

「彼女と彼の、極光 其の四」

…えっと。

ええっと、あたしいまどこまで話してたっけ？

エロテロリストこと顔面犯罪者との怖ろしいまでの舌戦を繰り広げていたら何を話していたのか判らなくなった。

くそ、あのSかたつむりめ。

エロリーの癖して両性体とかわけわからん。

誰だ、あれをあんな存在にしたてあげたのは。

あれか、とつとと世界を放置して逃げた神もどきのせいか。
五年後ハゲろ。

「終わったのか？ おまえら」

ぐもぐもとおやつを食ってるレイちゃんとイスランを見た。

うん、お前も5年後ハゲロ。

レイちゃんは美しいので許す。

「うふふ、ご友人さまってば優しいのね」

ふつくしい笑みで美女が笑った。

「魔法の何がふつくしいんだか」

ぼそりと呟いたイスランの5年後の髪の毛が心配だ。

主に八つ当たりを主とするあたしの呪いによる効果ではなく、真横で更にふつくしく笑いながら呪詛を考案している途中であるっレイクシエル〓オッドの技能による効果を思うと。

「すまん」

やや顔色を青くして呟いたイスランに対して美女は答えた。

「なんのことかしら？」

「……」

あははははは。

レイちゃんが華麗にスル した。

イスランの謝罪を華麗にスル した。

これでは、もはや先ほどの失言を詫びるチャンスも与えられない
ということだな。

あははははは。

五年後のイスランの髪の毛の容量がどの程度に著明な減少をする
のかについての子細なレポートを頼もう。誰かに。

…できれば写真ものこしておいてくれ。

たぶんそしたら、ア ランスのお姉さんたちがいいようにしてく
れるだろうから。

ファイト！ 毛根！！

「そういえば」

エロテロリストが復活した。

「京香がこの世界に初めてきたのは、前回の覆いの幻日の頃じゃな
かったか」

懐かしげに思いだすように、彼奴が言った。

「……そうでしたっけ？」

一歩後ろに控えたジェムっちが首を傾げていた。

「いえ、そのとおりよ。 ご友人さまがこの世界へと初めて来訪

されたのは、丁度、覆いの幻日の真中だったわ」

「ラ　くんの記憶をレイちゃんが保証した。」

叡知の魔女とも呼ばれる彼女の記憶に間違いはない。

そして、間違いだらけだと称されるあたしの記憶でもこの世界に訪れたとき、幾本もの光が満ちていた記憶が残っている。

この世界より漏れいづる極光の筋。

「ああ、そういえばジェルムはあの頃　嘉穂の路　へ旅に出ていただろう。ヴィラがお焦げ料理とやらの新作をつくれとかいいだしてたからな」

イスランがどうしても記憶が出てこないじえむっちにそう告げた。

「ああ！　貴重な香米を栽培してるといふ噂を聞いて、食材の確保に出てたときのことですね！」

申し訳ありません。私としたことが。

主であるラ　くんとその義兄もどきにして魔王であるイスランにだけは敬意を尽くすジエムっちが申し訳なさそうにたそがれていた。なるほど、蹴ろう。

そう思ったのだが、その前に逃げられた。

オノレ、チートめ。（褒め言葉）

「なにしようとしてるんですか、ご友人さま」

呆れた目で言われた。

なにこの扱いの違い。

く、あたしにも敬意を尽くしてくれたっていいじゃないか。

ぶるぶると震える指で告げたところ、奴は言った。

「俺は、お残しをするやつとつまみ食いをするやつは尊敬できないんです」

…いい笑顔だった。

つい視線をそらす程度には。

「京香」

「…はい」

そんなあたしに、イスランは言った。

「もう少し我慢しろ」

お残しをした記憶はないものの、つまみ食いは十分に思いだすものがある京香にその冷静な突っ込みは痛かった。

「……………が、がんばる」

いいながらも、守れる自信はなかった。

じえむっちの尊敬なんぞなくてもいいんじゃないかなとか、心のなかの天秤が片方に寄っていった。

べ、べつに。

あ、あんだの創る料理なんか美味しくなんか、美味しくなんか…。

美味しいよ、ばかあああああああああ！！

ツンデレになりきれない京香の食欲中枢の素直な叫びだった。

48 彼女と彼の、四年前 其の一

さやさやと。

月の光が洩れいずる姿をそう形容したのは、古代の日本人々。

さやさやと。

光が見えた。

それはまるで、

抜け落ちていく、界の結び目。

「
」

「え……？」

何かに呼ばれたような気がして、空を見上げた。

白昼の夢のようだと思った。

その日は朝から仕事で、独り暮らしをしているアパートを出て燃えるごみを出して、それから電車に乗って通勤地獄に挑んだ。

駅のトイレで薄化粧の最終チェックをして、それから仕事場へと向かう。

そんないつもの日常だった。

「おはようございます！」といつもどおりの笑顔で挨拶をして、今日の仕事のチェックをする。時折おじさんたちの煙草と汗のにおいにへきえきしながら、それでも笑顔で雑務を請け負った。

いつもとかわらない日々。
なのに。
なにかが変だと気づいていた。

昼休み。

コンビニで買ったお弁当を片手に、コンクリ仕立ての会社のてっぺんへと移動する。

3階仕立てのビルだから、そんなに風も強くはない。
これは田舎のいいところかな。

そう思いながら、ぱくりとサンドイッチをほおばった。

遅れてやってきた同期の子たちと最近のTVの話をして、それから今日の夜の予定を聴く。

たまに相手の彼氏の話やら惚気やら失恋話やらが混じって、仕方ないので落ち着くまでは相手をした。

「京香は、彼氏どうなの？」

時折、好奇心の混じった女の顔をして尋ねられた。

「まあまあ」

「あ、こいつ黙秘か！」

「世の中にはプライバシー保護法という素敵なモノがございますのよ、お姉様」

「お姉様いうな！ この10代が!!」

短大出の相手がそう言って笑う。

私は、ただの19歳の小娘でよかった。

夜。

結局、友人に誘われたもののまだ酒も合法じゃない未成年なので、早々に自宅へと帰還。

気づけば、一日は終わりに近づいていた。

「2月：29日、か」

カレンダーを見つめて、呟く。

4年に一度の日。

閏日。

違和感。

「だからなのかしらね」

髪を結び直す。

化粧をし直すほどの気はないけど、それでも紅だけはさして。

動きやすい服装へと着替え、足元にはスニーカー！。

暖かなダウンジャケットを着込んで、雪も止んだ街のなかへ行く

代わりに、意識を集中した。

「これほどに、わかりやすい目印もないわ」

そう呟いて、部屋をあとにした。

目指すものは、光の筋。

呼び寄せた世界。

消えかけた、世界のなか。

覆いの幻日を迎えるのは、これで何度めだろう。
達観したかのような思いで、その極光を浴びる。

「レイクシエル。…体調はどうだ」

「陛下こそ、無理はなさいますな」

先日の環元の儀式よりまだ体調は戻ってはいらっしゃいますまい。
対と呼ぶには語弊はあるが、己の師にして授者である最古の魔女
レイクシエル「オッドがそう切り返してきた。

この大極地とも呼称される城守と授者を並立するこの極地《魔王
城》で1000年の務めを果たすものにそれをいわれるとは思わな
かった。

「これでも俺は若い。…次代も育っても居らんにくたばるわけに
はいかんだろう」

「生意気ですこと」

女の見栄かそれでも化粧は整えた姿で、レイクシエルはそう返し
た。

まあ、いまだ200も数えない若造にこのようなことをいわれて
は立つ瀬もないか。

「…にしても不思議なものだ」

「…」

「極日は不思議と体調がすぐれぬ。 守^{もり}どもの総意だ。そして、

極光を浴びると少しばかり体調が回復するという なあ、ど

う思う。《叡知の魔女》どの」

「……………」

「極日とは本来世界に祝福が巡る日とされていたはずだった。だが、
いまは 違っただろう？ 授者よ」

「陛下……」

「これは祝福ではない。祝福は消えたのだ。はるか昔、神が去ったときに」

「……………」

「悔しいことだな、己の勤めが果たせぬということは」

「……陛下」

自嘲するように話せば、レイクシエルは深く沈んだ声で俺を呼んだ。

神が去った時代に、俺は生じた。

だからこそ、それが悔しくてならない。

出来ることなら、神の居た時代に俺は存在したかった。

そうすれば、俺はきつと……。

「 日が落ちる。もうそろそろ部屋へ戻るとしよう」

「 ええ……」

物思いをやめて、彼女に休むよう伝える。

俺の去り際、彼女が俺に頭を深く下げていたことを俺は知らなかった。

「それでこそ、我らが魔王陛下でございます」

誇らしげに告げた彼女が、真実喜んでいたことも。

日も暮れたころ、野営の火が城に灯る。

そんな頃に異変は訪れた。

宝玉の間の近辺に、異様な気配が生じたのだ。

「…バカな。あの場所には何者も近づけぬはず」

焦りながらも、疲れた身体を転移させた。

この魔王城における最重要地区へと。

待っていたのは、出会い。

50 彼女と彼の、四年前 其の三

くるり。

くるりと舞う光。

来るり。

繰るりと廻る宝玉。

光を湛えし宝玉を、『神憶しんおぐの宝玉《オヴ》』という。

守られるべき、この世の神寶みたからの一。

「何者だ」

一瞬ののちに宝玉の間へ身を映したイスラン「アル」ジエイクは、招かざる先客に対してそう述べた。

魔王城の奥深くに存在する宝玉の間には、魔王以外の存在が訪れることはまずありえない。

なぜならば、その場所は神聖なる神寶が安置された場所だからである。

「…守護者《ガデー》。侵入者は何処にいる」

暗闇の中、中央にて光を纏う神憶の宝玉を支持するその玉座より影が生じたのが見えた。

『城守にはご機嫌麗しく』

影は女の姿をしていた。

紫がかった白銀の、髪。

豊満な肉体は、その影を見慣れたものに似せて思い浮かばせた。

「 守護者、レイク」

『お久しゅうございます。8代が魔王、イスランⅡアルⅡジェイクⅡ
類笑みを浮かべたままで、人を食ったかのように礼をしたその存
在は、まさに綬者レイクシエルⅡオッドの映し身にしかみえなかつ
た。』

「答える、守護者よ。侵入者が現れたはずだ。よもや逃がしてはお
るまい」

魔王城の創設は魔王という存在のはじまりと並立している。

魔王は、魔を浄化するための至高の存在。

魔王城は、その魔王の務めを補助するための存在。

そして。

神憶の宝玉を保護するべき守と壊としての共同の責務。

そんな歴史をもつこの地には、その創設より生きながらえるもの
がいる。

それが綬者ともよばれる存在。

レイクシエルⅡオッド。

叡知の魔女である。

『いかに我が身、影といえども存在の意義ともいえる役目を放棄な
どとしてはおりませぬ』

心外な問いだと告げるように、守護者レイクと呼称されるものは
告げた。

『 訪問者は、あちらに』

うやうやしく述べたあとで、今一度守護者は散じた。

綬者と呼ばれる魔を用いた呪を得手とするレイクシエルⅡオッド
が初代魔王に請われて作った宝玉の間の守護者は、その姿を自らを
作った魔女の姿に似せた。

おかげで、初代を含めた魔王全員が宝玉の間にくると微妙にイヤな気がしてしまうという結果を招いたのは予定外だったが。

『界を渡ったようでございます』

声だけを伝えてきた守護者の言葉を聞き流しつつ、彼は見た。

位相をずらして顕現した来訪者を。

「…ここ、何処？」

怖ろしい程の力に溢れた、その娘を。

51 彼女と彼の、四年前 其の四

「彼女と彼の、四年前 其の四」

探している人がいたの。

その人は厳しくて、優しくて。

会って、何かを伝えたかった。

とても、優しくしてくれた人だったから。

感覚がそれを教えた。

別に、その人がそこにいるというわけではなかったのだとは思う。振り返れば、なぜそのときそれほどに確信めいた思いで能力を使ったのかはわからなかった。

そこは、それまでに訪れたことのある異世界に比べて渡りやすい場所だった。

ましてや、その日は覆いの幻日。

極光という漏れ出た世界の力が、異世界にいた京香には何よりの導しるべとなる日。

『使い物にもならん、愚かな能力ちからだ』
役に立たん。

そう嗤ったものもいたこの能力を使おうと思ったのは、何の導く結果だったのか。

それは4年の時間を置いても、いまだにわからない。

ぐるりと、世界が変わった。

「あ、あ、あ、っあああああああああ」

衝撃が身に走った。

能力が異常なまでに拡大していく。

疲弊していた筈の体力は蘇り、心配と焦りで疲労していた精神は向上していた。

そして、恐怖があった。

怖い。

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。

濃密なまでに収縮されていく能力。

密度を増して、階層が上がっていくかのような桁違いな存在の確定。

意識下におけぬほどに膨らんでいく潜在の能力の暴走に。

卑小な人としての意識が、恐怖した。

ここは何処！

52 彼女と彼の、四年前 其の五

「彼女と彼の、四年前 其の五」

混乱がまず一義いちぎだった。

その世界のどこかは判らぬ場所に、位相をずらして移動した直後のことだ。

やはり、その世界が特殊であったためだろう。

それとも、その日こそが特殊であったからやもしれぬ。

確かに言えることは、その日が始まりだったということ。

感覚が教えるその光の一つに、己のいる場所を合せた。

もとより、結ばれず消えかけていた界は、他の結実し確定された界に比べれば招聘することは簡単だった。

位相をほんの少しだけずらす。

たったそれだけで、世界は変わった。

そして濃厚な世界の気配を直接、識に感じた。

纏めていたはずの黒髪は壊れ、力を帯びて翻った。

開いた眼は、おそらく瞳孔の色を銀へと替えていたことだろう。

誰よりも力あったあの人のように。

「何者か」

暗い闇の中、光が見えた。

その中心にある力ある宝玉と、それを支持している玉座から影が生じているのが見えた。

ああ、守護者か。

多くの世界に置いて、力ある石は存在する。

石は無機物である。

けれど、それゆえに有機物に比べて安定した力を内包することができる。

ゆえに多くの力ある者たちはその強大な力を石に換えて保持したり付与したりすることが多いのだ。

見える限り、あの石は何かの能力を貸与されたようには見えなかった。

では、あれはただの守護石かとも思ったが、その割には守護者らしき存在が別途にいる。

ならば。

預言石か。

能力ではなく、某かの意志と知恵を係留し伝言していくための石の御石。

「うあ、っ！」

そこまでを把握して、そして忘れた。

比して向上した能力にまだ慣れない。

流入してくる情報があまりにも精密であり濃厚であり、

覚え続けるのは難儀だった。

「ここは、何処」

混乱に満ちた声がただ空間に響いた。

脳裏の裏で、この空間に遅れて転移してきた存在がいることは把

握っていた。

黒い黒い色の存在。

穢れではなく、むしろ透明な漆黒のような光すらも内包したような存在。

穢れではない。

穢れではない、黒。

大きな能力を持つ、神が与えた役割を持つ世界の支えとなるべき存在だということはよく分かった。

「ここは、何処」

警戒している相手へと尋ねた。

黒色のそれが近づいてくる。

守護者と御石は後方でただ在るのみだった。

誰に聞けばいいかもわからず、ただ呟いていた京香はもう一度同じ言葉を呟いた。

今度は、指向性を持った問いとして。

力ある黒への問いとして。

「この世界は、なに？」

近寄ってきた男は、何も言わずに京香を抱きしめた。

53 彼女と彼の、四年前 其の六

「彼女と彼の、四年前 其の六」

驚いた。

ただ、それしかなかった。

能力はまだ増している。

身の内を溢れだした能力は、外界へ漏れだして熱を発しているのに。

いかに力あるものとはいえども、その行為はいくばくかの覚悟がいるものであつたらう。

不意に抱きしめてきた黒の男は、美しい顔立ちをしていた。

冷酷とも違う。

冷静とでもいうべき顔はその中心に金色に輝く瞳を据えている。

肌の美しいその顔はやや両性的だったが、しっかりと閉じられた口元は確固たる意志をもつ男の顔だと認識させた。

金の瞳を飾る黒色の長い睫毛は、その肩を越した黒髪同様に夜の祝福を想わせた。

ああ、これが黒の王かと。

意味もわからぬ言葉が身に溢れた。

そして。

不意に熱が触れ合った。

顎を掴まれ、上を向けさせられた。

その一瞬。

金の眼と銀の眼が交差した。

交差した唇から、何かが入ってきた。

それは冷たい熱を纏っていた。

抵抗はもはや反射として生じたとしかしいようがない。

あふれ出ていた力は、風となり狂気となってその男を襲った筈だったが、それでもその男は微塵と揺らがなかった。

咬合しあつた口唇のなかで、固いものが触れ合った。

刃かと思うほどに尖った歯牙だった。

「あ

……」

混じり合つた熱と息と水のなかで、それは侵入を果たした。

顎にくいこんだままの男の指が痛い。

不意に口のなかの肉壁に痛みが走った。

咬まれたのだと判った。

舌の上を血液の錆びた味がよぎっていくのを感じた。

血が流れたのか。

見上げる形の、金の眼がどこか傲慢に思えた。

そして、そこに映る自分の姿が道化の様だとも。

力を帯びて色を失つたような白銀の髪が宙を舞っていた。

同じく。

力帯びたがために白銀の色を為した瞳が映った。

「っふ

豪勢な異相であると自嘲する。

ふだんの京香の姿は、そこいらにいる大学生に相違ない。

覚えて間のない化粧を少しだけつけて、本来の民族の色である黒色の髪を茶色に染めていた黒目の少女。

篠原京香は偽りなく、ただの日本人の娘でしかない。

ただ、少しだけ。

転移の能力が使えるだけだ。

幼児向けアニメの金字塔である某青猫の小道具に、「こでもア」とかいう道具があった。

御多分にもれず、京香もそのアニメにはよくお世話になった。

初めて見た映画は、まさにその某青猫と某丸眼鏡の少年の冒険だった。

地球の全てどころか宇宙のすべてが、子供の遊び場になるような某青猫の道具には心から惹かれたものだ。

まあ、そのころ欲しかった道具は「こでもア」とかという道具ではなく、小さくなるライトとか秘密基地が出来る道具とかお空を飛ぶ道具だとか、その日視聴する内容によってころころと変わるものだったが。

人間が起きている時間の8割は目的地へ移動するための時間である」などということをついたモノがいた筈だ。

その八割の時間が一割以下に抑える道具が最も欲しいと思うのは、大人になった証拠だろうか。

本当は。

廻り道さえも愛おしいと思える大人になりたかったのだけれど。

「…廻り道？ そんなものはない。あるのはみな、欲するものが増え続ける業をもつ餓鬼ヒトの通る道だけだ」

交差された口唇が放され、流れ落ちた互いの唾液に混じって、いつのまにか生じた血塊が球を示していた。
小さな球体は零れ落ちて。

答を口にした男の掌の上にと坐した。

54 彼女と彼の、四年前 其の七

「彼女と彼の、四年前 其の七」

解放された口唇から、差異を感じぬ程度の冷たい空気が入り込んできた。

その空気は肺に満ちて、あたしのなにかを目覚めさせた。

「ふざけるなっ！ 誰があたしのなかへの浸食を許した！」

「……………」

目の前に立つ黒の男に、己のなかの何かと接触されたことに気付いた。

それは己の在り方に不安を抱いていた少女の頃の京香にとっては、唾棄すべき行為にしか思えなかった。

脆弱ながらも守り続けている小さな心の聖域へと土足で入り込まれた気がした。

ぷつと口から吐き出された黒色の小さな球体が二つ、男の掌に転がった。

金の瞳の男は言う。

「いいだろう、異界の娘。おまえを我の友と呼ぼう」
笑みさえ浮かべて男は言う。

「なあ、友よ。世界は愛おしいか？」

名を与えられた。

この絆に、名を。

友よ。おまえの罪は重い。

「私の愛は、ここにはないよ」

探し求めた人はここにはいなかった。
ねえ、姉上さま。

あたし、貴女に逢いたいの。

水が鎮まる。
水が鎮まる。

変異したそれは、再びこの身の奥で眠りについた。
残ったものはいつもの私。
いつもの。

「篠原 京香」

「それがおまえの名か？ 訪問者よ」

眩いた自分の名を、相手は訊いていたらしい。
首を傾げて疑問符をつけて。

世界を隔てても、身ぶり手ぶりは似通っているようだ。
暴走した力が収まり、あたしは本来の姿を取り戻す。

白銀に染まっていた髪は茶色へ。

銀に染まっていた瞳は黒へ。

どこにでもいる、ただの人間の娘が一人。

「そう、これがあたし。篠原京香よ」

瞳を閉じて己の内面を見据えた。

水は定まり、変容は収束した。

もう異相は生じまい。

「なるほど。ただの娘にしか見えんな」

夜の王たる男は眩き、手を差し伸べた。

「わが名はイスラン・アル・ジェイク。第8代目が魔王にして城守。

この世を見届けるものだ」

笑みは美しかったと思う。

その裏に、どんな思いがあったのだとしても。

彼は、美しかった。

「変な…魔王ね」

あたしがそう呟けば。

「安心しろ。おまえも十分可笑しな娘だ」

イスランと名乗った男は笑った。

友よ。

友よ。

きみはどこへ向かうのだろう。

わたしはどこへ向かうのだろう。

夜闇のような先の見えぬ場所で。

願わくば。

ふたりの進む道が、たが違わずあや誤まらぬことを祈ろう。

たとえ、ゆく道が分岐する日がくるのだとしても。

4年の昔。

4イアの昔。

世界を挟んで、向かい合った 二人の物語り。

これは、そんな二人の物語り。

【彼女の

不在】

【彼女の

不在】

時折、異和感があつたことは覚えていた。
だが、彼にはそれよりも大事なことがあつた。

探し人がいまだ見つからない。

かといつて、そう簡単に彼女が死を選ぶとも思つてはいなかつた。
そんな程度の存在に、この自分がいままでの歳月を過ごしたなど
在りえる筈もない。

もちろん、彼女の絶望はあつただろう。

だが、それがどうした。

絶望も切望も希望も懇願も断罪もどれもこれも彼女にとっては変
わりはあるまい。

なぜなら、彼女は檻の中に居ながらも己の意志のままに過ごして
きたのだから。

神の意志？

贖罪のため？

は、ありえない。

彼女は彼女だ。

それこそが全てだ。

彼は嗤つた。

彼の執着する存在は、この散在した世界の底辺にまぎれて生き延びている。

神々の檻から逃げおおせて。

鳥が逃げ出した。

愛しい鳥が。

ならば捕まえるまでだ。何度でも。

彼の思いは、もはや未来の決定事項そのものだ。
そうではなくては困る。

「そういえば。あの玩具はどうしたかな」

思いだしたのは、いつものきまぐれによって生じた存在。
それを彼女が珍しくかまっていたことを思い出した。
ただの出来そこないだったというのに。

……。

「……探してみるか」

もしかしたら、彼女も立ち寄っているかもしれないしな。

「思いついたのはただの気まぐれ。

悪戯を命としたものの、気まぐれ。

偶然は必然となり、戯れが始まる。

彼女の居ない世界での戯言が。

時は2の月。

時満ちて、閏^{うるし}月のこと。

56 彼女と彼の、二枚貝 其の一

「彼女と彼の、二枚貝 其の一」

貝は好きですか？

わたしはしじみのお吸い物が好きです。

しじみと眼にいい気がする。

おたくの読書とTVとPC、それからゲームの液晶画面は、お目の運動には絶対的に不足なのです。

細胞の隅までいきわたれしじみエキス、我が趣味のために。

といってもあたしの視力は常に視力検査表の下方までを見定められるのだがね。

ふはは、しじみエキス初敗北宣言してくれてもよろしくてよ！

「あの変質者を海の底にお沈めしてきておくんなまし。砂地に錘つけて引きずりまわし3時間ホテでよろしから」

「待つてそれどんな拷問。市中引きずりまわしの刑3時間。

ただし、5分未満で浮力充填、ライフは0！みたいな！！」

今日も異世界の方々は、あたしに厳しい模様である。

ああん。

愛が欲しいです。(泣)

「ごぼわあああ。

燦々と透かし陽が仰げる場所で、大きな水疱が昇っていった。

「おおお。 本日もあわせさまはご機嫌なようだなによりだねえ」

「によによによんにょん。

好奇心まるだしの笑顔でつい見つめてしまった京香だった。

「うれしいことでありんしょう?」

藍白の肌に黄金の瞳と髪を揺らめかせた少女が述べた。

「…あいかわらずの蛤さま至上主義だね、ミナイのお姐ちゃん」

「それが私でありんす」

にこりと答えるミナイ・・グーは、とても幸せそうだった。

手毬を一つつきましよう。

上手につけたら、その手の裡に小さな丸が生まれるでしょう。

その円が全て。

その縁が全て。

右の掌に小さな半円。

左の掌に小さな絆縁。

ほら、私たち。

こんなにも幸せです。

大きな大きな二枚貝。

その中におさめられた空間には、小さな世界が築かれている。

海のなかの大きな界のなか。

守られているのは、藍白の肌を持つ深原族^{ウィルキン}。

波に揺られて海の幸を護る人々。

手には水かき。

足には尾びれ。

揺れる瞳には、オパール^{の被膜}。

人々に『透明な生きる宝石』と呼ばれる幻の一族たち。

57 彼女と彼の、二枚貝 其の二

「彼女と彼の、二枚貝 其の二」

「^{ウィルギン}深原族？ って、なにそれ？」

訊いたことないなあ。

そんな話をしたのは、窖での酒盛りでの話。

「ふむ。 そうだなあ、あんまり俺もくわしいわけじゃあないんだがな」

どん、と一升瓶を床に置いたドワーフ族のおっちゃんが酒のつまみに語りだした。

「海の波間に生きてる一族だ。海藻や小魚を食って生きてるとかでな。 海の人魚族つてのにちいかいかもしれんな」

まあ、俺はみたことはないんだが。

「ごっつと日本酒をロックで一気飲みするドワーフ。

もうちよつと味わって呑んでほしいなあ、せめて。

店長お勧めの一品とかいう酒は、おかげでピン札一枚分はしたのだ。

あたしのゆきっちゃんがああー！！

…涙を呑んで買ってきた身としては、切なくなる呑みかただと思ったださ。

「まあ確かに造形だけをいうなら、やつらは人魚族に近いが。 ……

あの色は別格だろう。 海の藍に馴染む藍がかつた白の肌、何より

も奴らの爪と眼の色は独特だ。 オパールがかつた原色なんぞ、

なかなかねえからな」

こくりと、唯一の蛇牙族であるミニ スが果汁で割った酒を手にして補足してきた。

「詳しいね」

ちよつと意外。

「まあ、それなりに旅してた時期もあったからな」
海縁を廻るのもそれなりに面白かったぞ。

隻眼を細めて呷いたミニ くんは確か方向音痴だったはずだが。

「…よく無事だったね」

帰巢本能的トラブルが生じなかったことに驚いた。

そしたら、

ぼん。

と肩を叩かれた。

「…？」

ロドムのおっちゃんだった。

「京香。世のなかには、奇跡という言葉があるんだぞ？」

「……………」

…何も言えなかったさ。

目の前の髭なしドワーフの眼元がうるんできるとか頬がひくついてるとか拳が震えてるとかそんなそんなさ。

…何があつたなんて聞けるわけがない。

後日、もう一人のミニ くんの親友に出会ったとき、何故かぼつんと一言補足された言葉がなお京香の涙を誘ったものだ。

『……………友情って大事だよな』と。

…ただ。…ただ、周りに迷惑かけてたんだ、その蛇牙族！！！！

陸の全てを制覇したというつもりはないが。

とりあえず、訪れたことの在る場所も増えた頃、ふと思ったのである。

陸とくれば海だろう、やっぱりと。

この辺は島国出身ならではかもしれないが、まあ何となくそう思ったわけですよ。

魔族だとか古族だとか聖なる一族だとかいろいろと名称だけはいこの異世界ですが、海に生息してる一族がいるよねきつとかおもったわけですよ。

テイターン親族じゃねえけど、鉾もった巨大神族とかいないかなって。

ポセイドンさま、エキドナの息子、さあ出てこいよつと。

カッコ笑カッコとじを前提に酒のつまみに聞いてみた。

どうでもいいよた話は酒の場所ですが基本ですしね？

で、その結果が冒頭に戻ったわけですよ。

オリジナルきたあああ。

と、生ぬるい目線でうつきつつき話を聞き、予測をつけて、さあ、
ゴーインググ！！

そして、以下省略。

「なんですの、このアホな顔した娘っ子は」

「……………きついね、お姐さん」

……………海水がしょっぱいことをよく認識した第一次遭遇のはじまりでございました。まる。

本日の覚書

ヴィルギン
深原族

まさかのオリジナル種族。

見た目は人魚族と似通っている。

違いはヴィルギンの方が色濃い。 深海もいけるヴィルギンだ

が、流石に海底3000などの場所にはいけない。

肺が発達しており、陸の人魚族よりも尾びれが大きいなどの差がある。

色覚よりも明暗覚の強い。

手先の器用さは人魚族よりも強いかもしれん。時折、マッチョ筋肉持ちがたまにいるゾ

護身用と狩猟用に、ナイフとか熊手とかパターとかを常備してる奴もいるよ。

ミナイ・グー

黄金真珠の分霊。

なぜかありんす言葉を話す不思議な娘っこ。

マニアックにも大裕さま至上主義者。

何のフエチだとは突っ込んでやるな。10倍で返ってくるから。
この職に就く。

58 彼女と彼の、二枚貝 其の三

「彼女と彼の、二枚貝 其の三」

海の一族。 ヴィルキン 深原族。

彼らが営巢する場所の名を『御津の大裕』おおあわせと呼ぶ。

神の残した枢カラクリの地。

海の中を移動し、砂の中を潜る。

巨大な二枚貝の要塞である。

ぞく…ぞく…ぞく。

ビーチサンダルに生足上等。

そんな感じで歩行中というか遊泳中というか。

「有難く思うのでありますよ？ わざわざあちきが案内してあげているのでありますからね」

「……うい。お姐さま」

真横で微妙に間違った語尾を使用しているミナイ・グーに返事しました。

なにしろ、初めてこの御津の大袷に訪れた時に濡れかけて失神していた京香をぼっくりで踏みつけてくださったのは、このお方である。

踏むな！踏むな！他人を踏むなっつーの！！！！

心から突っ込んだ出会いでしたさ。

「どうして城守どのはこんな奇人に守護を与えられたのか。あちきには本当に不思議でありんす」

「……………」

あたしに言われても困るんですけど。

などと反論する勇気もないあたしです。…、空気読み上級者と呼べ。

「にしても、今日は暑いね」

「裕さまの浮上率が8の階層に入っておられんす。現在の周期では日差しの強い場所を移動されていらっしやることから考えれば当然のことでありんす」

「水着になってからくればよかったかなあ」

隣の帥の一人の説明は専門すぎてあたしにやわからんです。

とりあえず、日焼け止めプリーズ。

「……………それ以上肌を露出されても困るのでありんす」

「その言葉はヴィルギンたちに言え」

露出率の高すぎる水棲の民に苦情を言われるほどの衣装はこちとら持つとらんわい。

せいぜい膝上までのボトムに苦情を言える立場がおまえら。マジで。

うおん。

低音域の音が唸る場所でした。

……………モーター？

ちがうよね？

まさかの近代文明への分岐点の一つとなる発明品を思い出してぞつとした。

まさかそんな、と。

いくらなんでもオーパーツすぎるだろうそこ。

見えない汗をかきつつ、案内人であったミナイ姐の後をついて行った。

目の前には、白い輪状の家というか邸というか……………柱？みたいな。

「ラテン殿。 おじやまするでありんすよ」

「……………」

ばちん。

縦の繊維を前後に押し分けて、ミナイ姐が入っていった。

うん、あたしこんなどこかで見た気がする。

「まさかの貝柱かい。この場所」

出汁がたくさんとれそうだねこりゃ。

巨大二枚貝の左右に存在する場所での一人突っ込みでありましたともせ。

本日の覚書

御津の大裕みつのおおあわせ

枢のような半ナマモノである巨大二枚貝。

規定ルートを周回するのだが、その日によって浮上率が違う。深海を進んだり、海上へ出たり。（もはや潜水艦じゃねえのか）

おかげで京香のような連中にとっては転移しにくいことこの上ないとか。

本拠地である海底基地（？）水泡の宮にとっては要塞兼輸送ルート。

ポイントは裕さまフェチの連中が腐るほどいるところ。（素でいつか変形ロボつくりたいとかほざいてるのがいそうである）

59 彼女と彼の、二枚貝 其の四

「彼女と彼の、二枚貝 其の四」

クラフト・オルギナと呼ばれる連中がいる。

そいつらはちよつと異様な技術を持つている。

「あゝはゝはゝ。ちよつとあたしいま怖くてうごけません先生」

「ついでに口も閉じるとかんぺきでありんすよ、壁の文様」

「せめて花つて言おうよ、そこは！！」

口の悪いサドが多すぎるってこの世界！！

心のグローブは何処に往つたのみんな！ 心のバット（棘付き）

しかもつてない奴らしかいないのはどういう仕様ですか！！？

言ったら言つた分だけ打ち返される千本ノックマシーンもどきな

異世界のS規格に異議を叫んだ篠原京香（23）だった。

貝は海に沈み、泳ぎ、潜る。

二枚に分かれたその外殻は裡にひっそりと息づく胎身を守り、土と水と、潮と闇にまぎれて眠る。

陽の光のもとで在らざる姿に変容することさえも全て隠しながら。

「ちわっす」

お疲れ様っす、ミナイの姐さん。そして、初めまして変な人。

「御苦労さまでありんす。ラテンどの」

「……………ちわっす、初めましてっす」

あ、尾語うつった〜という前に、どうして初対面であたし変な人認定つけてんのかなあははははん。

敬礼してミナイ姐さんに会釈した男の人に対して突っ込むところは多々あるのですが。

とりあえず、その落ちそうで落ちないバランスのフィギュア放してあげて。

見てるこっちが怖いんですそのバランス。

不器用の塊な自分を自覚しているために、そうお願いしたいのが篠原京香の現状（進行形）であった。

「何度見てもエコな水圧指向性動力ですね」

すげえマジエコ、ガチクリーンな循環システム。エコポイントで換算したらどんだけもらえるのかな。

ぼこんと水泡が混じる水はアクアリウムのように透明な壁に添うようにして揺らめきながら上がっていった。

「エコとやらは判りませんが……………裕さまが最高なのはわかりますよー」

きらきらと声がきらめいているのが分かった。

「……………そうですね」

なんかヤバイスイッチ踏んだ気がしたので心のグローブでキャッチした瞬間に横へと送った。

「で、ミナイの姐さん。そろそろお仕事のお話してほしいな、あた

し！ こちらのプロフェッショナルな技術のことについてお教えてほしいなすつごく専門職なこと教えてほしいな！！」

笑顔で投球！ ただし、思いつきり相手の見えない濃霧の中で！的な感じで。

無言でこちらを見つめている裕さま至上主義者その2が何処まで応じてくれるのかこの待ち時間が怖い。

「……………」
「……………」

ああ、沈黙の天使が通っていく。

次に来るのは終末の笛かノアの方舟か。

出来ることなら、祝福の天使にこそ到来してほしい。

「ラテンどの。そこな変態の依頼を聞いて差し上げてほしいのでありんすよ」

祝福の天使、来たああああ！！！！！！

「依頼、つすか？」

外部からとは珍しいっすね。

不思議そうに己の住処の、式の職がミナイ・グーに仲介された変人の挙動不審を真顔でスル したクラフト・オルギナの若きエース

ラテン・クイナには、是非にこの依頼を受けてほしいと思いますのさっ！！

…京香、語尾崩壊。

クラフト・オルギナ

技能集団。という名のオタク。

手先の器用な深原族始めとした連中の職能集団。ウィルギン

作るものは槍から時計からオルゴールからフィギアまで。なんだ
ってこなししてよ。

ちなみにオルギナは造語。

ゴミという名の宝の中で生息中。

ラテン・クイナ

クラフト・オルギナの若きエース。深原族。

子供の頃からクラフト・オルギナの中で育つ。

クラフト・オルギナの最も大事な仕事である大裕のメンテナンス
のサブについてる。優秀。

基本語尾は「っす」。

60 彼女と彼の、二枚貝 其の五

さて解説の時間だ。

地中深くに根を張るドワーフ族は石と火の加護もつ一族。

陸の高台、丘の上にて住むホビット族は風と木の加護もつ一族。

どちらもその手先の器用さには定評がある。

そして、知られざる事実がひとつ。

水と闇の加護もつ一族であるヴィルギンのなかに生じし技能集団。クラフト・オギナもまた素晴らしき能力をもつものたちであるのだ。

こぼんと目の前の器に落ちた雫の色は緑色。

「租茶つすが」

「ありがとうございます」

ゴミの館のごとき場所をずりずりと移動してなんとか確保した場所^スでお茶を頂きました。

海の一族たちの好む濃緑のゴヤ茶。

海の底にある水泡の宮で大人気なそのゴヤ茶を海草水で多めに割ったものだとか。

ゴヤ茶って苦いらしいしね、健康にはイイらしいんだけどさ。

一口だけ啜ったところで顔が……………。

「
……」
「
……」
「
……」

とりあえず無言でそつと茶碗を置いた。

「口にありませんっすか？」

「変人は味覚もおかしいのでありんすね」

目の前の深原族たちがやかましい。

だって、胡瓜のすり汁に昆布茶をまぜたようなものは、私の世界では美味とはいわないんだぜ？

「……そうかもしれませんわ」

ほほほほ、きっと私の味覚がおかしいんですよ、ほほほほほ。

空気を読んで下手に出ることを篠原京香は覚えた。

また一つ大人になったねと誰かに褒めてほしいところです。

この地での美食探しはあきらめようと思いつつ、彼女は次なる話題を探した。

「実は。 今回のお願いはあたしの発案ではないんです」

目の前のゴヤ茶海草水割りはずでに冷え切っている。

お茶受けに出されたのは酢昆布だ。うまい。

どこで干してるのかなとか疑問が無いでもないけど、酢昆布は好きだ。何故が好きだ。

もはやDNAに刻まれた愛だといってもおかしくないと言香としては愚考するのだが、どうだろうか違うんだろうか。

あながち間違いじゃないと思うんだけどなあ、遺伝子に潜む昆布愛。

だってほら、歳をとればとるほど昆布食おうとしないか？ 男性の方々。あれはきつと遺伝子の力なのだよ、きつと。

「 関与しているのは主である」

ならば、おまえさんがすべき仕事じゃ。

薄い唇を一回り小さく濡らしたように輝かせた職が一名。

「ミナイの姐さんがここまで外部のもんに関わってること自体がもはや奇跡っすから！」

どんな話も聞くに値するはずっすよ！！

八重歯がちら見えるはじめましての青年一名。

深原族の二枚舌を引き抜くやつとはどこだ、い
ますぐ冷ややつとこを用意しろ！！

褒められた混乱のあまりに床に突っ伏した影の量は、異界の変人
とりあえずは一名分のみ。

アレにまかせたら話がすすまんに決まっておるわ、と遠方より突
っ込んだのは某所のドのつく両性類のお友達だ。

やかましい貴様だったら確実にミレニウム戦争が勃発するに決ま
ってんじゃねえか。SSめ。
スペシャルなサ下

…チキンがそう返答できる日はまだまだ遠い。

ミナイの姐さんはツンデレ族次子、ラテンの兄ちゃんは爽快S属
戦士。

もちろん京香はいじられM子。

え？ 奴はプレミアム級の非食用SSドラゴンですけども、なに
か？

61 彼女と彼の、二枚貝 其の六

修復のスキルを持つ一族がいると聞いた。

それは万能ではない。

けれど、とある条件をもつものに対してのみそれは万能に近くなる。

その一族の若きエース。

ラテン・クイナに尋ねる。

未知の明日へと君は踏み出せるかい？

レイちゃんにおねだりするのはこれが初めてではありません。

うむ、お姉さんは好きだ。

綺麗なお姉さんはもっと好きだ。

そして、それが有能の万能で、とても優しく寛大なお姉さんだったりすると、京香は猫にまたたびのごときテンションで大好きになります。うざいって言わないでください。

あたし、レイちゃんのこと大好きなの!!

「それで? ご友人さまは今度はどんなお願い事をされるのかしら?」

ほわちゃああああ!!

「……………あ、びっくりしたびっくりしたびっくりしたガチびっくりした」

いきなり気配もなく後ろから来たし、あびっくりしたマジびっくりした!!

レイちゃんの魔女っ子部屋の扉の前で驚いた今日という日いい。しかしよく思いたすとレイちゃんに驚かされるのはむしろデフォルタだったりするのだが、そこは気付いちゃいけないむしろ禁断の花園だ。

旅立つちゃダメだここはそつと無言で立ち入り禁止の標識を立てるべし。

「…ご友人さまは今日も面白いわあ」

「ありがとうございます、レイクシエル」オッドお姉さま!!」
恐縮です!

そして敬礼でもなんでもするので、京香のお願い今日も聞いてほしいんです!

このような経緯を経て、彼の妙薬はわが手に来たのである。

これも我が国の誇る土下座のおかげです!

ことん。

ウエストポーチから取り出した真っ赤色、真っ黄色、真っ青色の薬瓶を順番に置く。

ぐるぐるぐるぐるとよく攪拌して。

縦に振っちゃダメだ、横に振るんだぞ、と。

お仕事をしています、私。

「で、準備はできたのよね？」

「はいっす。ばっちりです」

きらりと光る八重歯は白い。

「……君とその一族に感謝を」

会釈を交わし、作業を続ける。

一番目は紅く輝くどろりと流れた薬液を、二番目は黄色に輝くさ
らりと流れた薬液を、別に用意した瓶へと開ける。

出来たのは混色の薬液。

それが浸潤して混ざりきる前に、最後の青色の一番分離しやすい
薬液を混入する。

軽く混ぜた後、蓋をして今度は大きく瓶を振って振って振って振
って振る。

見事に虹色の光沢色へと染まりました。おめでとつ。

「さて、それじゃあいいかな？」

「もちろんっすよ」

背後で頷いているのはミナイの姐さんだけではない、クラフト・オギナのメンバーや他の職たちも見守ってる。

全てを混ぜ合わせたその薬液を用意した食器に細く垂らしていく。水あめを垂らすようにね。

そうしたらまあ、あら不思議。

棒状のシャーベット。固形物ができましたとさ。

なんじゃこりゃ不凍液かと突っ込む輩はここにはいません。純真
っていいなあ。

「君に足をあげるよ」

「楽しみっす」

笑顔で述べながらそれを食べ始めた君の強さには心から称賛する
よ。

喪われたゲートの代わりに、あたしが君を連れていっ
てあげる。

二枚貝の奥には、大切な大切な宝物がしまわれてるんだ。
だから、傷つけちゃいけないよ。
だから、無理に開いてはいけないよ。
貝は護っている。
貝は護っている。

その儂い血と肉を。

…ど、土下座なんてしてないんだぜ。(汗)

62 彼女と彼の、転移術 其の一

さて、我が友人にしてオタ朋と呼ぶに値しつつある魔王どのの
いつぞやの過去に交わした会話である。

「そうそう」

「……？」

場所はもちろん、魔王城。

今日の議題の表出も実に唐突だった。

「イスランって転移術つかえたよね？」

「……魔王だからな」

時刻は夕の刻、明日もお仕事お休みだよっほい。

という、仕事人の幸せってこの時刻だよねという金曜の夜だ。

休日の前日ほど幸せな時はないと思う。イヤ本気で。

ちなみに、そんな私は今日も今日とてレンタルビデオを借りた後、
自前のトラベルセットを持参で魔王城にある既に己の巣となりつつ
あるイスランの私室の一室を占拠していた。

…だって、こんなにやるの私室がいくつあると思っ？

一番小さなクローゼットがあたしの小さなお部屋の広さを超えて
ると知った瞬間、怒涛の回し蹴りが炸裂したわよ（もちろん不発で
したけどもね）

「先生、あたしに転移術を教えてください」
おねがいします！

「は？」
って、おまえも転移出来ただろ？

挙手して教えを請うた真面目なあたしに対して、その真っ白で形の整った歯牙を見せたまま問い返したのは、あたしの魔法の先生です。

いやまあ、魔法って言えるかどうかは分からないんですけどもね。

「うん。異界渡りは出来るけど、あたし同一世界内での移動は基本的に出来ないんです」

いやあ、同じ世界の中での転移ってさ、位相転移の対象にはならないもんだからさ、目標設定できないのよね。

「は？」

あ、やっぱり驚いたあ？イスランも。あはははははは。

その日の魔王城に落雷混じった魔王様の罵声が響いたことを知っている輩は実はけっこういたりする。

「なるほど。では、ご友人さまはいままでまったくの勘でこの世界に御訪問されていたということですね？」

気のせいだろうか、目の前の美女が怖い。

あの後、こいつありえねえしと呆然と呟いたイスランに連れてこられたのは、麗しの乙女じゃなくて魔女のレイちゃんのお部屋でした。

「はい、そうです」

人間、やればできるもんですよ？

心からそう告げると、後方の扉から嘆き声が聞こえた。

うんと、もしかして巡廻中の警備兵くんだったりした？

だって、今の声って今日の夜番のオリっちだったよ？

「……陛下。わたしもう駄目です。もうこの子の全てについていけなくなりそうです」

「すっかりしろ、レイクシエル。おまえがそれでどうする、叡知の魔女の名がなくぞ」

目の前の美女と美青年も嘆き始めた。

うん、何があったのかな。

あとね。

「こいつがただの常識知らずの直感バカだということだろうか？」

今さらの事じゃないか。

件のあたし大嫌いフェスタ絶賛一人開催中のミニドラゴンの口が悪いです。

時間差攻撃開始。

時間軸は多分それなりに古い話で、この頃のドラどのはまだ京香と仲悪かったりする。(ほぼ一方通行だが)

63 彼女と彼の、転移術 其の二

まず第一に。

転移術は元来の枠組みを空間魔法のなかにいれられる。目的となる場所と現在地との空間認識ができることが前提にあつてこそその業であり、同時に世界の認識を一時的にごまかすあるいは断絶させるがゆえに施行できる神話的魔法であると、多くの世界では認証されている。

彼我を定義し、世界の定める定義の枠から跳躍できて初めて転移というものは為せるわけだ。ドンとフライミ。いつか空も飛べる筈。

…失礼、何か間違えた。

とりあえず、話題を元に戻す。(えへんごほん)

さて、転移転移と世間一般では叫んでいるわけだが。

通常における転移という言葉は、主に瞬間移動テレポートを指している。なぜか。

それはまあ、比較的安易とされてるのが同一世界における転移だからだ。(実は神代にから伝わるお話の中には、それらが山のように出てくるらしい、いいよな神族楽そうでさ)

で、もう一つ。

神話でもめつたに伝承に残ってないのが、もう一つの転移術。異界渡りと称される術だ。

……うん、本当にね、この術ほど定義が面倒なもんがない。なにしろ定番がない。

ある奴は【白い亜空間に引っぱり上げた後でポイと落とすのがミソ】とかぬかすし、ある奴は【夢の通り路を使用するとともエコだぜ】とかいうし（ちなみにナニのエコかは不明だ）。ある奴は【いつそ面倒だから死んだ奴をばいと移行させるのが一番手つとりばやい】とか抜かす（ちなみにコレ意外に多い。なにおまえらそんなに面倒なの？やる気ナツシングなの？）。

まあ、そんなとある場所でお会いした神とからしいご存在との対話は放置してください。もうあいつらに逢いたくはないのあたし。

まあ、そんなかくこれその方法が確立されている中で、京香が使用する転移術の主となるのが位相転移の術なわけだ。

いやいや、これ楽だよー。いやまあ、これしか使えないからつてもあるしむしろ気づいたらこの方法やってたしとかいろいろとあるわけなんですけども。（新しく覚えなおすなんてソナメンドクサイ）

…まず自分の居る場所を幾つもの界層へと分ける。んで、自分が行きたいよそさまの世界の位相を呼びつける。自分の居る場所と行き先である世界の位相を重複させて後、位相を戻すとあら不思議。

異界渡りの達成と。そう言うわけですよお兄さん。（もちろんお姉さんでも可）

どっかの野郎が、それは位相転移なのか召喚転移なのかをもっと詳しくとか叫んでたけど、あたしに聞くなお前が決めるとのみ返事しておいた。

だって、どっちであってもあたしのやることに変わんないし、むしろ定義する必要からしてないわけだし。

ん〜まあ、そういうわけであたしの世界の渡り方⇨転移術の概要の説明を終わるわけだ。

んで、なにやら異様に召喚よびしやすいこの異世界の魔王くんや美女魔女なお姉さんが使えるテレポの方の転移術が実はうまく使えないので教えて下さいと言ったら、すごい顔で絶望されたんだがちょっとどういふこと。（いまこ）

…と、というのが今回のお話なわけデス。

「……教えるつてなんでしたかしら？ 陛下？」

それはどんな破滅的無創造的な行為でした？

「少なくとも教える端から魂を飛ばす奴にしてはいけない行為だったような気がするぞ」

レイちゃんとイスランという、二大転移術使用可能者が目の前で駄弁っていらつしやる。

いやだな、そんな褒められたらあたし困るじゃないか。（褒めて

ないという突っ込みは完全破棄の方向だ)

「強制ギプスでも作るか？」

「いえ、むしろ魔道具の作成をした方がよいかと……」

むつつかしい原理と理論と手順と応用をずらずらと述べてきた二人の手元には握りしめられてくしゃくしゃになり、涙と汗でインクが滲んだメモ用紙がある。

その文字の数だけ貴重な二人の時間は喪失されたし、京香の魂も逃走した。

覚える気はあるが覚えるための脳みそが京香になかったということとは、その貴重な喪失した時間の結果、教師役2名が理解した大切な教訓だ。

魔呪のベクトルを最も理解しているという魔術の最たる大家であるレイクシエル「オッドがその後京香のために作った魔道具【親子馬鹿子馬鹿】によって京香は同一世界での転移術を学習することが出来た。

『叡知とはこのようにして消耗されていいものだったか』と遠い眼をして呟いたのは、その日の魔王城の護衛番だ。

…最近の魔王城の空には、どうにも魂がうつろつきすぎていて困る。

64 彼女と彼の、岸辺 其の一

「彼女と彼の、岸辺 其の一」

封^{ほう}の岸、と呼ばれる極地がある。

小高い丘の上にあるのは、風を伝える白い花。

人工の。

風車は回り、水を興し、力を生みだす。

……おらんだ？

などと呟いたのは、どこぞの異界渡りだ。

その呟きを理解し得るのは現状のこの世界では魔王ただ一人だが、
残念ながらその場所にいたのは魔王ではなく親父三人衆【人外コー
ス】であつたために、それはスル された。

親父のスル 力をなめてはいけない。

鈍感力は年を取るとともに臨機応変に成長発達するのだ。決して
それはめんどくさいという一言で終わる感情のもたらすものではな
いのだと世の親父はいけしゃあしゃあと述べるはず。

「…先生、今回はどうして集合場所がここになったんでしょーか？」

一応、発言者が謙虚に拳手をしつつ呟いた。
棒読みで。

「そらまあ、あれだろ？ ポンの奴がたまには阿呆に子守りをさせなならんだらうとかいったからだろ？」

目の前の髭なしドワーフがなんか言った。

「奴はいま15人目のガキの出産に立ち会ってるからな。蕩けたゼライムの手も借りたい心境なんだらうよ」

MY日傘を手にした隻眼の蛇男がなんか言った。

「……………ホビの一族の子だくさんっぷりにはもう沢山だっ！！！」

涙目で叫んだのは、もちろん強制子守りを任じられた異界渡りの篠原京香です。

終わった。

岸辺には花が咲いている。

白い花。

赤にも染まるう、
黒にも染まるう、

いつかそのために。

白い花は咲いている。

岸の辺りは、境界線。

いつか天地は遡る。

本日の覚書（つーかもはや棄書）

蕩けたゼライム。

齡経たスライムのこと。

濁点をつけることで、瘴気を浄化しきれずに表面の色が濁り、ぶるぶるのお肌ががぶるぶるのあばたになつてる状態を指したものと
思われる。スラング。

ぶつちやけ、そろそろ崩壊（無価値）の意。

65 彼女と彼の、岸边 其の二

「彼女と彼の、岸边 其の二」

封の岸は小高い丘の上にある。

世界の果てにつながる墨海に突き出たような丘の上。

悪魔の風が吹き依ると噂されるその場所には人々は立ち入らない。
風に煽られて廻る白の封邪に恐れながら。

その場所には、主の一族である胡鳥族と契約の民であるホビット
族が住んでる。

人工の湖を囲み。

【搗^{つき}】を巡る、風の丘に。

白い花は咲く。

「ばんごう！」

「いちっ！」

「にっ！！」

「さん！」

「しっ！」

「じー！」

「ごっごっ！！」

「セブン！」

「やー！」

「くうう！」

「つとおー！」

「そこだいけええ、」

「じゅうにっ」

「とみ！」

「 点呼の番号の読みは、統一してたのむ」

つかだぶつただろう今しかもなぜ異界語である英語がきたし、しかも9と10はどう見てもチャンバラごっこ中だ11に至ってはただの野次馬ですごめんなさいは？ 最後に至っては当て字かやるな貴様。

うふふうふふ、ゆとりめ。

壊れた眼であらぬ方を見つめる娘っ子は地味に痛々しいものである。

ましてや自分自身あり得ねえとか思いながらも、どうやら恋心らしきものを抱いてしまったらしい先行き怪しいことこの上ない蛇牙

族のミニニ にとっては娘の苦境を放置出来なかった。

「あ〜。……おまえら。 土産が欲しかったら静かにきちんと
整列して並べ」

じゃねえとお前らには金輪際餌付けはしてやらん。

別段大きくもない声量でのミニニ の言葉に、子だくさん「食糧必
要最低限」土産は大事、餌付け上等のホビさんの一族の子子孫孫ど
もは綺麗に整列してのけた。

そのあたりの躰については【食いたければ働きなさい】という信
念の親父の性格が多大な影響を及ぼしていることは相違あるまい。
あむあむと乾燥蜜苺を貰ってもぐもぐしているホビット族のチビ
ーズはかわいい。ハムスターのごときほっぺた、可愛い。

「子供たちの反応がくやしいときいいい!!」

我に返った娘っ子が懐かしい小ネタを叫んだが反応するものはい
ない。

尊敬する父の友と変人娘やちんめの立場にはこれほどの違いがあるのだ。

子供は素直で残酷というはなし。

「おうおう、恋へんに眩んだ蛇は健気だのう」

離れた場所で胡坐をかいて塩をなめてるのはドワーフ族のおうち

やんである。

や。 高血圧には気を付けるよ、酒呑み20代独身髭なしドワーフさん

本日の覚書（あるいは棄書）

蜜苺

ハニ ストロベリー。

果汁が蜜のように甘い。山奥によく生えてる。蛇牙族の好物。

日干しにすると干し蜜苺。

潰して包んで固定化の魔法レベル5をかけるとドロップになる。

（ただし、噛んだらすぐに果汁に戻ってしまうので、どこまで噛まずにいられるかが勝負。 元気な子供たちの口を閉ざさせるには

これが一番とか言う話）

子供には優しいミニー くんはこれをよく土産にする。

セブン。

犯人は京香。

何度もホビット族の子守りをしてきた奴が幸運セブンだとかウル虎セブンだとか叫んでいたために子供らはチャンバラごっこやセブンがわかる。

ウル虎の母がわかるのはホビ家の長男だ（ただいまお仕事中）

封邪

風車のこと。

人間たちは、邪を封じているとか勝手に由来をつけ、そのように名前をつけたとか。

人外にとっては、都市伝説的名称（笑）。

66 彼女と彼の、岸边 其の三

岸にあるものはなあに？

砕けた巖いわの果ての姿か。

波頭に揉まれて辿り着いた艾もぐらの繁栄か。

時と天地が忘却した沈黙の蒼の幻影。

岸にあるものは、ただ全ての境界を赦すもの。

けして、けして。

ソレを踏み破ってはいけないよ。

「久しぶりに皆そろいましたね」

生まれたばかりのホビの一族の末子は女兒だった。

さすがに今回は多胎出産ではなかったようだ。二回も双子が続いたからなあ、いいかげんにこの一族の反則的な繁栄能力には納まることを覚えてほしいところだよ。

眠っている赤子は使い古された感のある蔓籠に寝かされていて、お手手がちっさくて頬がふっくらでお尻がでっぷりむちむちでとても可愛いのです。

ホビの一族の特徴である巨大足だけは可愛いというにはやや抵抗はあるものの総じて愛ではたるもんだというのは、好き勝手になでようとしてはその父親にはねのけられるを繰り返しているこそその変人の心からの感想だった。

「お前が言うな」

「出席率が悪いのはおめえだろう、ポン」

そんな場景は見事に流して、【ホビット族の慇懃無礼】と裏にて呼称されるポン＝ボルンへと突っ込んだのは、その親友たちだった。

「それはすいません。なにしろ、子育てで大変でしたので」

今も今とて、片手と片足で京香をはねのける慇懃無礼は、笑顔で親友たちの突っ込みに返事した。

このチビのでか足の豚馬とんまー！

言葉にはせずに心で叫んだ瞬間。

「何か言ったか、下郎」

……！！！！

「……おい京香、息しろ息」

「人工呼吸かシヨック療法の出番じゃねえのか？ ミニ、おまえどっちするー？ ちなみにおれは静かに見守る係なー」

最近ミニくんを何かの玩具のように扱いつつある気配を感じる某おっちゃんがひょうひょうと告げていた。

「なぜみまもる……」

むしろ全力で救命に勤しめや。

一刀両断するどこぞの慇懃無礼に一瞬無呼吸に陥ったあたしだったが、今日も安定したコントになってるミニくんとおっちゃんの会話でつい突っ込みしてしまった。

ある意味つつこみせざるをえないあたしの習性を生かした人命救助の作戦だと言えなくもないかもしれない。（願望）

追記。

「それじゃあ、ロドム。息の根を止める係は是非私にやらせてくださいね」

笑顔で告げるホビの一族の親父は本気でも冗談でも怖いから、逃走経路の準備をするべきだなと思う。

本日の覚書

ポン＝ボルン

噂の親父　ズの最後の一人。

奴を慇懃無礼と呼称するのは京香のみだが、あえて誰もソレを止める奴はいない。

ポンに告げ口して遊びたいとか間違ってないわなとかいうあきらめにも似た感情をもってるからだとかそんな…（汗）

家族大事のホビット族の親父。

15人の子持ち、嫁あり。

慇懃無礼サドだなんて後が怖くて誰もいえないよ。

京香のことを変人と呼ぶ。

家訓は【腹が減ったら働きなさい】【言われる前に動け】【目上

の人は敬いなさい】…。

最近その家訓に【変人は真似てはいけません】と追加するべきじゃないかと密かに悩んでいるらしい。

【ホビット族の慇懃無礼】。

67 彼女と彼の、岸边 其の四

封の岸には守がいる。
ソレすなわち、極地であるということぞ。

「あざーっす。お邪魔しまーす！」

どかどかかと音を立ててというつもりはないが、とてとてとてという程度には威勢よく進入する某小娘。

「……あっ、あっ、あっ！ 嘴くちばし痛い痛いやめてお肌に穴あなが開きます
！ あっ痛い痛い痛いいたい」

「……」
「……」
「……」
「……食くわれるといいのにな」

ぼつりと絶好調な子だくさんな親父が言った。（ちなみに奴の年齢は30歳だ）

岸守の一族、胡鳥こどり族に突かれる娘を眺める親父たちは今日も安定

した引きつぷりだった。

…止めてやれよ。

ばんそーこーはどこですか。

お肌がひりひりするので、ポンの嫁こに消毒してもらいました。
滲みまう。

嫁こは出産後で疲れていたので付き添っていたポンの妹にぺたぺたばんそーこを張ってもらいました。

ポンの妹と嫁こは実によいオナゴである。

なのに、どうしてポンの家族なのかそこが不思議だ。奴は慇懃無礼サ（自重）なのにな。

ひりひりするお肌と怖ろしい嘴へのトラウマを新たにしつつ、もう一度岸守の一族のもとへと連れて行かれる篠原京香。
消毒液の匂いがくさいですと彼女へ苦情が寄せられるのはその数分後である。

あたし連れてきたの、あんただしっ！！！！（涙目）

【噂どおりの阿呆じゃ】

【全く】

目の前のコトリがひどい。

ただいま現在、二羽のコトリが線対象になるようなポーズでこちらを見下ろしています。

二羽のコトリの正体は、現岸守であるグロツク＝スロウと岸守の控えであるウィ ド＝スロウだ。

【よいか、その阿呆】

【境界は大切なものじゃ】

【そこへ道理も通さず、侵入するなど】

【言語道断】

【許すべからず】

【ここは城守どのの顔を立て】

【忠告のみにて見逃すもの】

【次はないぞ】

【心しておけ】

「はい」

拳手して良い子にお返事。

嘴怖いしね。

【……………】
【…語尾を伸ばすでない】

「はいなっ！」

胡鳥族の岸守たちは、お互いに依存し過ぎだと思っんだ。

一言ずつ交互に言いあうってどんだけ！！！！

本日の覚書

胡鳥族^{ことり}。

封の岸の岸守の一族。

海鳥のように甲高い声と大きな嘴が特徴。銀白色の羽をもつ。
ホビット族とはお互いに独立した生態系を保持。
風車に関してのみ、両者は協力しあうとか。
風詠みの一族にして、墨海の壁。
…じつは、京香は個人的にこの一族が苦手であったりする。

ホビット族

いわずとしれたホビの一族。子たくさん。
封の岸に咲くリアナの保持者である。
農夫の一族なだけといったらそれまでなんだが。
種族的特徴は低身長と巨大足。

68 彼女と彼の、岸辺 其の五

岸辺に咲いたは白い花。

暗青色の人工湖の水には、その花の色は写らない。
なぜなら、湖はとても深くて、とても冷たくて、とても狭いから。

人工の湖【搗^{つき}】には、天地を貫くよな杭が一つ刺さっている。

その杭の名を、誰も知らない。

三猿つてご存じ？

あれだよ。

見ざる言わざる聞かざる。

どごそのKYあるいはチキン、どっち？ みたいな。

お前美味しいこと言った！ 日本篇（江戸時代ver）のアレ。

某泣くまで待とうな計画犯的Sの彼の神社で有名な猿の事です。
有名よね。

間違いない。

なので、あえて誤解をおそれずに言ってみただ。

「『猿の杭』でよくな?」

【.....死ぬるか?貴様】

コトリは今日も怖い。

封の岸にある湖は一つしかない。

ちなみに、それを初めて見た時の京香はJAROはどこだろうか
と思索したものである。

「だって、『見えない感じない意味がない』の3N杭だよ? 猿で
いいよ猿で」

3N繋がりでもいいじゃないか。

「知らん」

「意味がないは流石にどうかと思うんだが」

「5N怪人が何を言える立場ですか」

親父ーズが京香の説明に不平をぬかした。

ちなみに、ポン助がぬかした5Nの中身は『空気が読めない品がない自制が効かない脈絡がないそして何より頭が足りない』である。もちろん、ポン助から見た篠原京香の評価だ。

… 真実だけに誰のフォロワーもいまのところ不可能だ。

神の遺産とも言われるものに対して意味がないとまで抜かす奴には、一族を招集しつつあるコトリ族の長どもからの私誅が下されることだろう。

嘴の恐怖には更なる進化が存在することをいまの京香はまだ知らない。

神話より存在する杭の姿は誰も知らない。

ソレを見るには、ギフトが必要だ。

『神からの贈り物』。

ソレをもつものは、この地にはいない。

「お手伝いでもしましょうかねえ」

ぼつりと呟いたのは、ほんの少しの気まぐれと。

たったひとりの親友がくれた呪いのせいだ。

本日の覚書

ギフト

『神からの贈り物』。

多くは先天的な特殊能力。

稀に、後天的に発生することもあるが、現在はほぼ先天的なもののみとなっている。

ポン助

ポン＝ボルンのことを、たまに京香はこう呼ぶ。

本人にばれると容赦のない脳天蹴りを喰らうので注意。

どうやったたらあたしの頭まで飛べるんだよ、このどちびがあああああああ！！

二度目の脳天蹴りはこうして連続発生する流れ。

いつでも美味しい天井コンビ。

69 彼女と彼の、世迷言 (前)

世迷言。

訳の分からないこと、馬鹿馬鹿しい言葉、などの意味。「世迷い言」とも書く。

「大体において、だよ、イスランくんや。それこそ人生2回分の年齢差のある手弱女に対しての初接触がディーブな口吸いというのは、どうかと思うわけだよ、あたしは」

「……突っ込み待ちか？ その発言は」

年齢3桁の魔王にしては若年だが、人にしては超超高齢な彼が突っ込んだ。

「ましてや、おまえのそのどうかしてると思うような小綺麗な顔に真っ赤な血垂らして、美味かったみたいないい笑顔でこっちを見られて見る。どこの吸血鬼だこの黒男！と思ったあたしの何が悪いというのだ!!」

「思ったのか……」

今さらながらに知る彼女のあの時の本音は思ったよりもがっかりであった。

吸血鬼はB級映画にもよく出演するので、そこまでは彼にとって

はまあ悪くない流れであつたのだが。

「しかも笑顔で言い放った言葉！」

「……………」

無言で彼は手元の真つ赤なグラスを啜る。今日の血染酒グラナダもなかなか美味である。

『 あ、呪っておいたからな、おまえのこと』

逃げられると思うなよ？

「貴様の血の色は何色だ!!」

「赤で悪いか」

魔王は堂々と言い放った。

今日も魔王城の酒盛りは楽しい。

「ましてや、てめえの弟もどきは出会いがしらに火噴き放してくるし！ あたしは悪くないあたしは悪くない！ 悪いのはこの魔王だ！ いきなり『こいつ侵入者だけど友達になつたから』発言ぶつ放して警戒注意から攻撃認定にまで周囲の人間煽り続けたこの黒男がすべて悪いんだ!!」

成人後の酒呑みの練習相手にその黒男を選んだ彼女に文句を言える筋合いはない。

というか、愚痴る相手にするために選んだんだろうか。

……悪い酒は覚えちゃ駄目だよ？

「おまえも相変わらず無防備なバカだからなあ」

HAHAHAHAHA!

ああ、魔王様のオタク化が進んだ証拠か。

笑いがアメリカンになっている。

「だが、いいかげんに五月蠅い。落ちろ」

「！」

魔王は眠りの魔法を使った。

異界渡りは眠った。

「うむ。血染酒23年もの。なかなかいけるな」
次は蒼氷酒スレッシュにするか。

… 貴様の血の色は何色だ。

本日の覚書

魔王は容赦ない。

本日の覚書？

グラナダ
血染酒

紅い酒。

暗いほど苦みが増え、紅い程甘みが増す。
酸化すると暗くなる。

スビッツ
蒼氷酒

蒼い酒。

透明度が高い程アルコール濃度が高い。
お勧めはロツク。

70 彼女と彼の、世迷言 (後)

「…じゃあ、ちょっと出かけてくるわ」
「行つてら」

二日酔いで悲鳴を上げる京香の言葉に、軽い口調で魔王は述べた。
…おかしい。こんな男だっただろうか、この異世界の魔王どのは。
己のしてきたことを棚に上げて悩む京香だった。

「…ちょっとはカッコつけようぜ、イスラン」
「部下に見せるカッコはあっても、二日酔い中のダチに見せるカッ
コなぞ持った覚えはない」
「……………」

否定できないあたりが類友だなど、京香は思ったりしてみた。

今日の朝ごはんは、Mつちの渾身メニュー殿堂入り激辛カレーだった。

朝から食えるか！

「うつつ、果物がアイスが欲しい。お口の中が痛いよ」
あ、頭も痛い。

…食べたけどな。

「……なかなか凝った報復だな」

ちなみに魔王さまのカレにはサラダとパンと牛乳がセットでついていた。京香は大盛特製カレのみ。

間違いなく、標的は片方のみだ。

「いやですね、魔王さま。ただの偶然ですよ」

いつだかのご友人さまの好みのレシピを再現しただけです。

給仕もこなす調理人がすつごくいい笑顔でそう答えた。

答を聞いたその主は、何も言うまいと沈黙を守った。

今日も京香の周囲には、彼女のためのSが多い。

昔の人は適材適所と謡ったものだが、よく言った。

敵S的M。

間違いない。

しかし、あまりにMPが足りない。

二日酔い＋胃腸の不具合。

なんとというアンチパーフェクト。

目的地にたどり着く前に溺れそうだ。

「癒しが…癒しが、足りない！」

ひよひよと鉄板の上で踊るお好み焼きの上の鰹節のごとく、力弱く呟いた京香であった。

「…仕方がないな」

頼んでもいないのにイスランが近づいてきた。

顔面にはいつもどおりの平常埋け面が浮かんでいたが、その裏では何を狙っているのやら。

絶賛体調不良の京香には、残念ながらそれに気づくことは出来なかった。

「うあゝ？ なんぞ？」

だるだると顔を上げた京香の前には、某（腹）黒男が一名。

距離はまさしく0。

「俺様が癒してやろう」

楽しげに顎を掴んで顔を固定された。

魔王なんざ大嫌いだ。

何があつたのかは、えてして語るまい。
（笑）
酒に負けたダチは遊んでなんぼ。

本日の覚書

魔王 は セクハラ を 覚えた。

本日の覚書？

Mっちの渾身メニュー殿堂入り激辛カレー

カレーが食べたい京香がレシピ片手にねだった異世界コラボ料理の一つ。

使った香辛料の種類は58種！

黄色ではなく黒色なあたりが摩訶不思議な異世界風カレーである。
…レシピ変換するのに、凡そ3ヶ月かかったとかかからないとか。

71 彼女と彼の、代行業 其の一

お客さん、どちらまで？

昨今のタクシー業界は、高年齢者が良いお客様だと聞いた。しかし、吾輩は若い子の方がいいのである。

さて、仕事だ。

ぶつちやけた話、件のゲートが機能してりゃあこんなことはせんでもよかつたんだがなあ。

ぶつくさと思う今日この頃。
自分で言い出したこととはいえども、不満を言いたくなるときだつてあるんだい！

「親馬鹿子馬鹿」を額に飾る。

レイちゃん渾身の迷作魔道具『親馬鹿子馬鹿』は蜘蛛の糸ほどの鎖によって編み込まれたc l o w nの形をしている。

これの素晴らしいところは、手順どおりに折りたたむと小指の爪

ほどの大きさにまで圧縮されるところにある。

ちなみに色は銀色だ。

一部に黒色でf o o l的意味の文字を浮かばせているのはシャレなのか仕様なのかそこは不明だが。

とにかく、これのおかげで無意味な同一世界における位相転移に挑む必要はなくなったのである。

有難や有難や。

さ、テレポだテレポ。

仕事しよ。

「おまた！」

「……………」

本日の出現場所は、予定通りに封の岸は搗の渚。
リアナの花の咲く岸边である。

「若いぴちぴち少年の修理屋さん一名、ごあんない！」

事前に吞んでた陸上適応仕様魔薬をガブ呑みしたおかげでなんとか地上でも起立独歩可能となった若いぴちぴちボーイをお連れいたしました。

ちなみにただいまぴちぴちボーイは、蒼い顔で地面に座り込んで

おります。

転移酔いした？ まさか。

「お客さん、踊り子さんに触れちゃあ駄目ですよおおお？」
ぴっちぴちの若いお肌は確かに癒されますけどね！ てへ！

「「「「「.....馬鹿がいる「「「「」

目の前に並ぶコトリ族、ホビット族、ついでに親父　ズの連中に
怒涛の冷たい視線攻撃を受けたことはいうまでもない。

…短いな。

ストレスがたまると道化になって発散する。
これが京香の処世術。

門があつたそうな。

しかし、それは現在機能していない。

電池切れした懐中電灯みたいなもんで、役に立たないのに捨てられない。

だってまた使えるかも知れないからさ、…そんな感じ。

そんな扱いの門は本当は大事だったと。

そついうことなんだよね。

「うう、ひどい揺れつす。 ひどすぎつす、変態さん」

「二回もいうな」

そして、その呼び名は決定かきさま。

「大事なことは2回言うもんつすよ、変態さん」

くっそ、訓練されたオタクめ。

真顔で言いおつた。

【…クラフト・オギナか？】

【…これはまた若いのが来たな】

コトリ族の二大というより二対の長どもが怪訝そうにこつちを見ている。

「年寄りに陸地順応はきついということ、若いのを用意してもらったんです！」

わざわざ来てもらっておいて言える立場か貴様ら！

しつかりと後ずさった胡鳥族には説教したい京香だった。

二日酔いのアンチパーフェクトをひとさまには決して言えない手段で回復されたあと、御津の大裕に転移。

そこで事前に予約しておいたぴちぴちボーイに魔女の妙薬を呑ませ、再びの再転移。

辿り着いたのが、封の岸。

いまかいまかと待ってたはずのお迎え集団の冷たい目線に、か弱い乙女としては苦情の一つも言いたいところさ！

「…遠い場所からわざわざ来てくださったことを感謝するよ。
若きクラフト・オギナ」

初めに手を差し出したのは、リアナの農夫 ホビット一族のポ
ン＝ボルン。

「あなたを待っていた。 ギフト持ちの【クラフト・オギナ】。
初めまして、そしてありがとう」

「初めまして。……こちらこそ光栄ですよ。【沈黙の杭】を間近に
診させていただくことがゆるされたんっすから！」

差し出された手をなんの躊躇もなく握るのはクラフト・オギナの
エース。

門はなくとも、世界は回せる。

水は深きに流れ落つ。

風は広きに散じ舞う。

天地は力強く循環する。

神様がいなくても、世界は生きたい。

「二枚貝」と「転移術」と「岸边」と「世迷言」。
ようやく集結である。

本日の覚書

【沈黙の杭】

クラフト・オギナたちに伝わる杭の呼び名。通称。正式な名称ではない。

神寶の一。

過去には門を通って、クラフト・オギナが定期メンテナンスやつてました。

ギフト持ち以外には、基本的には見えない不可視の杭。気付かずに頭をぶつけないようにご注意ください

「なるほど。 力の循環の一部が固化狭窄しているんすね」
そのせいで水の環流に影響が出ているんすよ。

ちやぷん。

水の音が小さく響いた。

今いる場所は、人工の湖【搗つき】だ。

陸地に順応するために、肌や足齧を硬化させた彼は、その湖とは名ばかりの深井戸に潜ったままでそう述べた。

深く、冷たく、狭い。

そんな呼称が似合う場所を湖と呼ぶことこそ詐欺じゃないのかと思っただが、何故かこの場所は常に湖と呼ばれ続けている。

公称とはかくも頑ななまでの強制力をもつものなのかと思っただけ、ただの異界渡りの戯言だ。

「こちらからの要請を聞き、古老たちより過去のメンテ内容などを聞いてきましたが、どうやら以前の対処法によって対応は可能と思われるっす。 ゲート空骸化以後のメンテが十分に行えなかったことによる弊害なんでしょう」

【……ゲート、か】

【……封鎖よりすでに190年イアが経っている。あれが機能せぬ限り、今回のようなことはついてまわるといっことだな】

【……難儀な】

「……修復にかかる期間は、予定では10日デリ程の見積もりになりますが」

……。

ちらりとこちらをみた彼の目線に頷いた。

【……よろしくたのむ】

【……できうる限りの保証はいたそう】

ですから、どうか。

コトリ族の長たちが答えた。

京香にとっては珍しい、真摯な表情を浮かべて。

「……はい。全力を尽くします」

そんな彼等に応えながらも戸惑うラテン・クイナの表情は、京香をみつめていた。

風が吹く。
花が揺らめいて。
水に紋様が生まれて消えた。

「大丈夫よ。帰りもしっかり連れて行ってあげるから」
おっそろしく不味いけど、おっそろしく効き目のよろしいレイちゃんのお薬も用意してあげるわ。

そんな彼に片手を振って。
何でもない顔で京香は笑った。

「だから、貴方は貴方の仕事をしてちょうだいな」

【うむ。たまにはソレにも働いてもらわねばな】
【ようやく、役に立つこともあったか】

コトリ族の長が嘲るように笑う。
クラフト・オギナの若きエースは困惑顔で沈黙する。
私はやっぱり道化めいた表情でただただ笑う。

胡鳥族の京香への不審は以前からのもの。

そんなもので傷つくつもりなんて、はなからありやしない。
だから、君が私を心配する必要はないのよ、少年。

何を言わずとも眉をしかめてるホビット族のチビ親父くんも。
嫌悪と唾棄の感情を長たちへ向けてる蛇牙族の隻眼男も。
顔色変えずに視線を投じる髭なしドワーフも。

無視していいのに、こんなこと。

だって、私はまだ怒ってない。
私の怒りはそんなことには反応しない。
でも、そうだね。

燻ってるものがあるよ、一つだけ。

いまはまだ、表にはだせないけど。

ねえ、知ってるかしら。 封の岸の守たち。

あたし、貴方たちを許せないことが一つだけあるの。

74 彼女と彼の、代行業 其の四

お約束してた酒盛りは、まあなんとというか。

いろいろと凄いことになった。

なにしろ、京香がボランテニア気分で連れてきた少年を搦に投下したあとの酒盛りである。

子沢山なホビット族の自宅ではできまいと、ちよっくら月見気分をかねて、封の岸の丘の近辺へ移動しての酒盛りだ。

そして。

愛玩道具代わりに、そのへんをうろろしていたスライム捕まえで抱き枕にしたのは京香である。スライム超いい迷惑。

「……」

「……」

「……」

「沈黙反対」

目の前でもくもく酒を呑む親父たちに突っ込んだ。

人がせっかくお買い上げてきたSAKEを不味くしかならんよ
うな呑みかたで呑むな、ど阿呆ども。

「……時折、どうして奴らが岸守きしもりなのかと思うんですよ」

「……」

しぶしぶと口を開いたのはポン・ポルンだ。

まあ、実際問題同じ場所で住んでるからね、親父 ずの中では一番思つところもあるんだろう。

「ある意味、守らしいとはいえるんじゃないのー？」

異邦人をそう簡単に信用しないってのもある意味守としての責任感みたいなもんでしょーし。

にへらと笑つて、正しい見解を述べてみた。

「どこが守らしいー！」

ただの偏屈だ！

ミニ くんが叫んだ。

男らしい怒り声なこと。しかし、もう少し音量は押さえようよ、連中に聴こえようもんなら洒落にならん。おっと、スライムたん逃げちゃ駄目。

うづうづと無駄な抵抗をしている代用抱き枕くんを抑え込んだ。

「というかよー、京香はなんでおこんねんだ。いつものおまえなら、とつくにキれててもおかしくねえだろー？」

ロドムのおっちゃんが呟いた。

そして、珍しく口の周りに黒々としたちよこ髭が発生していたりする。

……どわーふ、おひげのびるのはつやーい。(幼児読み)

出先のせいも十分に夕方のおひげそりが出来なかったのだろう。

マイ剃刀も持ってくるの忘れたみたいだったしねえ。

「うーん、まあねえ。そらまあ、いつものあたしだったらすぐに怒ってますけどもさあ。」
んんんん

あ、肩鳴った。

ばききと、ぽよぶよ蠢くスライムたん捕まえたまま、器用に肩を鳴らした京香。

「ポンたん、その焼きフラちようらい」

「私はポンたんでもありません」

ポン助だとかポンたんだとか勝手に名前をつけないうでください。

「ほいよ」

「うぐ。はぐぶぐんぐ　んまい」

円座の中央に置いといた酒肴のなかから、炙り焼きにした干しフラップを指定してみた。

ポンたんは勿論とってはくれなかったが、最近微妙にかゆいところに手が届くくらいに気を利かせてくれるミニくんがつまんでちぎって京香の口まで運んでくれた。

うん、美味い。

しかし、なんだろう。……この人一体なにがあっただらう、本当に。

心の中で最近のミニくん気味悪いなどと思っている京香はそろそろ痛い目を見るべきだと思つた。

はぐぶぐはぐぶぐ。

噛めば噛むほど味が出ます。うまいわー、この自家製干しフラップ。いやあ、やるねえ、嫁ごさま。

「……………」

「……………」

「……………」

「むぐ、っん。 ミニ くん、おかわり」

「…おっ」

「待て、やんなミニ。 」

没収

「ああああ、あたしの干しフラー!!」

おのれ、おっちゃん。あたしの僕（京香は冗談のつもりでも、実はある意味間違っていないところがミニ くんの哀しい立場）から、ポンの嫁ごの手間暇かかった干しフラを奪うとは許せん！

「答が先だ。 なぜ、胡鳥族を放置する？」

「おやおや、ロドムのおっちゃんったらお目目が真剣。こわいこわい。」

「ついでに他2名の眼もこわいったらもう。」

「……………」その一、歪に影響受けてる連中の相手はめんどくさい。その二、嘴こわい。その三、少年の方を愛でるのにいそがしい。その四……………」

「どがっ!」

「……………」ロドム、酒がこぼれる。 地を割るな」

「……………」やあ、ロドムのおっちゃんの御愛用の大槌が地面を割っております

す、やめれ自然破壊。

「で、なぜ胡鳥族を放置する？」

「ひどいこのひと、二回言った」

あたしいま説明中だったのに。

どどがつー！！

「なぜ胡鳥族を放置する？」 「ぶっちゃけ、奴らにそこまでの価値がないからです大将」

レスポンスTimeなしで返す。

だから、最近のこの流れはどうにかならんのかと脳内補完でぐちぐちぐち。

まさかの最後の誓のロドムのおっちゃんのS出現。

いえ、いいんですけどね。

だって、ようはただの逆ぎ…。

「……あ？」

何だと？

「いえなんでも」

だから、このSに虐められて終わる展開、やめよーぜー、もうそろそろ飽きたー。うえーん。

ロドムのおっちゃんの沸点越えがこわーいでーす。

本日の覚書

フラップ

封の岸において日常的に食される魚。

表面黒色（保護色）、内側真っ白のお魚で、墨海の側で採れる。

小骨が多いので、開いて塩振って干したもの（干しフラップ）にして、各ご家庭における保存食代わりにされている。

ついでにいうと、墨海の塩は青灰色がかってららしい。

75 彼女と彼の、代行業 其の五

酒の席では酔いを理由にいろんな言葉が浮き立つわ。

だけど、ご注意。

どんな言葉にも棘と種が潜んでるから。

旅立つ言葉は誰を傷つけて誰がどう育てあげるのかわかりやしない。

常に傍観者の席で過ごすはずのおっちゃんに怒らりた。

ん〜ん〜んん〜。

鼻歌でごまかすには限界がありました。

ていうか、実はひそかに照れている。

だってさー、気にしてくれてるってことじゃん。

いやあ、あたしのために怒ってくれる君らはよい友であるよ。てれてれてれ。

「コトリ族というか鳥類の帰巢本能が何を元に機能しているのかわってる？」

「さあ？」

「しらん」

「……………」

三者三様、ただし意味は同じ。
そうだよな、知らないよねえ。

基本的にまだ詳細が確認されたわけではないんだけど、地球においての鳥類の帰巢本能、あるいは渡りにおける能力は「地球磁場を感知する能力（磁覚）」であると言われている。

身体のなかに方位磁石をもってるわけですね、獲得能力ではないんだろっような勿論。すごい。

では、この異世界においてのソレははどんなのかという点。

「胡鳥族が岸守であるのは、もっとも搗の杭に影響されてる一族であるから、なの」

「は？」

「？」

「…杭の影響ですか？」

にこりと笑って説明してあげる。

親父ズのことだ、酒に酔い潰れる可能性は尽く薄い。（いや、若干一名想定外の蛇がいるけどさ）

だったら、酔っ払いに詰め寄られるリスクは回避したいのである。そこ、それくらい我慢しろいわないっ。

「正確には杭の穴だけだね」

まあ、ほとんど同意義だから、気にする必要はないわ。

胡鳥族は、鳥類のそれとほぼ同じ習性を担っている。

ポンッポルンたちホビの一族が農に特化した種族であるそれに対して、胡鳥族たちは漁に特化している。

生息地（寝場所）は封の岸の風車。
生息地（エサ場）は墨海の近海のうえ。

方角を感知するには、杭の穴から発される星の導きに頼
ってるなんて。

「まあ、マイナーすぎる話すぎて誰も知らんわな」
そんなこと。

ぼりぼりぼりぼよん。
頭を搔いてたらスライムたんが逃げだした。貴様まだ諦めておら
なんだのか。

何度目だかのスライムたん逃走捕獲作業を行い、酒の友を振り返
ればそこには見事に鳩に豆鉄砲うつたかのごとき表情の親父ーz。

あらあらあら。

あたしまだ 胡鳥族鳩 に 豆鉄砲 撃ってないよ？ マイフレンズ
???

本日の覚書

胡鳥族？

封の岸に生息。岸守の一族。

姿形は銀灰の鳩（大）である。

稀に3本脚の胡鳥族が生まれることがあり、神（笑）の寵児として守に選ばれることになるらしい。

ぶつちやけ人語を解する鳥。

封建的人種っぽい？

現岸守であるグロック＝スロウと岸守の控えであるウィド＝スロウは双子（3本脚）。

76 彼女と彼の、代行業 其の六

君は何を望むのだろう。

私に、

何を。

眠る魔王を見つめていた。

今日も今日とて、返還の儀式は行われた。

疲れ果てて、まどろみに眠る君を見つめて、その心の中を疑う。

眠りのなかで、彼は夢を見る。

それは美しい空であり、海であり、大地だった。

それを京香は覗いたことがある。

見慣れない大地に、満ちた豊穡、涙がこぼれたほどの美しい夢。けれど、それは存在しない。

破綻した楽園。

城守と彼等が呼ぶ、魔王たちの記憶に残された過去の夢。

神様が夢見た世界。

始まりのうてなの夢。

世界の各所に点在する極地とその守。
機能する神寶のそれ。

巡り、結ばれ、実った、世界の夢。

美しい、と素直に思ったことを覚えている。

この世界は美しかった。

この世界は守られていた。

過去形でしか語れぬそれを、彼女は　。

「……………寝よう」

覗き見た夢の終焉を知らぬ間に、彼女は眼を閉じる。

暗闇のなかで、彼女は彼女の夢を見始める。

彼女の、世界の、夢を。

知識を智慧に。
智慧を知識に。

そうして、世界は廻っていく。

では、
異世界の知識と智慧を知るものは何を廻すの？

それが、運命だとか宿命だとか、そんな馬鹿な解答しか導き出せないのだとしたら。

あなた、お願い。死んでちょうだい。

無意識に震えた自分の身体を叱咤して、京香は夢の闇に落ちた。

この世界は、
怖ろしい。

本日の覚書

異界渡りは
は たまに
この世界
を 恐怖
する。
。

76 彼女と彼の、代行業 其の七

酒盛りのもと、自宅へ帰って翌日からの仕事もこなして。それからこの異世界に京香が訪れたのは、約束していた日。

なにしろ、^{ゲート}転移門は閉鎖されたままだ。

墨海あたりは、移動式拠点とも言える深津の大裕の想定移動ルートには入ってはいない。

故に、ラテン・クイナの坊やがお家へ帰るには自力では困難なのである。

なにしろ、あの二枚貝くんを捕捉すること自体が基本的に無謀なのだよ。ステルスが入ってるようなもんだからね、海中にいるときのあれは。

何のための隠密機能なのかと不思議なことこの上ない。

「Hi! 元気してたかい？」

少年っ！

「お久しぶりっす変態さん」

「相変わらずの真顔の無礼っぷりにお姉さんは安心したよ」

礼儀正しく会釈した坊やの呼び掛けにお姉さんはドン引きだ。

貴様はあたしの敵か？

見上げれば、空高くに鳥が立ち、風が巻いている。

「メンテナンスは終了したのかい？」

「はい。環流は上々維持、固化していた不要のdropも全

て採取済みです」

「へえ、大分溜まってた？」

「ええ。これだけあれば、大裕さまのマイナー整備にも使えそう
嬉しいうす」

本気で嬉しいらしい蛤くんの忠実なファンが胸の前にしっかりと結
んだ包みを見せた。

その中には今回の戦果が包んであるらしい。

「たしか、ハイエネルギー高燃料への変換ができるんだよね、この固化した石で」

「よく知ってるっすね、変態さん」

「ははは、オタクと呼んでも結構よ」

何しろ、レイちゃん情報源がチートだからね。

「わかりましたっす。今度から変態オタクさんと呼ぶっす」

「前言撤回させてください」

変態のオタク呼ばわりなんて勘弁して。

……。
……。
……。
ちーん。

いじしえ
古の表現方法でごめんなさい。

そういえば、この元ネタがどこにあるのか忘れたなあ。たぶん鉢巻きして屏風のなかの虎を追い出してとか真顔で言ってた可愛いキアラのアニメだったと思うんだが。

「変態さん、どうしたんすか？」
いま光ってたっすよ。

不思議そうに聞く少年はすでにお郷へ帰る準備が終わっているようだ。

沈黙していたあたしの行動にまでチェックが入るとは予測の外である。

「真実はいつでもひとつ！」
「なんのことがわからないっすよ、変態さん」

疑問符を浮かべられたらいうべき一言がつい溢れた。
うむ、次回の劇場版はどんな話なのか今から楽しみである。

「様式美よ、少年」
「様式美っすか」

それじゃあ仕方ないっすね。

日本語の髄を表現する言葉に納得する少年をみると、オタクは万国共通だなと思う。

いや、大切ですよ？ 様式美。

話が進まないけど、こんな莫迦話が好きだから。（終わってる）
大丈夫だよな？ 著作権。（びくびく）

78 彼女と彼の、代行業 其の八

この世界の神は消えた。

アンダースタン？

だが、此の世にその神の遺したものは存在している。

アンダースタン？

その神寶のうち、機能の維持が出来なくなったものうちに転移門がある。

アンダースタン？

あたし、篠原京香の持つ能力は転移にある。

言いたくもないけど、ご理解いただけました？

転移門は世界の各地に存在する。

ただし、各極地、あるいは各種族の生息地の周囲にだけは存在しない。(といっても、某種族はいつのまにかその周囲に村やら国やら作っておつたらしいが)

元々は種族関係なしに使用できる便利門であつたからだというのは、たしかレイちゃんのおバカでも判る世界の歴史講座のなかの一文だつたはずだ。

「今回のメンテナンスは終了したつすが、あくまでも一時的な処置です。定期的にメンテナンスはした方がいいつすよ？」

最終日。

コトリ族とホビット族。

封の岸の代表者が集まる中で、坊やは言ってくれた。

言わないでほしかったなあ。

「今回のようなことは、沈黙の杭が稼働するかぎり起こり得る事態です。古老たちの資料にも神つ世のころから同様の処理は施されていたとあつたつす。今回はさすがに門の封鎖以降の処理のため時間がかかりましたが」

気づいているのかいないのか、あるいはただの職業意識の為したことは不明ですが、可愛い坊やは自らの首を絞めています。

おおい、もうそろそろ我が身を大切にしまえ、少年。こき使

われるぞ？

【ふむ。 それでは、同じようなことがまた起きると】

【そういうことですか。…難儀な】

コトリ族（双子）が喋っている。

嫌な予感しかない。

【申し訳ないが、クラフト・オギナのラテン・クイナ殿】

【こたひ今度のようないことがありましたなら、再び整備を依頼しても宜しいですか？】

名誉棄損で訴えたい扱いを常々つけている京香にとっては、おまえら誰だよとつっこみたくなるような下手になった態度でコトリたちが囁いている。

うわあ、レアな光景ですこと。（京香的にレア）

そして、やっぱりこの封建主義的視界の狭さに定評のあるコトリ族は指名したぜ。

ラテンの坊や、食われるなよ。

「…………え。 ……まあ、こちらとしてはかまいませんっすけど…」

ちらちらソチラ。

という感じで、少年がこっちを見てくる。

なあにどうしたの？ 別にお姉さん怒ってないよ？

「ただ、移動と魔薬の用意に関していうなら、変態さんに協力してもらわないといけないんっすけども」

…そのへんはどうなんでしょうっすかね？

困った少年がこっちに話題を振ってきた。莫迦なの？アホなの？天才なの？？

…まあ、予測はしていたんですけどもね、この展開。ふっ…（遠い眼）。

今回京香秘伝のおねだり攻撃でレイちゃんからゲットしてきたのは、魔王城近辺における魔土靈草から抽出した秘伝の靈魔薬。

ヴィルギン 深原族を含む水棲をメインとする種族の肉体を一時的にはいえども、陸に適応した生態へとチェンジさせるというおとぎ話的劇レアな魔薬である。

あたしが伊達にレイちゃん大好きなわけじゃないわよ！ 魔女のお姉さんはそれはとても素敵な出来るヒトなんだからな！

と、勝手にどや顔したくなる魔女のお姉さん大好きな異界渡りが一名。間違えてはいけないのは創った彼女が素晴らしいのであって、ねだった異界渡りが素晴らしいわけではないという事実である。

別にいいじゃんか、おねだりして素直に用意して貰える立場にいるのなんて、たぶんあたしとイスランくらいだよ？ どや顔してもいいじゃんかー！

余談ながら、ジエムつちやラくんあたりが同じことをレイちゃんに頼もつとすると多少の取引を要すると思われる。そのへん、あの連中はしっかりしてるからな。

そして、復唱しておくが。

…転移門はすでに機能していない。

封の岸には大裕の想定移動ルートには含まれていない。

彼がこの岸边へと辿り来るには、転移を用いるものがないくはコレないということだ。

転移の能力。

魔薬の存在。

この二つをどうにかしないことには、定期的な沈黙の杭の整備は
実質不可能だと。

そういうことなんだけどもさ。

…うん、こいつらどうしてこうなのかな？

【なに、その輩を使うがよろしい】

【奴にはそれくらい働いてもらわんとさ】

……そろそろ、あたしキレるべきだと思っただがどうだろうか？

本日の覚書

大裕の想定移動ルート

御津の大裕は、海中を移動する一枚貝だが、その海中の移動ルートは決まっている。

海拔の上下、方角の東西南北、渡る港（という名の各生息地）の数はそれぞれ異なる。

移動ルートの数が多いようで少ない12ルート。

この移動ルートは選択は出来るようだが、決まったルート以外に新たに設定し直すことはできないらしい。

全てのルートに共通して、出着点は海底にある極地【水泡の宮】となっている。

79 彼女と彼の、代行業 其の九

喪われたものは一体どこへと消えてしまったのだろうか。

朽ちたものの果てに生まれたものが、苦しみや嘲り、差別や排他の心なのだとしたら救いがないことこの上ない。

怒りならよかったのに。

怒りは次の行動へと進むための情熱を生む。

素直に素直に、ただ溢れる感情のまま、未来へと進むことを模索する力にそれは変換できただろうに。

どうして、心はこんなにも偏るのだろうか。

「まっすぐに進むことは難しいね」

「ん？」

いつのまにやら心にぼつんと生まれていたその言葉が、つい音に変換されてしまった。

手元にはアイスクリーム。

お味は黄金の梨を粉砕してライハン種牛の乳とミックス。それをジエムつちお得意の熱吸収魔法で冷やしながらかき混ぜ混ぜの繰り返しで作成された今日のおやつである。

透明なグラスに盛られたそれには、香りつけのハーブの葉が一枚飾られていて、とても可愛らしく出来上がっている。

とても美味である。

小さな匙にて掬いあげて、口のなかへと運ぶと幸せがやってくるという塩梅だ。

ジエムつち最高！と叫んだのは、一杯目のアイスを完食したときの京香である。

「何を言い出した？ 今度は」

ところで、それは俺の分じゃなかったのか？【黄金の梨アイス】。

今月のルーチンワークの一つである書類（？）仕事をしていたいスランは、どうやら京香の呟きを合図に一時休憩へとときりかえたようだった。

読み込んでいる途中だった吸血鬼の長からの小玉（ピンポン玉くらい）の大きさ。魔族たちはこれで、情報の収集、蓄積、算定までを一気にこなす。初期化から仕様の設定・変更までのメンテをするのはとある魔族が有料でやっているらしい。職人乙）を、指定の場所へと戻したイスランはその玉座を立ち上がった。

魔王陛下の玉座つつーか、謁見の間にてお仕事していたイスラंकくん。

そんな彼のしちめんどくさいお仕事風景を流し見しつつ、あたし専用のソファに寝そべって食べるおやつの幸せなことよ。

邪魔だと視線でよく語られるこの京香専用ソファはむしろ、そのためにこそココにあるのだ。うん。

ちなみに、時折魔王城へとやってくる勇者さまとやらがこのソファに突っ込みたいのに突っ込めなくてしばし行動がフリズするらしい。

え？ 駄目なの？ いいじゃないかその隙にヤッチまいなよ

笑顔で告げたら、「そんなことせんでも、余裕でやれるわい」とどこかの両性類に鼻で笑われました。

そらそーか。(納得)

「うーん？ まっすぐに間違えない行動っていうのは難しいって話さー」

近寄ってきた魔王さまにアイスを一口献上して、お話はそこでおしまい。

「うまいな」

このアイス。

「でしょー…?」

心はどこまでも偏るでしょう。

右に傾いた心は、右へと傾いたまま。

左へと傾いた心は、左へと傾いたまま。

涙と諦めと不満に溺れた心は、喪った未来の夢を見失っているか
ら。

心はどこまでも偏るのです。

本日の覚書

黄金の梨アイス

異世界コラボ。胃の友コンビが粛々と作成したジェラートの一つ。クラッシュした黄金の梨に、ライハン種のミルクを使用。氷魔法よりも熱吸収魔法を使ったがるジェムっちは何気に魔法マニアでもある。

ちいたま
小玉

宝玉の一種。簡易宝玉《オウ》。

異世界におけるパソコの代わり。

探査魔法と提示条件魔法、その他各種の数式魔法によって作成される。合成魔法による魔道具。

容量のサイズによって、小玉・中弾・大珠・極霊がある。

ピンポン玉サイズのことを指して小玉と称する。

特殊技能として初期化から仕様の設定・変更までの加工・メンテナンスする能力を持つとある魔族がいる。（有料）

人間にはただの宝石と認識されている模様。

80 彼女と彼の、代行業 其の十

代われるのはここまでです。

あなたの遺したそれを、私が代われるのはここまでです。

名前も知らず、
行方も知らない、

壊れた世界の唯一神に申しませう。

私の存在は、貴方の過去を購うためのものではないのです。

「え？ もうしないよ？」

言ったじゃん、これはただの気まぐれだって。

定期的に魔薬の提供と転移の奉仕を依頼してきた某双子の長にそう告げた。

勝手にそんな当てにされてもこっちが困るし。

【なんと？】

【莫迦なことをいうな！】

【転移を使用せねば、ラテン・クイナどのがおいでになられぬではないか！】

【おかしなことを言うな。まったく…】

【そなたのような異物に貴重な守護を与えた当代の城守は、何を考えておるのか】

嘲るように、現岸守グロック＝スロウの控えにして弟補佐である
ウィド＝スロウが囁いた。

瞬間、目の前が眩んだ気がした。

「どこの嘴がいけしゃあしゃあと述べたものやら…」

何故なら 王が認めた から。

） 臣に、否定は許されない （

「……クルちゃんはこんなにちっちゃいのに、賢くて相手の気持ち
がわかるいい子だね」

…なのに、どうして。

困った表情の異界渡りは、歪な鳥たちを見て呟いた。

「どうして、コトリ族の方々は歪んでしまったままなんだろう」

哀しい顔で、そう言った。

クルちゃんは京香が好き。 (面白いお姉さんという意味で)
食材を買いに来たついでに、京香に挨拶に来たらこうなったとい
う次第。

本日の覚書

クルエルニド

龍人族の少年。

姿は6歳くらいの赤毛薄氷色の瞳の童子。

御年は18歳。

クルエル。クル。クルちゃん。ちびっこ。などと呼ばれてる。

もちろん、エリート。

龍人族の主であるラくんやその保護者的存在である当代魔王に
忠誠を誓っている。真面目っ子。

いきなりの登場なのは、作者がミニマムに餓えていたからだ。

本日の葉書

狂う鳥。

コトリ族の蔑称。

8 1 彼女と彼の、代行業 其の十一

「たぐだいま！」

「おかえり」

ご機嫌の顔で、魔王城へのご帰還である。

素直に我が家へ帰ればいいのと言われても、可愛いクルちゃんを目的地《魔王城》までお連れしてあげたくてたまらなかつたんだもの、いいじゃんかねー。

「ね〜」

「御前失礼いたします、陛下」

お手々つないでたクルちゃんに可愛く小首を傾げて同意を求めたのに、イスランへの挨拶を優先されてしまいました。

…うん、泣いてないよ？

ただ、「ね〜」って可愛く笑顔で首を50度ほど傾けたままおでここつんつてしてほしいだけだよ、細かいお願いだけどしてくれな
いかな？クルちゃん。

「^{ジェールム}長の遣いの身でありますので、早々ながら退去させていただきます。失礼をいたしました」

可愛いクルちゃんは左手に持った食材袋片手に去っていきました。

「あたしの癒しが消えた…」

「とりあえず、俺の膝の上からどかないか？ 京香」
重い。

魔王陛下がご不満だそうな。
女性に「重い」は禁句だろうがあ、うっ！

「事実しかいつとらん」
そして、おまえ磯臭いな。

今日も魔王陛下下つてば、空気読まない。
ワカメで巻いて干瓢で縛って煮るぞ、貴様。

御津の大裕に少年一名を送った後だっただけに磯臭い異界渡りは、
魔王の食し方を思考してみた。

結論は、『煮ても焼いても、食えない』ことに決まっていたけど
も。

「で、どうなったんだ？」

「美味しい。もう一杯！」

今日も異界渡りの夕食は魔王城でだ。

新鮮なワカメうまいです、御出汁が美味しい。

「で、どうなったんだ？」

「痛い。眼が痛い」

目の前の黒男に、今日のメインである網魚の酒蒸しについていた柑橘系植物メルピの果汁を飛ばされたわけです。痛い。

置いてあった手洗い用のポウルで眼を洗い、白いタオルで顔を拭きつつ、無情な黒男に返事した。

「保留」

しばしばするお目目が楽になったあとに眩いたら、目の前の魔王陛下はゆるやかに口角を上げた。

まあ、悪い顔。

「魔王陛下つてば、悪い人〜」

「いい人になった記憶はないな」

友人の返事と思う。

やっぱり、この男は腹黒であると。

「お主も悪よノウ、越後屋」

「いえいえ、御代官さまこそ
ふふふふ。
はははは。

ノリのいい友人って本当に得難いものだね、はいはいはいはい。
はい。

素敵に同類。
やつらはもちろん、時代劇もばっちり見えます。

網魚あみうお

腹まで網目のついた青魚。

御津の大裕にて購入可。（移動ルートの場所、位置によって入手できないことあり）

お勧めはシンプルに塩焼き。

ミルピ

日当たりのよい低木に成る果実。（柑橘系）

ホビットの子供でも採取できることから、封の岸でもよく栽培されている。

最初の新芽は黒色で、大きくなるにつれて実の色が変化する。（
黒 紺 青 緑 黄緑）

芽はベリー系の味から酢橘系の味へと変化なさるそうです。……
便利だな。

歪んだのは彼らだけのせいではない。

それでも、歪まずに残った一族も多かっただけに、彼女はそれを惜しむのだ。

「ティンクルドン、リンクルドン、とーびらっ、が、跳ねる」

「ティンクルドン、リンクルドン、つきよの、夜に」

「ティンクルドン、リンクルドン、トオ リイは、廻った！」

「この杭杭、何処へ、 往まきましようか」

「靈歌、か」

「ふふ。 　　ただの遊び歌よ？」

古の伝えはすでに無意味なものへと成りはてて、いま京香が歌っているのはただの遊び歌。

ホビット族の子供たちが教えてくれた、たわいのない手遊び歌。歌いながら、京香は教えてもらった手遊びの型を真似た。

「ティンクルドン、リンクルドン、つきとひが、ゆゝがむ」

「ティンクルドン、リンクルドン、三千の世々に」

「ティンクルドン、リンクルドン、トオ　　リイが、廻った！」

「この杭、何処へ、 　　ゆゝきましょゝうかみはしらのきみ」

「……悪趣味だな」

「え。そう？」

遊び歌の最後のメまで歌ったところで、イスランに趣味を疑われました。

可愛いじゃないか、影絵唄。

ぱたぱた両の指を動かして、ハイこれ鳥さんだよーんとかやってみた京香だった。

杭の穴には、磁気が生じる。

杭を中心に鳥は跳ぶ。

ときに世界を、あるいは時空をまたいで。

その翼の行き先を命じる存在の名を、神と叫んだのは過去の事。

「…やっぱり、あたしこの世界の神様好きじゃないなあ」

「俺に言つな」

神様の居ない世界で、跳ぶことを忘れた神従の鳥に、叶うことなら死をあげたい。

生きることがつらいきみが、それでもこの世界で生きたいと願ったなら。

歪んだその思いの下で、空を夢見てる自由な心を祝福してあげるから。

「次回の杭の定期点検、5年後でどうですかっつてさ」
ラテンの僕ちゃんが言ってたのよね。

「…いいんじゃないのか？」
ツンデレ、乙。

黒衣の魔王陛下が呆れた表情で呟いた。
わあい、レイちゃんの前ではその単語いつなよー、怒られるのは
あたしだ畜生め。

歪んだ彼等が杭の整備で心落ち着き、歪みを押さえられた頃。
なんでもない顔をして、言ってあげる。

『迷子の整備士、一名ご案内』

お土産は、ギフト持ちのクラフト・オギナ。

置いて行かれた寂しさなんて、綺麗に捨てて。

一緒に遊ぼう。

大好きな人
神様の代わりにもなれない、出来そこないの異界渡りと一緒に、
な。

本日の覚書

霊歌

スピリチュアル。

賛美唄であり、民族歌でもある。

変形したホビット族たちの手遊び歌。(指や腕を交差
させて遊ぶ)

京香は子守り中にこの歌を覚えてもらった。

神従の鳥。

胡鳥族の美称。 神在り世にて、神の言葉を運んだという謂
れがある。

神無き世にてはつかわれなくなった言葉。

跳ぶ

伝承において神の力を借りた神従の鳥は、『転移』を行ったとい
う。

時空転移が其処に含まれていたかは謎であるが、当時稼働中であ
った転移門を使用することなく『転移』ができたという説。
転移することを『跳ぶ』と称する。

【彼女の

発見】

見つけた。

枝は伸びた。

影は薄く伸びて、幾重もの幻をその識に施した。

識の外にある者に気付くことは容易ではない。

けれど、不可能なことでもない。

「なんだ、そこにいたのか」

黒い子供は呟いた。

在ると知れた幻影は破れ、子供の前に道は見えた。

壊れた場所に、紡がれたその軌跡。

「探したじゃないか、なあ？」

黒い子供は優しく語りかけるように。

「俺の玩具」

彼女を嗤う。

一人目の子供は消えて。
二人目の子供は嗤い。

末の子供は、
惑っている。

そして、子供たちは揃わない。

84 彼女と彼の、中間存在 其の一

ある日、ミニマムドラゴンに出会った。

そこ行くツン（な）ドラ（ゴン）くん、お姉さんとお茶しなうい？

……いいだろう。こっちに來い。

まさかの承諾を得て、びっくりしたのはこっちの方である。

だって、今の今まで人を無視しまくってたのあんたじゃんかー。

ちなみに嫌われていてもお茶に誘ってたのはあたしの方です。諦め悪くてすいません。

3年前の春の事。

あたし大っきらいフェスタを開催していたら くんとの劇的なビフォアアフターを招く直前のお話である。

「うんにゃ」

ぱちり。

「甘い」

ぱちり。

「…くんじゃ」

ぱちり。

「阿呆め」

ぱちり。ぱ……、

「……むぎゃあああ」

しまった、詰んだああああ。

「馬鹿だ」

ジェールム、奴の分のクリームプリンを持ってこい。ワシの勝ちじゃ。

自分が持ちこんだ携帯囲碁ゲームで大敗しました。そんなばかな。うつつ、まさかそんなところにリーチがいたとは」

「そんなことだから、貴様はスライムの核以下の頭脳しか持っておらんといわれるのだ」

もっとよく頭と眼を使え。

「誰が言ったの、それ？」

うつつ、今日のおやつが。

ワゴンに乗っけておいた、本日の賭け五目並べの景品が厨房の主人の手によって、ラくんの手元へと運ばれている。

「は！ 決まっておる」

「ワシじゃ」

「
x ふえま r x k ! !」

口元に真つ白な生クリームのお髭を作ったSな俺様に誰か天誅を
! ! ! !

と言葉にならない奇声を発しつつ祈った京香に対して、天が下した結論は。

「京香、五月蠅い」

隣の魔王さまからの不用の小玉乱舞でした。

チガウ、コッチ二天誅イライナイ！ あっちだあっち！

…五目並べよりも、オセロが好き。(ぼそり)

本日の覚書

【クリームは異世界の魔王城にて定着しつつある】

本日の注意事項

「マイフレンド！」

「ご友人さま！」

「「 我ら異世界コラボチーム、此処にありいいいい！」「
がしいいいいい！」

時折、魔王城の厨房付近ではこのような雄叫びが発せられます。
近辺を巡回する兵士の方々には、迅速かつ冷静な放置能力を磨く
ことをお勧めします。

熟練した兵士の方々は、速やかに魔王陛下あるいは最古の魔女殿
までの報告をお願いします。雄叫びの元凶が2〜3日、静かになる
ことがあります。

尚、この対処法は、魔王陛下あるいは最古の魔女殿のご気分によ
って、全く逆方向への暴走・暴発を誘発する恐れがありますので、
そのあたりの匙加減については慎重を期してください。
新兵は上司にしっかりと報連相を怠らないように。

魔王城警備総隊長 マラッカ・レン・プア

85 彼女と彼の、中間存在 其の二

一人目は、異世界の魔王。

彼は純粋な、純粋な、唯一人の存在。
世界のための一人。

呪縛された一人。

二人目は、異界渡りの娘。

彼女は不純で、不順な、壊れた存在。

彼女の持っている能力は、やがて彼女を壊すでしょう。
一人のために世界を壊せる、不殉な存在。

呪縛されてしまった、一人。

そして、二人の間に在るのは 一人の竜王。

独自の輪廻を廻る、一人ぼっちで完成している、 中間存在。

彼のための、彼女のための、 唯我 とはなれぬもの。

死の瞬間、彼はいつも思う。

また、還る、と。

諦めも通り越した、どこか壊れた感情はただただそれだけを呟く。

『行ってらっしゃい、ヴィラードⅡオークス』

白く輝く指が、彼の壊れた鱗を撫でた。

次に生まれるそのときには、またお前の姿を拝むのだろうな。レ

イクシエルⅡオッド

始原の魔女。

光が満ちる。

彼が彼であるための構成要素たるものが、溢れて足る。

『そして、お帰りなさい。』

最初で最後の竜王よ』

壊れた鱗と赤い血をみせていた筈の小さな竜の屍体はそこにはな

く、輝く白い竜卵が一つだけそこにはあった。

彼の存在を初めて見た時、ヴィラード「オークスは嫌悪したものだ。」

黒。

『全き色』、だ。

「……」
「……」

視線が合った。
が、お互いに言葉が出ない。

「……」

「……」

目の前の、知らぬ間に禅譲していたらしい魔王を眺める。

「何用じゃ？」

「……小さいんだな、竜王は」

孵化したばかりのワシへの言葉だとしてもそれは禁句だと、その身体に叩き込んでやるうか、小僧。

127イアの過去。

竜王ヴィラードⅡオークス(0)と第8代目魔王イスランⅡアル

Ⅱジェイク(54)の邂逅の節の事次第。

「やれやれ、面倒なことだな」

ヴィラード「オークスは定位置に腰を下ろしたまま、器用にもため息をついた。

「利点もある以上、仕方ないだろう」

そんなヴィラの定位置の主である城守たるイスランが席に着く。目の前に、小玉によく似た石が一つずつ。

イスランがその手を石にかざす。

「第8代は魔王にして城守たるもの、イスラン「アル」ジェイクが交す、受け入れよ」

イスランの呟きに石が浮かび、魔王の手の中に埋没していく。掌の皮膚にめり込み、骨に癒着する。

手の内部を通った石は、イスランが翳した手の真中、三指の付け根にある正中の位置で定着した。

それに続けるようにして、同じようにヴィラが手にした石を握ったままで、文句を告げた。

「『ヴィラード「オークス」がここに交す。受け入れよ」

石は発光し、ヴィラード「オークスの拳の爪に癒着した。

「∴ヴィラはいいよな、爪で」

「これはこれで気に入らんものなのだがな」

互いの手と爪に繋がった石は、更に静かな光を燈す。

春の 《石嶺》 を、ここに始めます。

光の中に、影が浮かび上がった。

本日の覚書

六魂 むつたま

小玉の親戚。

玄武の甲羅の欠片が原料。黒玉。

設定された存在の勧請文と骨への適合によって、他の勧請者との連絡が可能となる。

レスフィス^{II}ピオの作製品。

60年ほど前から、守たち限定に使用され始めた。

使用者にいささかの痛みと違和感を齎すのがいまの改良目標ポイント。

石嶺

守たちの定例報告会。

出欠については、各自の自己意志優先。

現議長は甲族のミリア^{II}ラピダ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6885n/>

君と過ごす日常的な非日常

2011年12月15日01時51分発行